

和尚の背中



和尚の背中

目次

正月の寺

香り梅

うつむき椿

醍醐味

鳩たばの海

かすみ比叡

小僧あしたの朝

塀の話

廻めぐり盃蘭盆

一休の松

正月の寺

「門松かどまついうんはな、あれは、地についとらんと意味がない」
和尚がいった。

もうどれくらいか、暮れになると思い出す。

あの頃、京都はほんとに寒かった。それが、その年はいつになく厳しくて、大燈忌を過ぎたあたりから、雪のぼらつく日が続いたかと思つたら、晦日には根雪ねゆきになつて、方丈庭の真竹の結界も、青い肩を隠すほどに積もりに積もつた。

そして朝あした、東の空がうつすら燃えて、東山もようやく峰筋を伸ばしはじめた薄明かりに、
かあーん、かあーん、

魚鼓ぎよこの乾いた音が廊下に響くのだつた。と、いつもなら勤行に、まっすぐ方丈に走るのが、
その日は、庫裡の書院にぼくらは急いだ。

ふーっ、ふーっ、

息も白く凍るばかり、濡れ縁ぬれえんが鉛色に鈍くてかり、感覚以上に素足の裏を刺激する。敷居を入ると廊下を背に並んで座つた。と、それを合図のように隣の隠寮の襖あが開いた。和尚だつた。

けれど押し黙ったまま、ぼくらを前に背筋を正した。つもりだろうが、いつもの猫背が抜け切れない。脇には黒漆の縁高が二重ね、一つには搗栗が、もう一つには熨し昆布が入っている、はずだった。ほかでもない、昨日、ぼくらが揃って支度したからだ、それをまず、和尚が一つずつ懐紙に取り、あとは畳の上を滑らせたのを、ぼくらも倣って取り分けた。

しん、しん、しん、

素足の甲から畳の冷えが体を伝い、

ぽり、ぽり、ぽり、

搗栗の碎ける音が乾いて響く、と、それだけ。

搗栗といったが、よくある、白で搗いて潰したあれではない。ふつうに秋に穫れたままの栗の実を、天日に干して焙烙で炒る。焙烙は素焼きの皿で、豆や胡麻を炒つたり、朝粥に入れる粉茶を焙じたり、焼き塩をつくつたり、どこの台所にも一、二枚はあつただろう。ゆつくり炒ると、茶色く焦げた殻のなかで、ぼらりと実が弾け、やがて、から、ころ、土鈴のような音がして、爪で割ると焦げ茶に照かつた丸い実が、ぼろりと落ちた。ちよつと見には甘栗のようでもあつたが、ただ固いばかりで、味も、素朴といえば聞こえはいいが、正直、二個三個とすすむものではなかつた。それを和尚は、ぽり、ぽり、やると、あとを続けた。

「あれはな、年の初めに吉凶を占う、いうてみたら、御神籤みtainなもんやな」

開かれた障子戸の外、濡れ縁の硝子戸越しに、肩に雪を乗せ、手水鉢に氷が光る。と、あとはどこも薄墨に、少しの彩を添えているのは真紅の万年青の実だけ、織部灯籠の裾に一株、これも頭に雪を被つて首を窄めていた。

——山には山神がいる。神といつてもほかでもない、その家の荒魂が年を経るうち穢れが取られて、やがて祖霊となつて、里のようす窺いにやつて来る。年に一度とはいわない、春は代掻きどきに、秋は穫り入れどきに、ほかにも孫子がうまくやつているか、折りを見てはやつて来る。そのはじめが年の暮れ、家の主が山まで迎えにいった。祖霊は山の木々に宿っている。もちろん人目にはつかなくて、だから木ごといつしよに引き抜いて、といつて大きいのは担げないから、せいぜい二、三年の若木を見繕つた……。

もちろん細かな言い回しは忘れたが、大凡、こんなふうだったと思ひ出している。ただ、それがどうして松の木だったか、とうとう訊けずに終わった。冬枯れの里山に、緑は松の木くらいしかなかったか、戻ると門口や庭先に立てかけた。若松だった。そうして正月を遣り過ごし、うまく根付けば吉と見て、秋の豊穰をねがい、逆に、萎んで枯れてしまえば凶として、春の田作りを前に心を正した。

「せやから門松も、根がのうては具合が悪い」
和尚はいった。

それにも、ぼくらは黙つたまま、ぼり、ぼり、と口のなかは舌と搗栗の修羅場だったが、そこは涼し顔に喉奥にごくりとやつて、休む間もなく熨し昆布をねじ込んだ。そしてまた、ぼり、ぼり、くちや、くちや、苦闘しながら、こつそり腰をひねつては悴む足の指を擦り合わせ、早く終われと祈るのだつた。

いうまでもない、搗栗は勝ちに、熨し昆布は慶ぶに通じるといふ件の做いだが、そのへんが禅門宗旨とどういふ関わりがあつたのか、和尚一人の気まぐれだつたか、これも訊けずに終わっている。ともかく搗栗は、いくらぐちよぐちよぐちよやつても舌の上に残つたし、熨し昆布に至つては、ぬめぬめと虫歯に詰まつて難儀した。けれど師弟向かい合つての年初め、気分は妙にきりりとしたものだつた。終わると和尚は、まずは自分に、あとは兄弟子から順繰りにぼくらに茶を点てた。もちろんその間も変わらず話は続くのだが、一巡すると、ぼくらを見回し、「まあ、そういうこつちや」と猫背を伸ばし、「今年も気張つてやつてくれ」と叱咤した。

それに一番上の兄弟子が、「よろしく、ご教示ねがいます」とお辞儀して座を締めた。

寂しいものの警えに正月の寺。いつもなら朝も早くから境内散歩に忙しい町家の爺婆も、正月ばかりは背を向ける。そんな年明けの宗門に、門松の話というのも妙なものだつたが、和尚の話とは裏腹に、山内どこの塔頭にも門松など影もなく、赤松並木の参道は泥沼のように、しんと静まり返つていた。

というのは外見そとみだけで、塀のなかで正月の寺はけっこう忙しかった。まずは大晦日から、ぼくらはほとんど眠っていない。山内挙げての暮れの仏事が本山伽藍で続いていたからだ。夜、十一時、まず鐘楼に鐘が鳴る。撞ついているのは禅道場の月番雲水だ。町家では年越しの蕎麦でもすすりながら、歌合戦の取とりを待っている頃だろう。禅門の年初行事、祝聖しゅくせいのはじまりだった。

除夜の鐘は、いまはどこにもあるが、もとは禅門にはじまっている。唐宋の頃だと和尚は教えだが、欠かさず朝夕の二回撞ついて修練の刻を知らせていた。夕焼け小焼けで陽が暮れて……、あの鐘は、きつとそんな名残だろう。数は百八、いろいろ謂いわれはあるけれど、この国にやつて来たのは鎌倉の頃らしく、室町に入ると百八撞くのは暮れの晦日の一夜だけになっている。百八は煩惱の数だとか、いろいろいつても、もともとインドで百八は、数え切れない、というくらいの意味だった。実際、雲水も数を忘れないよう、十撞とおくごとに一つずつ、割り箸のような短い棒切れを足元に並べて記憶の足しにしている。

そんな鐘の響くなかを山内住持が勢揃い、大燈以来の歴代住持の塔所、つまり塔頭を声明して回る。巡塔ふざん諷經ふざんといったが、終わって和尚が戻る頃にはすっかり年も越していた。

「お帰りなさい」

頭から蒲団を被つて、うつら、うつら、待ちに待ったぼくらは、それつ、とばかりに玄関に走つて迎え、返すその足でまた蒲団にもぐる。と、うと、うと、する間もなく、かあーん、か

あーん、方丈に魚鼓が鳴るのだった。打っていたのは一番上の兄弟子で、いつ、どんなふうに仮寝かりねをしたか、鍛練の人だった。

そして、さつきの搗栗と熨し昆布の、ぱり、ぱり、くちや、くちや、がはじまるのだが、終わると和尚は、そのまま隠寮に戻つて静かになった。けれどいくらしもないで、また続きの祝聖に出かける。これには一番上の兄弟子も脇侍わきじについて、ぼくらは二人を玄関に見送つた。

「いつてらつしやいませ」

凍てつく床ゆかに額ぬかずくと、「んっ」と一言、和尚は背中であつて、雪のなか、ふんわり浮かんだ飛び石に、二の字二の字に歯跡を残し、すた、すた、行つた。それを兄弟子が、風呂敷包みを小脇に追いかける。なかにはきつと木靴や法具が入つていただろう。まだ薄暗い足元を、綿雪が法衣の裾にあおられて、ふわり、ふわり、舞い上がる。それをたしかめ、ぼくらは、また蒲団に走つた。

仏殿では、愚中ぐちゆう大般若経といったと思うが、大般若経全六百巻の転読があつただろう。得度もなしに寺を逃げた小僧はそんなふうにしはいえない。だから人伝ひとでをもつともらしく続けてみるのだが、愚中というのは午前十時のことらしく、そのように朝の十時から大般若経の声明がはじまっている。といつても六百巻もの大部だから、まともにやつては日が暮れる。だから飛ばし飛ばしで狡ずるをする。これは愚中声明にかぎらず、和尚不在の勤行で、兄弟子の隠し技

の一つでもあつた。

ともかく愚中の経机には、経巻が山と積まれている。その一つ一つを、まず最初の七行を声高に唱えると、頭の上に高くかざし、アコーデオンを広げるように、ばらばらと手繰たぐつてみせる。と、今度は真ん中あたりの五行を唱えて、また、ばら、ばら。そして最後は終わりの三行を同じようにやつては次の巻へと移つていく。思い浮かべられるだけで、くすつとくるが、それを形振りかまわず続けるのだから、奇妙なけしきだつたにちがいない。

大般若経はあの玄奘三蔵がインドから持ち帰つて漢訳した。玄奘の最後の仕事で、この国には平安初期に伝わつたらしい。字数にして五百万字というから、単行本なら優に三十冊は超えるだろう。自然、すべてを唱えるには三日三晩かけても足りるかどうか、それをさらりと七五三に、数もきれいにすませてしまふ。小僧暮らしもそうだったが、仏教教理には、そんな不思議な理屈がいくつもあつて、ぼくらを悩ませた。

和尚はいつた。

「人間界のどろどろを、いらんもんは削そぎ落とし、得心のいくもんを理ことわりに編み出した、それが釈迦の教え、つまり仏教なんや」

けれど、ぼくらはいつも腹を空すかし、ただ眠りたかつただけ。だから正月も屎くそもなく、肅しゅく々と続いただらう祝聖の間も泥のように眠りこけた。

正月の寺



和尚の寺

あととは知らない。はたと気づいて跳び起きると、中庭に雪は止んでいた。どういふわけか、宵の雪も朝には上がる、不思議な京都の空だった。

そして北山嵐にも、あれほど碧く楚々としていた青木も一夜で凍てつき、葉は撓垂れ、幽霊の陰手のようにだらしがない。それを宥めるように綿雪が、白梅のかたい蕾をふんわり包み、花が開いたように温かかった。と、かた、かた、かた、かた、下駄の歯音に、ぼくらは蒲団を撥ねた。

「戻ったぞ」

大戸が開いて、和尚だった。後ろで兄弟子が鼻の頭を真つ赤にしている。

「雪は、止みかけが、いつちよう冷える」

玄関の上がり端に両手をつけて杳脱に下駄を脱ぐと、ぼくらを見回し、

「仕度しておけ」

短くいつて奥の書院に猫背に消えた。

そしていくらしもない。戻つた和尚は作務衣姿だった。もちろん、ぼくらも同じに待っている。恒例の年明け作務、といつても例年なら、参道の枯葉や落ち枝をさらりとやってそれで終わる。ところが大雪のその年は、南門を下りた歩道の雪掻きまで加わった。

門前の電車道は、さすがに雪の元旦、走る車もびたりとなくて、真ん中に軌道が四筋、黒く走ってなければ、ただの雪野原と見えただろう、大路がさらに広く見えた。すると余計に背筋

が寒く、たまらずみぞれ霽の浸しみる藁草履で何度も足踏みしてみるのだが、冷たさも通り越してただ痛いだけ。と、そこは我慢。枳きわいで雪を掻き、竹箒たけぼうしで掃きながら進むと、やがて手も足も不思議に、ほこ、ほこ、作務衣の背中も汗ばんだ。そうして半時、石畳の目地も露わに歩道が蘇った。

「かなんなあ」

背中に聞こえた。二人連れだった。道行みちゆきの肩を羽毛の襟巻えりまきに包んで首を窄すぼめ、建勲詣もちゅうもぎでか今宮詣でか、ぼくらを見留めると、

「おめでとうさん」

母親らしい年配女が白く息を残して通り過ぎた。

ぼくらは、のそつと会釈する。と、

「やあ、おめでとうさん、足元、気いつけてお詣りまいやす」

和尚がにつこりこたえた。

それにぼくらはあんぐり眼まなこ。京都も、ことに禅寺は町家と藁いらかは並べても、どこか一線を画するけしきがあつて、よほどの見知りでないかぎり、行きずりに声をかけることなど更々さらさらなくて、後にも先にもそれきりだった。

そんなことも懐かしく、電車道から、まっすぐ伸びる参道をぼくは辿っていた。あの頃は嫌

な道だった。それが、なんとなく温かい気がするから不思議で、

「ご無沙汰してます」

声をかけると振り向いた。南門のとぼ口だった。参道脇に背中を見せて屈かがんでいた。てつぺんの大きく平たいつるつる頭だからすぐわかる、一番上の兄弟子だった。

「ちよつと近くまで来たもんですから……」

そうではなかったが、そうしておいた。すると、しばらくあつて、

「おう、おまえか」

ようやく記憶を繋げてくれた。

家人は里に帰り、一人正月の、空虚うつろ暮らしのふらり旅だった。明けて二日でもよかったが、あの感触をどうしてもたしかめておきたかった。

「久しぶりやなあ、元気にやつとるか？」

団扇顔をさらに広げて目を細めた。

「やつぱり作務さむらいでしたね」

傍そばの杵きねを指さすと、あとはわかってくれたようだった。

ぼくには三人の兄弟子がいた。いっしょにいたのはばらばらで、いずれも僧堂勤めが終わったあと、すぐ上の一人は奈良の大宇陀の末寺に入り、中の兄弟子は和尚の寺を嗣ついでぎ、一番上の

兄弟子は、訳あつて偶々空いた隣の塔頭に入っていた。

「よう覚えとるなあ」

宗門には休日も旗日もなくて、元日といえども欠かさず作務に出る、あの頃の慣習をいつていた。

「いまはむかしとちごうて、祝聖のあとくらい、炬燵にもぐつとつてもええんやが、なんちゅうか、体が覚えとるんやな。ごろごろしてると気持ちが悪い」

いつてはみたが、ちよつとつらそうに両手を膝に立ち上がると、くの字に曲がつた腰を擦つた。

「齢には勝てんでな、へたつたら、じきにこないになりよる」

「あの年は大雪でしたね」

すると、またわかつてくれた。

「せやつたな、もう何年になるかなあ」

ぱた、ぱた、と、作務衣の塵を払いながら背を伸ばし遠くを眺める。そんな眉にも長く白いものが目立つようになっていた。

「五十年ですよ」

「そないになるかなあ。あちこち、体にがたが来るはずや」

首を捻つて笑つたが、ややあつて、ぼくを見据えた。

「で、ほんまは、序ついででやないんやろ」

とつくに見透かされていた。

「まあ、ええ、ひさしぶりや、ゆつくりしていけ。老夫婦としよりだけで、だれも居いひんわ」

と、くるりと背を向け、先を行つた。

思い立つたら、電話も入れずにふらりと訪ねる。ぼくの悪い癖で、胸の内で詫びながらあとについた。といつても目と鼻の先、南門とは築地続きの棟門を入ると、茶枯れた下りの苔庭を飛び石伝いに、とん、とん、行つて玄関脇の木戸をくぐつた。きーつ、蝶番ちょうつがいが情けなそうに小さく鳴いた。

「おーいっ」

勝手口で奥を呼んだ。

「めずらしいもんを拾うてきた」

人を塵か糸屑ちりくずのようで、小耳に障さわつたが、それもすぐに心地よい響きになつて消えている。どういふ理由わけか、結界くわいの内、特有の物言いで、ああ、そうだったね、と思ひ出していた。

「あら、ほんまや、めずらしい」

前垂れで手を拭きながらおくさんが暖簾から、と思つたら、

「はて？ どなたはんどしたかな」

この街らしい惚けといつしよに笑顔を返してくれた。軽く無沙汰をたしなめているのだった。

「久しぶりやね、おめでとうさん」

大阪も根っからの船場育ちなのに、すっかり京言葉が板についている。ただ、抑揚の匙加減がいま一つだった。ぼくもそうだが、大阪人に京言葉は難しい。どこか根っこのところで張り合うものがあるのか、綴りでは変わらなくても言葉の節々の上げ下げに、いうにいわれぬちがいがあつて、たとえば「おおきに」も、大阪では平たく流すが、京都人は「おーきに」と一山つくつて念を押す。だから大阪人がそれを真似ると、人を小馬鹿にするようで禁忌だが、檀越相手の鍛錬の成果か、おくさんの大阪訛りの京言葉にはあのべたつきがなく、さらりと柔らかく気持ちよかつた。

「お正月やからね」

あとについて通されたのは方丈の書院だった。それをすぐに兄弟子が追つてきて、

「ちよつと早いが、茶ちやあいうんもなんやから」

一升瓶を見せて、にやりとした。

「いけるやつとは、これにかぎる」

そうして、二人、昔語りに、やがて酔いも回り回つて、何を思ったか、兄弟子が、ぐいつと

呷あおった杯をぼくの鼻先に突き出した。

「それでやが、おまえはどない思う」

睨にらむように赤ら顔でいう。

んっ？

なんのことか、わからないでいると、

「わしも、そろそろ、けりをつけようと思うとる」

真顔にいった。

「息子ひとらも独り立ちして外でなんとかやつとおる。それはええんやが、気になるんはこの女ひとな
んやな」

脇には少し下がっておくさんが、につこり笑顔でちよこんといる。

「和尚がいうとつたんを覚えとらんのか？」

わからずにいると、呆れたようで、

「寡婦つげ、女犯の付を喰う」

吐はいて、への字に口を結んだ。

「……………」

返す言葉がなかった。

と、ぴしゃり、

障子戸の外、広縁先の泉水に、魚が跳ねた。

ぼくには意外だったが、和尚にもおくさんがいた。庫裡奥に人目を憚り、大黒という言葉もまだ少しは生きていた時代だった。それを不浄に思ったのが鉦の掛け違いで、やがて寺を逃げることにもなるのだが、何も知らない少年だった。

たしか東京の、ごふくばし、といったと思う、音の響きで浮かべるだけだが、帯の老舗問屋の出戻り娘で、齡の割りに丈のある、細面にきりつと柳葉目の、たぶんむかしはきれいな女だった。

「茶会で遇うたんを、人に頼まれて知り合いにすすめたんやが、ひよんなことでわしんところに来ることになった」

和尚は嘯いたが、さてどうだったか。ともに五十手前でいっしょになつて、七十を過ぎておくさんの方が卒中で寝込んだのを、五年見たあと冥土に送っている。その野辺送りをすませたの夜だった。

「ご苦労やった」

奥の書院にぼくらを並べて、ぼそりといった。

「可愛そうやったが、寿命やったと思う」

そして、あれこれ、ぼくらにも^{ねぎら}勞いを忘れなかったが、最後に一言、

「やつと、肩の荷が下りた」

だれにいうともなく呟いて、それでなくても撫^なで肩をさらに落として背中を丸めるのを、ぼくらは想い想いに見とめていた。

それを、同じように兄弟子が、

「あのときはわからなかったが、ここに来て骨身に染^しみる」

眉根を寄せていうのだった。

住持遷化^{せんげ}で住寺を明^あける、禪門には譲れない鉄則があつた。理屈はどうあれ、住持が逝^いけば寺を明け渡すのがあたりまえ。晋山^{しんざん}といつて次の住持がやつて来る。だから女は居られない。いまはどこもだれ合つて、娘に婿をとつてまで誤魔化しているが、ほんとうはいけないことで、行雲流水^{ところ}、処定めず遊行^{ゆぎやう}に生きるのが禅僧だから、本来、禅僧に住寺はもちろん戸籍もない。出家とは家を出ること、つまり姓を棄てること、父との縁を切ることなのだから。

それが明治に入つて、肉食、妻帯、蓄髪も勝手次第となり、それどころか苗字も持たねばならなくなつて、さらに生きる糧の托鉢まで禁じられてしまう。太政官布告、問答無用のお達^{たつ}しだった。ねらいはもちろん明治政府による寺領奪いだったが、苗字を持つというのは、素直に

いつて還俗すること、そうしてこの国に、ほんとうの出家は一人もいなくなっている。居処を定めたから、道に頭を聚むことなく、衣食のために生きねばならなくなった。宗門、とりわけ禅門の、じつは苦難のはじまりだった。

兄弟子は続けた。

「息子たちの世話になるんもええが、そうもいかんでな」

衣紋掛けのように厳いかつた肩もすっかり落ちていゝる。それをおくさんが脇から助けた。

「知ってはるやろか？ 男山のちよつとこつち。むかしは、竹藪がずうつと続いてたんが電車から見えましたやろ。あれがきれいさっぱり分譲地になつてね、そこに上の子夫婦がおるんですわ、孫もできて」

目を細めたが、

「けど、いろいろあつてねえ……」

兄弟子の横顔を窺うようにあとを濁した。

「どこにお勤めですか？」

ぼくは話を振った。

「はあ、大阪の天満の製菓会社に行つてるんやわ」

「早いもんですね」

いいながら、空で指折り算かぞえていた。あれはいつだったか、まだよちよち歩きだった。

「あつという間やった。男の子やったんでうれしゅうてな、学校に上がる前から剃髪かみして、経も教えてはみたんやが……、反対の方に行つてしもうた」

肩を落としてうつむいた。

だから、むかしをいつてみた。

「可愛かわかったですよね、くりくり頭あたまで。ほら、その広縁あぐらで胡座あぐらの膝に乗つて遊んでおられた。あれは何歳いくつぐらいでしたかね」

寺をしくじつて、十年ぶりだったか、訪ねた一日のことだった。兄弟子も家庭を持ち、子どもも二人が増えていた。それが墨染一色の禅寺に、淡く桃の花でも咲いたかのように、禅寺にもこんなけしきがあつたのか、とぼくらのむかしを思つて、不思議な温もりを、割り切れないまま、ぼくにはうれしかった。

「けど、よかつたと思うとる。いまは山内どこも息子や娘にあとをとらせよるが、あれは、やつぱりいかにこつちや」

ぼくは黙つてうなずいた。

「ほんまをいうたら、息子が二人とも、寺はやりとうない、て、いうてくれたんで胸を撫で下ろしたんやった。あとのことは、わしら二人の問題やからな」

すると、おくさんがにつこりいった。

「お嫁に来たときにね、わたし、この人にいうたんですわ。うちは好きでここに来ましたが、子どもには押しつけんときましょね、つて」

さつきまでの「和尚さん」が「この人」になっている。そして、よつこらしよ、と掛け声一つ、空いた銚子を盆の上に敷居を出た。その後ろ姿を、兄弟子が、そつと肩口から見送っている。

「住持の務めは、ほかでもない、預かつた寺を護るだけのこと、そしてもともとあつたままにお返りする、これに尽きるわな」

静かにいつて、

「たいしたことはできんかつたが、ここを護るだけは、わしにもできたと思うとる」

満足そうにした。

「ここは、ほんとに酷かつたですからね」

「そやつたなあ、本堂も、大棟が蛇のようにのた打つて、あちこち、ぺんぺん草まで生えとつた」

本山塔頭にあつて嘘のような話だが、ほんとうで、ぼくらの寺とは隣り合っていたから、荒みようも築地越しに窺えて、あれやこれや、京童さながら悪たれ口を叩いたものだった。ある

うことか、先住は博打に入れ上げ、終ては金貸しにまで手を出し、夜逃げ同然に雲隠れしていた。

子どもも、たしか女の子が二人いた。上の子は小学校に上がっていたか、表の参道で二人鞠つきをしたりゴム跳びをしたり、無心に遊ぶのを、遣い走りの行き帰りにそつと尻目に温かかった。その檻樓寺の再建に和尚は兄弟子を入れたのだった。あの頃、和尚は宗門筆頭の最高顧問、すべてが意のままだった。

「びつくりしたなあ、上がり端に立つたら、床が抜けたんやから」

団栗眼が団扇顔をさらに大きく見せた。

「それを大工を頼んで、いつしよに遣り替えたんやった」

「そうでしたか」

逃げたぼくはそれも知らない。

「屋根だけやのうて、建具も何も滅茶苦茶でな、障子の開け閉てもぎしぎしいうて、棧もあつちこち、毀れとつた。けど、もつたいのうて、部材を買ってきて挿げ替えたんやった。ほれ、そこも色が斑になつとるやろ」

広縁との仕切りだった。建て付けの怪しそうな障子戸を指さした。焦げ茶に煤けた棧の節々に色の浅く抜けたところがいくつも見える。すると、明るくいった。

「知ってるかな？ 修学院に抜ける、ほれ、雲母坂きららざかのかかりに古い百姓家が空あいてるらしいいな、植木屋の親爺が見つけてくれた」

比叡山の登り口に物置同然にあるらしかった。

「そうですね、茅葺きでね、だいぶ草くたび臥れてるみたいやけど、造りはしつかりしててね、二ふた間ま続つきに納戸とお勝手があつて、年寄り夫婦にはもつたないくらいで」

敷居の外、廊下を戻ったおくさんもうれしそうだった。それを兄弟子が振り向いて銚子をとると、

「熱いのんをいこう」

と促した。

「宗務総長も春には満願でな、大燈さんも、もうわしに用はないやろう、ええ頃合きざしいやと思うとる」

黙ったまま、返事代わりに杯を、ぼくはぐいつと空けて差し出した。酒には筈はずの兄弟子だったが、呑むとすぐに赤くなる。そこへ気の緩みも手伝ったか、火照ほてり顔をさらに赤らめ、ぼくも久しぶりに心地よく、時間を忘れ、夜は宿に戻れないままになっている。

それから一年、暮れの挨拶に送った新酒に、明けて春、短い便りがあった。

『御身健勝問候。歳晩、美酒惠贈、唯々感謝』

あの日蓮さんも顔負けに、ぺんぺんと裾の跳ねた勢いのいい筆だったのが、蚯蚓みみずが這はつたようにくねくねと、あちこち擦かすれたり、少しの震えも見えて、先をこう結んでいた。

『拙僧、故あり余生断酒を誓い候。只今、鍛錬中』

断酒？

嫌な気がした。

どこか体でも悪くされたかな？

心配したが、所番地の以前まえとちがうのに事情が読めた。

「やつと、自由になった……」

そんな声が聞こえる気がした。

香り梅

小僧部屋に一つ開いた腰窓の、明かり障子の向こうだった。本堂に続く渡り廊下を挟んで中庭の、深く苔を被った築山の裾に、腰丈ほどの雪見灯籠があつて、脇から梅の古木が傘を差しかけるように乾いた枝を広げていた。

それがなんとも花が遅くて、三月に入つてようやく、ここは桜に越されては顔が立たん、とばかり、薄紅色に蕾をつけた。そして半ばを過ぎると枝一面に大きく咲いて、寒の名残の北山嵐に、ひらり、ひらり、花卉を散らすと、薄茶に萎んだ萼の付け根を淡い緑に膨らませた。

丈はそんなでもなかった。いくら背伸びをしても、弓反りの本堂屋根の庇にも届かない。それでも毎年、七、八十は実つたか、梅雨はじめに庫裡裏のもう一本といつしよに摘んで、庭蔵から担ぎ出した丹波の大壺に塩を塗して重石を置いた。

そして二十日ばかり、壺の口まで果汁でいっぱいになったのを、一つ一つ取り出して、方丈庭に三日三晩、天日に干したあと、また大壺に戻し、塩揉みの紫蘇を着せてゆつくり寝かせた。それを朝に二、三粒、次の夏まで粥座の卓に乗せたのだった。

「わしが来たときから、あんなもんやつた」

和尚がいったから、ずいぶんな樹齡としだつただろう、ずんぐりむつくりの太い幹は中程から根元にかけて、ぼつくり、縦に大口を開けあ、がらんだうの腹腔おなかが痛々しかった。それがどうしたわけか、明くる年にはどの枝も隠れんばかりに花が付き、梅雨の長雨前には鈴なりに実を膨らませた。

「こいつ、どないしよつたんやろ？」

びつくりしたのは和尚だつた。ただ、ぼくら小僧は塩漬けしたあとの日干し作業がたいへんで、ふだんの竹籠だけでは足りなくて、夏の日除けに使っていた葺簀よしずを、これも庭蔵から引つ張り出して方丈庭に広げた。

そして秋口、台風一過の、からりと明けた朝だつた。苔庭の落ち葉や枯れ枝の後始末せむに忙しせわいぼくらの後ろで、倒れた。

それが、んっ？ と周りを見回したくらい、静かだつた。

「最期を悟しつとつたかな？」

すぐ傍の渡り廊下で和尚がいった。東司とうすへの帰りだつたか、寝間着姿で、いつもならばくの小僧といつしよの作務衣なのに、その日はめずらしく風邪をこじらせ寝込んでいた。

「寿命やろう、根方ねかたはそのままにしといてやれ」

体が辛かったか、それだけいうと奥の隠寮をさして、とぼ、とぼ、行つた。その丸めた背中

を、ぼくらは庭先から見送った。

「ほんに、これじゃ、倒れるわな」

根方を覗きながら上の兄弟子が、丸い目をさらにぱちくりさせて呟いた。黴なのか苔なのか、倒れた幹はかさかさに粉が吹いて、そのまま風呂の焚き口に突つ込めば、きれいさっぱり灰になつたにちがいない。ただ、兄弟子はやさしかった。鳥取の、たしか東郷の人だった。担いで運ぶと小枝を払い、庫裏裏の、納屋の軒下に立てかけた。それを後日、和尚が通りがけに見つけ、なにやら氣儘につくつて自慢した。

「ほれ、見い、ええ仏さんになりよつた」

どこにそんな技能があつたのか、といつてとくに鑿を揮つたわけでもなく、もちろんそれに堪えられるほどの幹でもなかつたから、ちよつと力を込めただけでも、さくつと毀れる。それを腕丈ほどに細長く手折り、あとは小刀で刮ぎ落としただけの素直なもので、勝手に仏の姿に見立てて隠察の客間の床に置いていた。円空のそれ、といえばかりよいか、もちろんいい過ぎなのはわかつているが、妙に和尚は氣に入つて、来る客相手に鼻の穴を膨らませた。

「どや？」

いわれて客もこたえようがない。けれどそこは人扱いは強者ぞろいで、

「なかなかのもんですな」

「決まり文句でさらりと躲す。そのように和尚が勝手に納得しているだけで、どんなに目を凝らしても、ただの枯木の木っ端だった。それが偶には、できた客もいて、

「ほおーつ、これ、和尚さんが？ なかなかよろしなあ。この辺りの線の流れ具合が、なんと
いうか、味があります」

とくすぐつてみせるのだが、そこまでだった。だから客が表に消えると、

「も一つ、わからんやつちゃ」

舌打ちして、一月ばかりでどこかにやってしまった。

そんなむかしも懐かしく、二人、彼岸過ぎの一日だった。

「大宇陀に行きたいんですが……」

近鉄名古屋線を桜井に下る少し手前、榛原駅の改札だった。駅員に訊くと、なんのことはない、すぐ前にバス乗り場があった。

県道に出ると、乗合バスは宇陀川に沿って、がた、ごと、走った。そして谷奥さして半時間ばかり、揺られ揺られて小学校らしき校舎を過ぎたあたりでたしかめてみた。

「かぎろひの丘って、こちら辺ですか？」

すると一瞬、首を傾げたが、すぐに笑顔が返ってきた。

「ああ、万葉公園な。それやったら次の停留所を右に入ったところすわ」

同年輩の運転手だった。

脇道を入ったが、春の空はわからない、東京でからりと晴れていたのが、名古屋に入ると薄墨雲が流れはじめ、名張を過ぎると、ぽつり、ぽつり、窓を濡らしていた。それが急に荒れ出して、広げた傘をしならせた。

「大丈夫？」

気遣いながら野道を行くと、くねくね坂の上りの終はてに大きな茅葺き屋根が頭を見せた。

「松源院を知つとるか？」

前の年の暮れだった。無沙汰続きにぶらりと大徳寺に上の兄弟子を訪ねていた。

「大宇陀のな、かぎろひの丘いうて、ほれ、人麻呂の、あれ……」

兄弟子もそうだったか、ぼくもここに来てちよつと惚ぼろけ気味で、すぐに言葉にできなかったのを、ええ、とわかつたふうにかたえると、

「あのちよつと先や、序ついででがあつたら、いつペン行つてみい」

といわれていた。

人麻呂の……、と兄弟子が額に手をやったのは、ひんがしの野かぎろひに陽炎の……、とはじまるあ

の歌だろう、あたりが整備され、名前もきれいに万葉公園となつてゐるらしかつた。

松源院といつたのは、大徳寺二十六世住持で、一休さんの兄弟子にあたる養叟宗願ようそうそういの塔所のことで法嗣ほつしの春浦宗漚しゅんぽそうきが開いている。大徳寺ではごく初期の塔所だが、失火で焼けて廃絶のままになつていた。それを和尚が大字陀に古民家を借りて再興していた。

養叟といへば、河内から紀ノ川に抜ける紀見峠にしばらく庵を結んでいたこともあるらしいが、どうして山内でなく、縁ゆかりも所縁ゆかりもない遠く離れた大字陀だつたのか、ぼくなりにいろいろ想像してみるのだがわからない。焼けた松源院の跡地には方丈を移したから、山内には影も形もなかつたが、代替地は境内南の外れの一面に残されていた。それを隣接する塔頭が、たぶん戦後のことだろう、いつの間やら自院の墓地に転用してしまつた。だから再興するにも行き場がなく、外そとに伝手つてをさがして大字陀を選んだのだつた。養叟には勝手のちがう馴れない土地で気の毒な気もするが、やつぱり、和尚は大徳寺最高顧問、すべてが我が意のままだつた。

養叟宗願という人は、法嗣の春浦宗漚同様、いろいろ話題の多い人だつたらしい。あちこちで女性との関係も取り沙汰され、一休さんの『狂雲集』や『自戒集』でも、二人とも、ここでもうなのも憚はばかるような口汚い言葉で扱こぎ下おろされてゐる。もちろん一休さんはいたいの人にそ
うなのだが……。ただ、女性といつても、二人が関係したのは、社会でいうその筋の人ではな
く、尼僧だつた。だから同業の一休さんも具体的なことまでは伝えていない。

ここで知っておきたいのは尼僧というもののほんとうの姿だ。この国での尼僧は、記録に残るところでは、蘇我馬子のもとで技術集団の長^{おさ}だった司馬達等の娘が、渡来した高句麗僧から受戒して善信と名乗ったのが最初とされている。それが翌年、物部の廢仏騒動で法衣を剥^はかれ、海石榴^{つばきい}市^{いち}といつて、いまなら駅前広場かコミュニティセンターにあたるだろうか、公衆の面前で鞭打ちにされたという週刊誌的な話も記紀にはあつて、女性の出家は容易でなく、天平期には国分寺と並んで国分尼寺もつくられるが、以後、平安期を通じて女性に戒を授けることは許されなかつた。

もちろん貴族の妻たちは、床^{とこま}避りといつて、一定年齢を過ぎると若い後妻^{うわなり}にあとを譲つて出家、尼になることがふつうにあつた。ただ、それもあくまで私的なもので、正式な尼僧はどこにもいなかつた。平安仏教の双璧、空海^{たかの}の高野でも最澄の比叡^{ひえ}でも尼僧への授戒の例はない。それに道を開いたのが鎌倉仏教だった。多くは室町期に入つてからのことだが、ことに臨濟禅で盛んだつた。ちようど養叟の頃にあたる。スポンサーである檀越^{だんご}の室町貴族や足利將軍一家の女たちの要望にこたえたもので、本音をいえばかれらからの寄進を期待したもののだが、養叟も春浦も盛んに授戒した。だから女性の出入りも当然だつた。

同じことは武士社会にもいえて、平安仏教から疎外された新興の鎌倉仏教は、中央貴族社会から弾^はかれた地方武士団に門戸を開くことで宗門維持を図り、地方武士はそれを受け容れるこ

とで中央に勢力を結ぼうとした。地方武士団に、禪、ことに臨濟禪の帰依者が多かつたのはその結果で、春浦の場合は、たとえば関東武士団の雄、北条早雲が若い頃から師事していた。

「あれかしら？」

前まへを行つていたのが思案顔に振り返つた。二人だけの野道は、春の嵐の小高い丘を上つてゐる。それをさして、途中、民家を二、三軒、やり過ぎして辿ると黒塗りの長屋門の前に出た。ずつしりと重そうな、四角張つた門柱に青い真竹の結界が二本、ぴしやりと、向こうとこちらを隔へてゐる。どこか俗世を蔑さげすむようで、むかしを思い出して足が竦すくんだ。

「入れないのかしら？」

不安そうにした。

すると、後ろで声がした。

「お詣りですか？」

後ろ手に、白髪頭の老翁らうおうだつた。

「以前まえは、こんなやなかつたんですがな」

苦々しそうに青竹を顎あごでさした。

「いくら流儀りゅうぎいうても、わしら村の者もんにしたら、なんや除のけ者もんにされてるようで、いただけま

へん」

と、呆れ顔。

「前任の和尚さんは、そら、まあ、気のええ人でな、門もどこも開けつ広げで、わしらも用もないのに、茶飲み話に入ったり……。それが、今度の人はこれですわ」

門柱の厚い木札を睨みつけるようにした。拝観謝絶、と筆跡も黒々と真新しかった。それを二人、遠く、何気に眺めていると、気の毒に思ったか、

「なんやったら、頼んでみまひよか」

氣遣つてくれたが、むかしは結界の内の一人だったから、拝観など、そんなつもりは更々な
く、

「結構ですよ」

とお礼をいったが、隣を見ると、気になつてしかたがないらしく、ちよこ、ちよこ、行くと青竹の結界越しに奥を窺うように身を乗り出した。何にでもすぐに興味を示して、おまけに諦めの悪い人だから、旅の先々でそんなふうにいるも二人はちぐはぐになる。ただ、その日はぼくもつい釣られ、あとを追つて後ろを肩口から首を伸ばした。

まず、まっすぐ、枝垂れ桜の老木が目飛び込んできた。庭先のどん突きに存在感を示していたが、花はまだない。そして後ろの白壁塀の上には、吉野の峰々だろう、烟つて見える。そ

の脇に長棟の母屋が手前から長く続いていた。桁行十間はあるだろう、大棟だが、ふつうの民家で、濡れ縁も入り口の大戸もびしやりと閉ざされたまま。入母屋の大屋根は、茅葺きだったのを葺き替えたか、鼠瓦が真新しかった。

「へえー」

何かを見つけたようだった。

「どうかした？」

「ほら、あそこ」

大棟の妻のあたりを指さした。

「なんか、変よね、あの窓」

いわれてみれば、破風の真下に、明かり採りなのか、小窓が見えて、青やら赤やら緑色に光っている。ステンドグラスだった。

「お寺なのに、なんか、意味があるの？」

と、ぼくを見上げた。そして、息つく間もなく、

「ほら、このあいだの、あそこ、あれといっしょよ。何ていったっけ、あのお寺」
んっ……？

「そう、そう、新薬師寺よ、あそこの窓も同じだった」

自答して、一人、すつきりしていた。

このあいだ、といったがもうずいぶんになる。三輪山の裾から山辺やまのへの上ツ道かみつみちを北に春日まで歩いたときのこと、日の暮れ前にそばを通ったので訪ねていた。日本最古だという十二神將をおさめた堂宇の一面の東側だったか連子窓れんじまどに、不思議な緑や赤の賑やかなステンドグラスが嵌はまっています、二人、目を丸くしたのだった。おまけにモーツァルトだったか、リフレインのしつこい音楽も流れていた。

「ほんま、けつたいでつしやる？」

後ろで老爺だった。

「ようわからんのやが、あすこで、なんや、坐禅でもしよるみたいで、むかしの屋根裏をやり替えたんやろな、仏さんも祀まつつてあるらしいてな。ときどき外人さんも来てなざつて、妙な音楽もかかつとりますわ」

「禅堂かしら？」

脇からいった。最近、けつこよう仏教伽藍に詳しくなっている。

「そうでつしやるな、もう三年になりますやろか、大おおきな台風が来よりましてな、屋根が飛ばされたんですわ。それでわしらも手て伝とうて葺つくき替えたんやが、そのときに改造なさつたんやろな」

老爺も入ったことがないようだった。

ぼくは思い出していた。

「新聞、見たかい？」

晩飯のあと、ごろりと横になつてテレビを見ていたら電話が鳴つて、受話器を取ると親友だった。

「和尚さん、亡くなつたね。訃報に出てるよ」

そして明くる始発の新幹線に乗つたのだつた。

逃亡のあと一度も訪ねていない。盆前の暑い一日だった。記帳の列に並び、仏殿の柩の前に手を合わせ、ふと見上げると、うおーん、うおーん、と声明の重く響くなかを、けしきのちがいに、あれっ？ と思つた。仏殿古来の瓦敷きの床はそれでいいのだが、脇の連子窓れんじまどに光が鮮やか過ぎた。びつくりした。なんと、七色のステンドグラスが填はまっている。

逃亡のあとしばらくして和尚は中の兄弟子にあとを譲り、本坊裏に、開山大燈の孫弟子にあたる言外宗忠の塔所を復興して移つていた。だからぼくにははじめてだった。禅門にどうしてステンドグラスなのか、不思議だったが、和尚のことだ、きつと深い理由わけがあるんだろう、とそれぐらいに思つて心の隅にかたづけられていた。

和尚は、百歳を過ぎても変わらずにいた。

——お茶と作務は、長生きの秘訣じゃ、

口癖だった。抹茶を飲むと癌にならないらしかった。毎日欠かさず作務を続けると惚け（ほう）ないらしかった。人一倍、健康を気にかける人だった。

といつてもさすがに足腰も弱り、冬の日、朝課の仏殿で転んで瓦床に腰をむさんこに打ちつけ、車椅子暮らしになっていた。けれど元気でいた。

それが急に逝った。百と五歳だった。この国の僧尼に長生きが多いが、なかでも最上位に入るだろう。野送りには山内住持がそろつて顔を並べた。法衣袈裟懸け姿で、それぞれ腹を抱えるようにでんとはしているが、よく見ると、あれ、あいつか？ あれもだ、と、かすかに覚えのある顔もいくつかあつて、といつてもやはり落第小僧の身、はばか 憚るようにして遠く柩を見送った。

ゆるり、ゆるり、時を惜しむかのように黒塗り車が参道を行く。と、引かれるようにして、位牌そして骨箱を胸前に、上の兄弟子と中の兄弟子が先導して、そろり、そろり、列が続いた。和尚には、知つてる限り六人の弟子がいた。けれど、結局は二人だけになっている。その葬列のどん尻に参道を外してぼくはついたが、三門を過ぎて惣門にかかる手前だった。列はいったん足を止め、上の兄弟子と中の兄弟子がやはり位牌と骨箱を胸前のまま参道を逸（そ）れ、三門の東

脇を奥に向かった。あたりは、一見、変わらないように見えたが、生け垣に隠れるように鉄柵ができて、立ち入り禁止の高札もかかっている。思案のしどころだったが、かまわず人垣を抜け、少しの距離を置いてぼくは二人を追いかけた。

左に三門、仏殿、法堂が一直線に、右手に浴室と経蔵が変わらずあるが、ふと、むかしのけしきが記憶の底から溢れ出て胸が熱くなった。

せかせか先を行く和尚、

屈み込む和尚、

振り向く和尚……、

その背中を追って作務に走ったのだった。そしてどん突き、方丈を囲む白塀前で二人は足を止め、徐ろに経を上げはじめた。塀の向こうには開山大燈の廟があるはずだ。ほんとうなら亡骸といっしょのところを、和尚に代わって開山に別れを告げるためだろう、そうして黒車は惣門を抜け、和尚の七十年の大徳寺も終わっている。

「どうです？ こつちに来て一服いっぱくはつたら」

老爺に誘われて入ったのは松源院とは野道を挟んで斜向はすむかい、真つ黒な煤壁に真つ白な海鼠なまこ漆喰壁の対比も鮮やかな土蔵だった。棟の瓦も新しい。その入り口の三和土の隅に、老爺は丸



緑のアーチの参道

椅子を二つすすめてくれた。

「ご存知やろか、京都の大徳寺はん？ その和尚さんの記念館なんですわ。有名な方としてな」

いいながら脇の小部屋に入り、しばらく、こと、こと、やっていたが、やがて湯呑みを載せた丸盆片手に戻ってきた。

「遺品やらなんやら、いろいろ置いとりましてな。無料で公開してますんやが、いうてもこんな田舎でつしやろ、滅多に客ものうて、大概は閉めとるんですが、休みの日だけ、こないして交替で留守番がてらに来てますんや。村の老人会ですわ」

変わらず笑顔がいい。もちろん兄弟子から聞いて知っている。それが目的で来たのだが、老爺に悪い気がして、行きずり、ということにしておいた。

「一階の方は、村の民俗資料室ちゆうことになつとりましてな」
奥の扉を指さした。染みだらけの節樽立った指だった。

「いうても、ぶつちやけた話、唐箕や蓑傘や、ご存知やろか？ それに古い指物もおますがな、百姓家のごたごたを並べとるんですわ。和尚さんのは二階で、ほれ、その階段を上がつた先にスイッチがおますさかい、好きなように見たってください。人がおらんに、点けつぱなしいうんももつたないんで消しとるんですわ」

そのように、階段を上がった先は踊り場から真つ暗だった。が、やがて馴れた目に壁のスイッチも見つかつて、ぱちん、と入れると陳列室だった。季節のせいもあつたが、寒々として黴臭い。

「へえー」

脇で、齡に似合わず黄色い声を上げた。驚きなのか期待外れなのか、けれどぼくには宝物の隠れた秘密の蔵のようだった。

まず見つけたのが頂相ちんぞうだった。禅門流の肖像画といえばいいだろうか、射貫くような険しい目つきだが、ぼくにはわかる笑みがあつた。

「これ、和尚さん？」

顎をしゃくり上げた。

「何歳いくつぐらいかしら、ずいぶん若く見えるわね」

「いた頃じゃないかな」

適当だったが、そんなに外れてもいないだろう。あの頃、和尚はもう七十近かつた。ただ、だれの目にも十とおは若く見えただろう、せかせかと忙しい人だった。そんなことも懐かしく、次の陳列棚に丸い硯すずりを見つけた。おーい！ 奥の隠察から呼ばれては、墨を磨すらされた。野面石をそのまま彫り上げた和尚好みの逸品だった。

それでまた思い出した。

和尚はときにとんでもないことをする人で、庫裡玄関の上がり端の床が緩んで新しく張り替えたときも、削り立ての無垢板が周りにそぐわない、と、ぼくらに墨を磨らせて床に流し、擦らせた上に菜種油をぶつちやけ、雑巾で磨かせた。いくら擦つても足の裏にべとついて始末に困った。けれど一月もすれば不思議にさらりと溶け込んで、煤けたむかしに姿を戻した。

かと思つたら、今度は庫裡の書院の壁裾が汚くなつたのを、上から和紙を貼り、同じようにぼくらに墨を磨らせると、いきなりそれに向かつて筆を走らせた。ぼくらはあんぐり眼で眺めている。「どや、ようできとるやろ」と和尚はいつて、はっ？ と、ぼくらは首を捻つたが、それでも遠目に見ると、なんとなく絵に見えたから不思議で、寒山拾得のそれらしかった。以来、来る客来る客、捉まえては鼻の穴を膨らませたが、それも一月しないで終わっている。

「これ、和尚さんがつくつたの？」

隣の陳列に茶杓を見つけている。胡麻竹のいわゆる逆樋というやつで、權先にうつすら叢雲が渦巻いている。脇の詰筒には、日蓮さながら、筆足の激しく撥ねた銘があった。まちがいない、和尚のだ。

飽き性なくせに、やり出すと変に根を詰める。茶杓造りもそんな一つで、隠寮の書院で小刀

片手に奮闘していた。なんでも、やつかいなのは櫛先を撓めるときだそうで、一日、水に浸けたのを、蠟燭の火にそおつとかざして、曲げてはかざしを繰り返すのだが、廊下の陰からそつと覗くと、熱つ！と耳朶に指をやつたり、磨くためだろう、中庭の軒先下に木賊採りに走つたり、忙しくやつていたが、やがて艶やかな、それでいて渋い逸品に仕上がっている。まちがいない、仕上げは法衣の袖先に唾をつけて擦つたのだろう。ほかにも机の上や飾り棚や、和尚の身の回りの道具の照かりは、みんな唾をつけてのそれだった。

四つ目の陳列は蒐集の骨董だった。といつても並んでいたのはほとんどが我楽多で、それもそのはず、これはと思つたものは手に入れた尻から、客に土産に持たせていた。あれこれ集めはしても執着のない人だった。もちろんブランド嫌いだから、野良ものばかりを漁つては、「これにわしの花押が付いたら値が変わる」と嘯いていた。

そんな声も懐かしく、記念館をあとに野道を戻ると、来がけには気づかなかつた丘の外れに杜が見えた。ちょうど雨も上がつて雲間に青い空が覗いている。

「行つてみる？」

やつぱり振り返つたのを、また牽かれて野道に入ると、柵田の裾を大きく巻いてその先だった。

阿紀神社、鳥居をくぐると高札にそうあつた。いまにも倒れそうに傾いて、おまけに腐りかけてもいたが縁起が記してあつた。垂仁記らしい。垂仁の遣いで娘の倭媛が、天照大神の御霊を大宇陀に移した。ところが天照大神は、ここは嫌だといつて伊賀から近江に出たり美濃に行つたり、やがて伊勢に落ち着いた。伊勢といつてもいまの志摩ではなく、あの頃の伊勢はせいぜい四日市あたりまでだつた。だから伊勢神宮というのもちよつと怪しい。地名は人口の増加や文化の発展によつて周縁に移動する。神武が辿つた熊野というのも、じつは紀ノ川沿いのことで、大和の周縁、つまり、隈野だつたのが、文化が広がつて半島の南の終てまで移動した。だからいまの伊勢神宮の歴史もそんなに古くはなくて、たとえば熱田神宮の方がきつと古いだろう。天照大神も一代前の崇神のときは、娘の豊鍬入媛に祀られて三輪山の西麓の磯城にいた。これは勝手な想像だが、崇神期に同盟関係にあつた天照大神に象徴される部族、つまり海女族との関係が次の垂仁期には崩れてしまい、海女族は転々と移動する、その最初が大宇陀で阿紀神社のあたりだつたということになる。そして万葉の頃には牧になつていたらしく、そこに狩りに出かけて歌つたのが、人麻呂のあの歌だつた。

そんなことを二人話しながら境内をあちこちそぞろ歩いて、さて、帰ろうかと戻つた社務所の前だつた。

「どちらから？」

硝子戸が開いて、胡麻塩頭の爺さんだった。社務所といつても待合のような小屋掛けで、奥を覗くと同年輩の四、五人が板の間に火鉢を囲んで一杯やっていた。普段着のまま、月番仲間か、湯呑み片手にご機嫌だった。

「東京です」

こたえると、

「ご苦労さんです」

と、ぺこりとお辞儀をしたが、それからが意外だった。

「せっかくのお詣りですよって」

揉み手をしながら、硝子戸の外に置いた縁台に、ちら、ちら、目を遣る。

「どうです？ 一つ、御守でも……」

縁台に広げた白布の上には、絵馬やら御札にまぎって、あたりで穫れるのか、干し椎茸もビニール袋に入って並んでいた。

えっ？ 二人、顔を見合わせた。

そして素直に手が出たのが御璽の御札だった。

「じゃあ、これを」

と、とって差し出すと、

「おおきに、五百円ですわ」

喜色満面、今度は深くお辞儀した。

困ったのは、その御札のおさめどころだった。家に帰って部屋を見渡し、戸棚やら鴨居の上やら、垂仁の天照大神さながら、あちこち祀まつつてみたが、どこも落ち着かなくて、とどのつまり、トイレに座った目の前に、ちょうどいい飾り棚が見つかつて、その板壁にもたれておさまった。思案の末の苦肉の策だった。

それが明るる日、いつものように、その人がやってきて、

「ちよつと、借りるよ」

とトイレに立ったのが、そのまま流れる音もなく戻つて来た。

「どうされました？」

心配したら、

「このトイレ、畏おそれ多くてできないね」

笑つて、いつものように話を続けたが、やはり我慢しきれなくなつたか、

「きょうは、これで」

と椅子を立った。

ぼくを弟のように親しくしてくれる人で、毎日の散歩の途中、いつも時間を計つたかのよう

に、ぴん、ぽんつ、と現われるのがカントのようで、あれこれ茶飲み話をしては帰っていく。話といつても、いつも筋のモジュールは整っていて、最後の組み立てとバグ取りのつもりなのだろう、話したのがそっくりそのまま、しばらくすると、早いときは一月後には雑誌に載って、半年後には本にもなった。

農民詩人とだけ明かしておこう、その人もいまは和尚と同じに鬼籍に入り、だから毎朝、御札には、二つの影を重ねながら、しゃがんでは、深くお辞儀してすつきりしている。

そして、あの梅の木はどうなったか。そつと倒れた明くる春だった。

「おーい」

和尚の声に走ると、中庭に背中を丸めて蹠うずくまり、枯れ株を、じいつと食い入るように覗いている。

「ほれ、若芽が出よるわな」

うれしそうに指さした、その先に、小さく振よじれた萌黄もえぎの若芽が風に吹かれて揺れていた。

「ようがんぼつとるわい」

につこりいったのを、ぼくはいまも忘れないでいる。

うつむき椿

方丈庭は比叡山を借景に、東から南にく、の字に広がり、築地際には白壁を背に、大人の腰丈ばかりに山茶花の植え込みが続いていた。花弁は白、暮れからちらほら開くと、旧正月を迎える前には盛りになつて、それがどれも、こちらに背中を向けて隠れるように咲くからおかしかった。

「むかしの椿いうんは、あれは山茶花のことやな」

和尚の話はいつも突飛に、結びからはじまる。粥座といつて、毎朝、文字通り茶粥と沢庵の簡単な朝飯のあと欠かさず茶礼があつて、ぼくらを前に一人一人に茶を点てながら、あれこれ話すのが和尚の日課になつていた。ねたはもちろん和尚の思いつきで、季節に因んだこともあつたが、だから中身は和尚好みで、ぼくには聞いたこともない、ときにはわけのわからない話ばかりだつた。それがいまになつて耳奥に、気の抜けたサイダーの泡ぶくのように、ぷつくり湧き出てくるから不思議だ。

とにかく時間があれば机に向かつている人で、物知りにながいがいなかったが、といつて毎日のことだから、ときには和尚流の作り話もあったかも知れない。そんな和尚に一番上の兄弟子は

心得ていて、話をはじめると、ときにはにんまりしながら小指を口にやるとそのまま肩に運んだりしてぼくらに合図を送ったが、あの日にかぎってそれはなかった。

「おまえらもよう知ってるやろが、いまの椿の盛りは春やわな。どんなに早ようても三月にか咲きよらん」

どんな話がどこまで続くのか、気が気でないが、しかたがない、ぼくらはそれぞれにうなずいた。そのように方丈庭の西の隅、唐門からんに続く玄関脇に、あれは春日かすがさんといつていたが、たぶん神仏混淆の名残だろう、どうして神明社や諏訪社でなかったか、小さな祠ほくらがあつて、脇からそれを抱きかかえるように大きな椿の老木があつた。幹は大人の一抱えもあつただろう、成長の遅い椿だから齡としも百歳、いや、もつとだつたかも知れない。薄鼠の木肌に亜麻色の斑まだらを散らした太い幹はあちこち瘤こぶだらけで、ずんぐり、むつくり、まるで仁王さまだつた。

和尚は続けた。

「椿は木偏きへんに春と書くやろが」

いいながら軽く湯を注いだ井戸茶碗ちやせんに茶筌ちやせんをさして、二、三回、くる、くる、濯すすぐと膝脇の建水けんすいの上に運んで、すつと反かえした。

「けど、あの春いうんは、いまのようなららかな春やのうて、新たかな春、つまり正月のことなんやな」

茶碗のお湯は、建水の上で行き場を失い、一瞬、きらりと光った。そして、次には滝のように細い帯を描くと、ほの白い煙を残して建水のなかに、ぴしゃつと消えた。

「せやから、椿は正月には咲いておらんといかんことになる。ちようどいま時分じぶんやな」と廊下の向こう、坪庭に目をやった。

「見てみい、まだどこにも咲いとらん。それで思うんやが、あの椿いうんは山茶花のことなや」

ぼくらを見回しながら自慢したり顔にいうのだった。そんな和尚は、あの頃、とつくに七十を過ぎていただろう。いまのぼくからすれば超人のように思えるが、毎朝、茶事を終えると小雨のなかでも木枯らしの日でも、欠かさず作務さむに走って出た。

——禅の真髄は作務にあり、

和尚の口癖で、

——勤おそしみに上下なく師弟あまね普まい邁じん進する、これを普請ふしんという、

何かにつけ、ぼくらに説いた。ほかでもない、道路や橋梁はしの工事をいうあの普請も、もとは師弟あまねそろって作務さむに励むという禅の言葉だったらしいが、この作務というのがぼくにはほんときつかった。

「きょうはどこやろか、あれがなければええがなあ……」

愚痴る兄弟子と並んで、判決を待つ思いで和尚の丸い背中を追った。あれというのは溝浚えのこと。山内伽藍を囲むようにあつた堀割の掃除で、むかしはぐるりと伽藍南の電車通りの方まであつたらしいが、昭和初めの市電敷設の道路拡張で埋められて、ぼくらの頃には東の惣門前を南北に残っているぎりだった。

溝浚えといつても、縁に立つて杷や鍬で掻き上げるなんて、そんな生やさしいものでもちろんない。薄氷の泥濘にぬるりと下りて、長靴もない、素足に藁草履のままだった。冬は薄く氷が張っている。夏はそれがなかつた代わりに、ねっとり、皮膚に纏わりつく泥の饅えた臭いに鼻が曲がった。

これが作務のワーストワン。次いで境内南の参道沿いの枳殻の垣根周りの掃除だった。観光客や近隣町家の悪たれたちが遊びにやって来ては投げていく塵や紙屑が風に飛ばされ垣根のなかに絡まっている。それを取ったり落ち葉を払ったり、軍手もない素手でやるのだから、指に棘が刺さるのもあたりまえで、下手をすると手の甲の皮膚が裂けて血が滲んだ。

救い一つ、和尚の仏心だけ。偶に参道をひよっこり止まると、思い出したかのように振り向いた。

「そや、きようは、おまえは方丈に行け」

このおまえがだれなのか、ただの気まぐれでは決してなくて、過去数日の、いわゆる行ない

の査定の結果で、選ばれし者は地獄の亡者が蜘蛛の糸でも掴んだかのように小躍りして参道に戻った。

だから、ぼくらにとつて冬の溝浚えはシベリア送りのようなものだった。比べて方丈作務は極楽で、苔庭の落ち葉や塀際に、気儘に散り落ちた山茶花の花弁を拾い回つてそれで終い。もちろん寒いことに変わりなかったが、苔の蒲団は縮かんだ足の裏にふわりふわりと温かかったし、高い築地は身を切る北山風から救つてくれて、半ば庭を愉しむ余裕すらあった。だからどこにどんな植え込みや立木があつたか、いまもぼくは思いのままに浮かべることができる。「それと思うんが、お水取りのことやな」

晒し木綿の短冊布巾を四つ折りに、片方を人差し指に絡めると、もう一方を茶碗の肩にかけ、時計廻りに、ぐい、ぐいつ、拭つた。

「あれは修二会いうてな、印度で年初めに仏さんに華を供える行事やつた」

いいながら、きれいになつた茶碗を膝先にそつと置いて前の棗に手を伸ばす。そして上の茶杓を右手でとると薬指と小指で軽く握り、左手で胴を掴んで膝の上に乗せ、右手の残つた三つ指で蓋をつまんでひらりと開ける。と、蓋に引かれてふんわりと、鶯色に抹茶の煙が舞い上がった。

「あの華というんがどんな花やつたんか、わからんのやが、おまえらも知つとるやろ？ 東大

寺のあの二月堂のは椿の花を供えよる」

これには一番上の兄弟子がうなずいた。

「けど、あれは、なんちゅうか、造花やな。紙を赤う染めとるらしいが、あれがわしには不思議でならん」

そして茶杓で二匙、茶碗に運ぶと鉄瓶から湯を注ぎ、茶筌を握ると、ぐあしや、ぐあしや、混ぜた。和尚のお茶は忙しくて、点てるといふより捏ねくり回すといった方がいい。茶碗の底を掻きまわすように力任せにやるから、茶筌の先の欠けたのが泡ぶくに隠れていることもときどきあつて怖かった。けれど、その分、味は極上。きらきらと泡ぶくも若葉色にふんわり膨らみ、それをぼくらは見様見真似で覚えている。

——茶はかたちから、

和尚の流儀で、

——作法は見てとれ、

ぼくらに教えた。

「それであれこれ考えるんやが、仏さんの供華に造花いうんは感心できん話で、むかしは造花なんぞなかつたやろし、あの時節に椿も咲いとらんしな」

供華は供花とも書いて、仏に供える四季折々の花のことだが、だから修二会の椿というのは、

じつは初春に咲く椿、つまり山茶花だろうというのだった。

東大寺は平城京の一条大路の東の終て、若草山の麓に開け、広大な寺域に、なかでも二月堂は法華堂と並ぶ一番高みにあつて、なにより舞台からの眺めがすばらしい。足元に大仏殿の大屋根を見下ろして、緑の杜の向こうに興福寺の五重塔を見越して鼠一色に町家の葺が広がる。遙か先に碧く屏風のように煙るのが信貴生駒の峰々だ。

だから夜景もまた格別。街中の社寺とちがつて二月堂は夜も開放されたまま、いつ訪ねてもそのままにある。凍てつくような冬の夜、燈明だけの薄闇に、一つ、二つ、と舞台の欄干に沈む無言の背中があつたり、ふと摺り足の気配に振り向くと、小さく唱えるお百度踏みの中の影があつたりもする。好きなけしきの一つだが、修二会はお水取りといった方がわかりやすいか、二月堂の春の恒例で、供える椿の花は舞台から南の石段を降りた広場の白壁塀のなか、良弁を祀つた開山堂があつて、その椿を模したものと縁起は伝える。なんでも綾部の黒谷和紙を使つたらしく、毎年、練行衆と呼ばれる役僧たちが手造りしている。それを裏の春日山から伐り出した藪椿の生木の枝に飾り付けたのを供華として、二月堂の内陣の浄めに使つたり、本尊の十一面観音に供えたり、大きいのは堂の四隅に立てかけるらしくて、一度、勤行最中の内陣を堂宇の背中から覗いたが、凍りつくような深夜、一種、不気味な闇中の秘儀だった。

東大寺にかぎらない。法隆寺でも薬師寺でも同じように修二会はあつて、いまは三月の頭か

らに決まつているが、もとは旧曆二月の一日から二週にわたつて行なわれたから、年によつて日にちも動いた。インドの正月行事だったのが、中国に入つて二月になつたのは、インドの一月が中国の二月だったかららしい。修は、おさめる、ものをあらため調えるととのという意味で、二月にそうしたから修二会で、そのための堂宇だから二月堂だった。

「あの供華が椿になつたには理由がある」

ぼくらにぐるりと一回り、茶も点て終わつていた。と、ふつうならそこで話もお終しまいになるのだが、その日はちがつた。

「どういうたらええか、日本人特有の死生観というもんがあるんやな」

拭き終えた茶碗を左手に、右手を袖に突つ込んで肩を窄すぼめると、法衣ころもの袖口を指先に摘まんで口に運び、唾をつけると茶碗の尻を擦こすりはじめた。

和尚は雑巾を知らない人だった。机の上でも棚でも柱でも、果ては革靴でも、なんでもかんでもそうやつて袖に唾をつけて擦こすりたおす。だから和尚の周りはどこもぴかぴかだった。

革靴？ きつと不思議に思われるだろう。だから断わつておかないといけないが、山内行事のときの木靴や作務のときの草履は別として、出かける和尚はいつも革靴だった。スリッポンというやつで、爪先のつるりと丸く靴紐のない、英国製の焦げ茶の革靴だった。むかしヨーロッパ

パを行脚したときロンドンで新調したらしかつた。と、一番上の兄弟子が、咳払いをしながら横目にぼくらに目配せした。これは長くなるぞ、そういつているのだつた。

禅寺の朝は早い。毎朝五時、ことに冬場は真つ暗ななかを、律儀に唸る目覚まし時計の頭を叩くと跳ね起きて本堂に走る。といつても、そうするのは兄弟子だけで、下つ端のぼくは蒲団にもぐり込んだまま。あと五分、もう三分とずるをして、ときには二十分近くも寝坊する。だから、いつもあとからゆるりとやつて来る和尚にも先を越されて、気まずい思いをすることも度々だつた。勤行はやり方にもよるが、五十分ばかり。終わると、本堂周りや庫裏の掃除が待っていて、仕上げに濡れ雑巾で広縁や廊下を拭いて走る。そのあと粥座があつて茶事だつた。草臥れたうえに腹も膨れ、そこに長話が続けばたまらない。見る見る上脛が落ちてきて、ときに舟も漕ぎながら、濁のかかった和尚の声にもぼくは空ろになつていた。

そうして半世紀、以前はそんなでもなかつたが、最近、とみに和尚が現われる。夢だけではない、電車を待つ駅のベンチや、風呂掃除をしていたり、いつものなんでもない、無心のときに、ふらり、現われては話しかける。

椿の話もそうだつた。和尚なら、ああいつただらうな、こういつただらう、と、ぼくなりには尾鰭をつけて、勝手に思つてみるのである。

「一口に、靈魂いうてもいろいろでな、人は死ぬと魂になるのは同じやが、魂は魂でも、死ん

うつむき椿



二月堂から

で間なしのは荒魂あらたまいうて、まだまだこの世に未練が残つとるからやろう、悪さをしよる。いうたら、迷いの魂やな」

そういつて、

「それが、なんぼか年季が入つて浄められたら御魂みたまになる。同じ魂たまいうても迷いがのうて、いうたら、孫子まごこを見守る性根しょうねのええ魂たまになつておる。これをこの国の人は神かみというてきた」

ともいつて、

「前にもいうたが、その神かみいうんは、ふつうは山におる。そうやつて孫子がどないに暮らしとるか見てるわけやが、気が気でならん。それで年になんべんか、山を降りては里にやつて来よる。というても代わりの遣いつかをやるだけやが、それを山人さんじんいうて、つまり神の眷属けんぞく、わかりやすういうたら付き人やな」

と続けて、

「で、この山人は、年初めの春、つまり正月には椿の木の枝を杖代わりに持つてきて、田圃たんぼに入ると、それであちこち撞ついて回りよつた。田の精霊を目覚めさせる、気付けやな。これ、早よ起きんといかんぞ、田作りに後おくれるぞ、というわけで、正月だけやない、田植えどきや、稲の花の開く夏の盛りや、刈り入れの秋にもやつて来よつたわけやが、持つてくる杖もいろいろでな、夏は榎えのきで、秋は楸あき、それから冬は柊ひいらぎやつた」

と、そんなふうにもいったらう。

楸とはどんな木だったか、植物図鑑を広げても、柏の木の仲間らしいが詳しくわからない。榎は森の太木で、春半ば、目立たないが枝のあちこちから小さく房状に白い花を咲かせるからよく目立つ。柘は、むかしはあちこちの垣根になつていて、葉のとげとげが嫌だったが、わりに可憐な花を咲かせて意外だった。垣根の向こうに木犀の花が終わったあと、小枝の葉の付け根に豆粒のような白い花をいつぱいつけて、わずかに木斛のような仄かな香りが出て、きびしい冬がやって来るのを、悪戯鬼だったぼくらにもそつと教えた。どれも木偏に春夏秋冬と書いているが、うまく考えたもので、輸入品の漢語ではない、移ろう四季のこの国でこそ生まれた国字だった。

ぼくは思った。それじゃ、神はどうして山から来るのだろう……。

和尚ならいったらう。

「それは、わしらの原風景いうんかな。大むかしにやって来たわしらの先祖がそこに暮らしたはじめた名残やないやろか、いうたら、故地というやつじゃ」

もう二十年もむかしになる。葛城道を御所から南に下つて、高天をさして麓から歩いた。金剛山の中腹のちよつとした台地に開けた小さな部落で、ふと立った田圃の畦から眺めた大和平

野がまるで海のように、霞のなかに敵傍山うねびやまがぼっかり浮かんで見えて、

真狭まさき国といえども

蜻蛉あきつとの腎帖との如くにあるかな

倭は国のまほらま

畳たたづく青垣な

山籠やまごもれる

記紀の条に納得して考古学の定説を思つてみた。縄文後期から弥生にかけてのかれらが住んでいたのは、平地に突き出した尾根の外はずれか、あるいは平場に浮かぶようにあつた小高い丘か、とにかく見晴らしのきく台地で、そこから日々、麓の田圃、といつてもたいていは沼地だつたが、行き来して稲をつくつていた。闖入者ちんにゅうしやから暮らしを守るため、高天はそつくりそれを思わせた。

記紀の高天原もそうだろう。この国のどこにもあつて、たどり着いたかれらが最初に住みついた小高い丘や、尾根外れのことをそう呼んだのだろうが、そこから田作りに降りる行為あめふが天降るで、見下ろす稲田の沼沢あしはらのなかつくが葦原中国だつたのだろう。ほかでもない、神はかれら自身だつた。そうして、やがて高みでの暮らしから平場に移ると、かつての暮らしの場は故地となり、祖霊すまいの住処、つまり神の居所になる。高天原から葦原中国に天降る、そんなけしきは、じつはこの

国にはいつぱいあつて、記紀はそれを瓊瓊杵一人に集めて役者に仕立てた。

では、神はさらにどこからやつて来たのか。いうまでもない、この国の場合は海の向こうからで、だから水際に立てば、彼方を祖霊の故地として懐旧の思いを深くした。禊はらえというのも、この思いから来ているわけで、西方浄土というのも、とりわけ仏教にはじまったことでもなくて、この国では、じつは故地懐旧の思いにはじまっている。だから、記紀の高天原や天降る神も、ほんとうは国の創世譚ではなく、たとえば住吉の神が、病んだ妻を戸板に乗せて茅渟ちぬの海に流すという淡島伝説あわしまも、無慈悲な仕業ではさらになく、魂の故地返しとしてあるわけで、降臨譚よりずっと古いむかしのことになる。

さて、山人というのははだれだったか。たぶんもとは村仲間の一人だったにちがいない。何かの理由で選ばれた、祖霊の故地を守ることを専業とした者、集団だろう。神の付き人、守り人として、特別だったから生業は持たない。だから農事からは超越して、時節の折々に山を降りて神の言葉を伝えた。神の言葉とは、ほかでもない農事の知恵で、それに人は感謝し、できあがった農作物を捧げ供えた。といえばうつくしいが、これも生業を持たない山人だからの食糧調達の手段であつて、その交換に、いろんな仕草でその年の豊穰を占つて見せたというのがほんとうだろう。

里に下りると村のかかりの辻に、杖にしてきた時節の木の枝、たとえば春は椿の枝を地に立て

る。それを人は季節の産物を供えて迎え、その辻が、やがては村の交流と憩いの場になった。それが市いちだろう。根付いた椿の木が目印になったから椿市と呼ばれて、三輪山西麓の海石榴市つばいちもそんな一つだろう、賑わう交流の場だったにちがいない。

ようすはやはり日本紀に見える。細かくなるが、武烈記の仁賢十一年八月の項。武烈が物部麿鹿火ものべのあらかいの娘の影媛と逢瀬を交わす場面があるが、それが海石榴市の辻で、文物交換の群れのほかに、歌垣の姿があつたことを伝えている。歌垣というのは、歌を詠むのは手段であつて、男女が互いに相手を見つけることがねらいの、もともとは豊饒を祈る農耕儀礼の一つだつた。いづれにしても、村外れに交易や遊興の場として人の集まる場があつて、それが海石榴市だつた。

興味深いのは、続く敏達記の十四年三月三十日の項。いわゆる麿仏の条で、物部守屋と中臣勝海なかとみのかづみが敏達みんたつに麿仏をすすめ、蘇我馬子そがのうまこの建てた飛鳥寺を焼き払い、仏像を難波なんばの堀江ほりえに棄てる。この難波の堀江というのはいまの大阪のそれではなく、飛鳥寺の近く、甘樫丘あまかじのおかの北麓にあつた飛鳥川の舟留ふなだまりのことで、さらに、物部は僧や尼を捕らえ公開の鞭打ち刑にする。その場所も海石榴市だつた。つまり、海石榴市は、人の行き交う、西欧でいう広場、セントロ、センターにあたるもので、西欧ではそれを中心に街をつくつたが、この国では、それを境に下手、つまり多くは川下に向かつて村ができた。反対に、上手は異世界、つまり神の領域だつた。村

の墓地や戦死者の忠霊塔が村外れにあつたのはその結果で、洋の東西は、姓の生成のちがいと
同じに、人の交流のあり方が大きく異なる。

そして、お水取り。いわゆる若水汲みだが、これももとは海をやつて来たかれらの祓、つまりは望郷の儀式だったと見ていい。祖霊の故地を望み拝する浄めの儀礼であつて、場所は内陸の大和であつても、心は山の向こうに海を見ている。そんな故地はどこなのか、その一つをお水取りが伝えていく。

二月堂の麓の閼伽屋と呼ばれる祠のなかに若狭井という井戸があるらしくて、その湧き水を汲んで二月堂に供える。部外者立ち入り禁止の秘儀なのだからこう書くしかないのだが、若狭井はふだんは涸れていて、そのときだけ湧き上がる。その名の通り、若狭の小浜、遠敷川上流の鵜之瀬につながっていて、そこから水送りしたのを大和で水を取るといふ仕組みになつている。JR小浜線の東小浜駅から自転車借りて走つたが、どこにでも見かける川原だった。

若狭なのはいろいろあつて、遠敷は大丹生とも書いて、丹は、朱あるいは辰砂といえはわかりよいか、硫化水銀からなる赤色顔料で、むかしは建物の防腐塗料として貴重だった。また、この辰砂を蒸留製錬したのが水銀で、大仏をはじめ仏像の金メッキに欠かせなかつた。若狭はその有力な産地だった。

もう一つは建築資材だろう。若狭の背後の比良山系から伐り出した杉や檜を、琵琶湖から宇

治川を流して運んでいる。その大和への荷揚げ口が京都との境の木津であり、木材の集まる港だから木の津といっていた。

こうして大和は若狭とつながっていた。ほかにもこの国の先人が海に向こうを故地と仰ぎ望む、そんなところはいくつもあった、遠く瀬戸内海につながる大阪の難波や和泉や、淡島伝説で知られる和歌山の加太や紀ノ川流域もそうなら、また、能登や三国もそうだったろうし、若狭から但馬、伯耆にかけて点々と続く浦島伝説も、じつは水底ではなく海の向こうの話ということになる。だから若狭から大和へのお水送しも、水ではなく、人の流れ、交流の歴史を教えていると考えるといい。気になるのはそのルート。記紀の神々が歩いた道筋の一つでもあるからだ。

答はもちろんいくつもあった、たとえば、小浜を東に向かって琵琶湖の今津に出る、その少し手前を南に谷筋を途中越えて京都の八瀬に下る、いわゆる鯖街道も一つだが、こちらはずつとのちに開かれたもので、本筋はやはり今津に出たあと湖西を南にたどるルートだろう。今津からは南に高島から大津に下るほか、今津から湖上を対岸の彦根から草津あたりに渡ることもあるだろう。ただ、当時の琵琶湖はいまの二倍以上もあっただろうから、現在の湖東のほとんどは水のなかで、依藤太の百足退治の三上山も、竹生島のように水にぼっかり浮かんだ小島だったにちがいない。



若狭の鵜之瀬

ともかく、近江は日本海をやって来たこの国の先人たちでいつばいだった。それが大和に流れていく。たとえば、大津の少し北の和邇わにという同じ地名が奈良の天理の少し北にもあつて、つながりを窺わせる。

そして近江から大和への道は大きく二つあつた。一つは先の宇治川ルートで、もう一つは草津から、むかしの東海道、いまのJR草津線に沿った川筋を水口から小高い峠越えで伊賀いがに出るルート。そこから先は、西に笠置かささぎを通つて木津から平城山ならやまを越えるものと、笠置から柳生やぎゅうを経由するルートがあつたが、もう一つ、伊賀からさらに南に名張なばり回りで、いまの近鉄名古屋線沿いに三輪山の南麓に出るルートが、たぶん本筋だつたと思う。

泊瀬はせといつて、雄略が都を置いた狭い谷間を下り切つたところが海石榴市だつたが、その先の磯城しきから広がる奈良盆地のようすもいまとは大きくちがつていた。近江といつしよで、一面、きら、きら、光る水いつばいの沼地

だったと想像している。当時の稲作は、いまのような陸地の田圃に水を張って苗を植えるというやり方ではなく、沼地に直に籾を蒔く。それは、たとえば唐古遺跡の田下駄が教えてくれている。だから奈良盆地に行くには、一つは南側の山裾を明日香にたどって、さらに西に葛城に進むか、もう一つは三輪山麓を北に上るしかなかった。この北行の山裾道が上つ道と呼ばれた山辺の道で、その道筋に先人の開発村ができていく。南から、三輪山西麓、天理東の石上、そして奈良の春日で、それぞれ、出雲、物部、中臣の根拠地になった。

と、ここまで想像してみても、気になるのがつばきの表記だ。この国の言葉は音である大和言葉に外国語である漢字を借りているからややこしい。海石榴市の「海石榴」もそうだが、古いところでは、古事記の仁徳記には「都婆岐」と出てくる。若い妃の八田媛に気移りする仁徳と後の磐之媛とのやりとりの歌があつて、磐之媛はこう歌う。

「都藝泥布夜。夜麻志呂賀波袁。迦波能煩理。和賀能煩禮婆。賀波能倍迹。淤斐陀互流。佐斯夫袁。佐斯夫能紀。斯賀斯多迹。淤斐陀互流。波毘呂。由都麻都婆岐。斯賀波那能。弓理伊麻斯。芝賀波能。比呂理伊麻須波。淤富岐美呂迦母」

古事記は記述に漢字の音と訓を借りているが、たとえば一書は「都婆岐」を「椿」とあて、こう書き下している。

「つぎねふや山代河を河上り 我が上れば河の辺に 生い立てる 烏草樹を 烏草樹の木 其

が下に 生い立てる 葉は広ひろ ゆつ真椿まっぴん 其が花の 照りいまし 其が葉の 広りいますは 大君ろかも」

それが日本紀になるとかなりちがつて、同じ歌も、なぜかずいぶん簡略化されてしまう。

「菟藝泥赴。擲莽之呂餓波鳥。箇破能朋利。澆餓能朋例麼。箇波区莽珥。多知瑳箇踰屢。毛毛多羅儒。擲素麼能紀破。於朋耆瀾呂箇茂」

これを一書はこう書き下す。

「つぎねふ、山背河やましろがわを、河沂のほり、我が沂れば、河隈かわくまに、立ち栄ゆる、百足ももらず、八十葉やその木は、大君おおきみろかも」

古事記では「由都麻都婆岐」と、たくさんのつばきとしていたのが、日本紀では「擲素麼能紀」と、つばきではなく、葉の生い茂った、ただの木になってしまっている。

では、この「椿」という字はいつ頃登場するのか。日本紀より十数年あとの『出雲国風土記』には、つばきは「海榴」あるいは「海石（栢）榴」として二カ所、「椿」として六カ所に登場し、「海石榴作字椿或」、つまり、つばきという音から椿という字をつくつたとあつて、松、栢か、楠す、桐、栢すぎ（杉）、檜かし、楡ゆずりは、椿かぢ、櫟くぬぎ、竹などと並んで現われる。

風土記は、和銅六年（七一三年）に、従来の国造に代わつて諸国に派遣された国司が、官命に応じてその地勢や郷、駅、社、物産、地名の由来などを調べてまとめたレポートだが、ほとん

どは散逸していて、現存しているのはわずかに五カ国、運よく『出雲国風土記』は完本に近い形で伝えられている。

表記は漢文体。天平五年（七三三年）の成立というから、その頃には「椿」という字が生まれていたことになる。ただ、風土記も物産についてはほとんどが簡単な箇条書き程度で、どんな木だったかは教えてくれないが、杉や桐、松、楠などと列記されているところを見ると、いまの椿や山茶花とはちがつて、けつこう丈のある高木樹だったかもしれない。また、これは数十年、時代は下るが、万葉集にも、つばきは、「都婆伎」「都婆吉」「海石榴」「椿」といふ表記で記されていて、全部で十首、うち、椿が四、海石榴が四、あとは一首ずつになっている。

一方、「山茶花」の登場はいつのことか。もちろん記紀にはなくて、ずつと下つて貝原益軒を覗いてみると、元禄七年（一六九四年）の『花譜』には、正月の項に「山茶花」とあつて、こう記している。

「つばきは、さかり久しくしていとめでたし。花は歳寒をおかしてひらき、春にいたりて、いとさかんなり。葉は四時をおひてしぼます。これ又君子の操ありと云べし。日本にむかしより、椿の字をあやまりて、つばきとよむ。椿は漆の木に似て、其葉かうばし。近年唐よりわたる。又日本紀及順和名抄には、つばきを、海石榴とかけり。むかしは、つばきの数、すくなかりしが、近代人のこのむによりて、其品類はなほだおほくいできて、あげてかぞへがたし。からの

書にも、其類おほき事をしるせり。山つばきいとよし」

おもしろいのは、益軒がつばきの花の姿を「これ又君子の操ありと云べし」としていることだ。なんとなく記紀の磐之媛の歌を思わせる。この操というのは、節操や貞操のそれではなく、常緑樹の葉のように四季を通じて変わらない緑の美しさをいったもので、つばきの、花のことよりも葉の方を讃えている。

また、同じ益軒の『大和本草』にも「山茶」^{つばき}として、こうある。

「延喜式にもつばきを海石榴とかけり、順和名抄も同其葉厚しあつばのきと云意なり。花は単葉あり重葉あり千葉あり。紅あり白あり。山つばきは紅の単葉なり。(略)本草綱目に山茶に海石榴、石榴茶あり。是つばきの品種なり。日本の古書につばきを海石榴とかけるも由ある事なり。酉陽雜俎続集に曰く、山茶は海石榴に似る。然らば山茶と海石榴は別なり。凡、山茶は花の盛り久し、葉も花も美し。(略)つばきは山茶と云を日本にいつの時よりかあやまりて椿の字をばつばきとよめり。順和名抄にもあやまつて椿をつばきと訓す。つばきは椿にあらず。椿は近年寛文中からよりふたる香椿なり」

益軒だけでない。元禄十年(一六九七年)の宮崎安貞の『農業全書』も「山茶」^{つばき}として、簡単だが、「俗に椿^{ちん}の字を用ゆるハ非なり」としている。

話を括^{くく}ればこういうことか。

つばきは、奈良のむかしには「海石榴」と書いていた。葉が厚いので、あつばのきと呼んだのが訛つてつばきになつたともいわれ、花は一重と八重、そして紅と白とあるが、やはり紅一重の山つばきが一番いい。ほんとうは「山茶花」あるいは「山茶」と書くのだが、まちがつて「椿」をつばきと読むようになった。一方、「椿」は、ちんといつて、最近、中国から入つてきた漆の一種の香木である……。

ややこしい話だが、端折はしよつていえば、まず、つばきという言葉があつて、その音に漢字を借りて「海石榴」や「都婆岐」とあてたが、同時に意味をとつて「椿」の字をつくつた。それに、いつのころか、漢語の「山茶」「山茶花」の字をあてるようになり、逆に「椿」の字は、たぶん同様の時期に中国から入つてきた漆の一種の灌木にあてられるようになったということらしい。

では、「山茶花」のさざんかという読みはどこから来たか。たぶん「山茶」の漢語音の「しゃんちゃ」だろう。それがつばきの一種に定着して「さざんか」と訛つたと思つてみる。いまの山茶花である。気になるのは「山茶と海石榴は別なり」とあつて、記紀の「海石榴」は「山茶」、つまり、いまの椿とはちがうといつてゐること。とすれば、修二会本来のつばきも、いまの椿ではないことになる。

さて、和尚は何を思つていつたのかわからないまま、ぼくは、いま、一つのけしきを浮かべ

ている。骨清庵こつせいあんといったが、方丈裏の庫裡との間に和尚好みの茶室があつて、一畳台目向板だいいむこういた、つまり畳一枚と四分の三に、隅の残りは板張りの粗末な造りで、床も壁床かべどこといつて、床の間とこに見立てた土壁に、掛字を一軸吊つらくくつただけ。その躡り口にじの脇に胸丈ほどの侘助わびすけが、そつと半身を忍ぶように立っていた。

侘助は、同じ椿のなかでも茶の木に近く、だから葉にもあのかてかかなく、名の通り、どことなくもの寂さびびた風情があつた。花は五弁の白。それが蕾のときは薄桃色に膨らむのが、開くと淡雪のように透き通り、太い黄色の花心が鮮やかだつた。花付きも山茶花のようにしつこくなく、あちらに一つ、こちらに一つ、楚々として、何を考えるのか、どれもがうつむき加減に小首を垂れて、風に揺れると打ち水の、わずかに残る飛び石にひらりと落ちた。それがいまも、ぼくの心の額縁に、きれいにおさまっている。

醍醐味

「酥そというのを知つとるか」

その日は薬石やくせきのときだった。お気に入りの信楽しがらきの角皿の縁を箸で突つきながら和尚がいった。皿の上には鮎鮓ふなずしが気持ちよさそうに糍こしじの蒲団を被つて眠っている。

「チーズやか、なんやかやいうとるが、そうやない」

和尚の話はいつも唐突で、その日も、目を丸くするぼくらを余所よせにまた長くならそうだった。「あれは五味いうて、牛の乳を炊たいたんやな。火のかけ具合で、乳味にゅうみ、酪味らくみ、生酥味ししょうそみ、熟酥味じゅくそみと味もようなつて、最後は醍醐味だいごみいうて、極上のもになるんやが、なかなかそこまではいかんかったよう、一步手前の酥すというんが一番うまいもんということになつとつた」

講釈すると、似五郎鮎が蒲団にしていた糍、つまり、てれてれの白い粒々を箸の先で器用に掬すくい、熟れ具合をたしかめるのか、軽く鼻先をかすめるようにして口に運んだ。

「いうても、それは印度インドの話でな、処変とこころわれば品も変わる。この国でいうてきた酥すというんは、やつぱり島国らしい、鮎鮓ふなずしやつたとわしは思うとる。それも身の方やのうて、この外側の、とろつとろの糍こしじのことやな」

そして、くちや、くちや、やると、

「なかなかのもんや」

とご機嫌だった。

和尚は酒好きだった。といつても、不許葷酒入山門、呑助では更々なくて、雰囲気が好きなのだろう、嗜むといえば聞こえはいいが、偶に一合ばかり、ぼくらを前にちびちびやった。

「酒は百葉の長いうてな」

蘊蓄も忘れなかったが、銚子は、これもお気に入りの丹波で、軽く二合は入つただろう広口の、もともとは一輪挿しだったのを好んで使った。それに銜のない二級酒を半分ばかり、膳の脇に置いた薬罐に浸け、

「爛は頃合いいうてな」

尤もなことをいいながら、ここでも忙しげに何度も湯から上げては銚子の尻に掌をあて、やがてうんうんしたり顔にうなずいた。自分のことは自分でする、師といえども弟子に厄介はかけないのが宗門暮らしの鉄則だったが、酒の爛だけはさらにこだわり、ぼくらには触れさせなかった。そうして鮎鮎のとろとろを肴に、これも丹波の猪口でしばらくやって、最後は忘れず銚子を振つてたしかめる。ちよびんつ、とでも跳ねる音がすれば極楽顔で、それも悦しみの一つになっていた。そうして最後の一滴に舌打ちすると、信楽皿を箸先で追いやるように、ぼ

くらの方に卓の上を滑らせた。

あとは、みんなで分ける、そういつているのだった。皿の上には、すっかり身ぐるみ剥がされた鮒の木乃伊が寒そうに少しの糶粒を枕に変わらず眠っている。ぼくらへの氣遣いだったかどうか、鮒鮓といつても肝腎の身の方はいつさい口にしなかった。

そんな和尚の寺には檀家がなかった。本来、禪寺とは開山墓所をまもる塔所だから当然のことで、その点、江戸期以来、とりわけ明治以後の禪寺のけしきはかなりおかしい。さらに和尚の寺は山内同じ塔頭のなかでも、ほかとちがつて、代々大徳寺住持の住む寺で、自治体でいえば知事公邸のようなものだったからだが、その名残に、いまま大徳寺住持に選ばれると、晋山といつて、仏殿で行なわれる就任の儀式には和尚のいた寺から出向くことになっている。

一方、ほかの塔頭は、みんな細川や畠山、六角、三好、大友、黒田といつた戦国武将の菩提寺にはじまっている。だからその孫子、縁戚が檀越、つまりスポンサーとなつて寺の暮らしを支えていた。それが和尚の寺にはなかった。代わりに、代々入れ替わる大徳寺住持の公的住居として大徳寺が、一種、別院としてその存続を保障していたのだった。

当時、といつても江戸の話だが、どの宗門も、幕府からの補助金、つまり寺領という荘園を安堵されることで成り立っていた。たとえば江戸初期の貞享の頃の数字になるが、五山の建仁

寺が八百二十石、相国寺が千六百五十石、東福寺が千八百石の寺領だったのに対し、大徳寺は二千二百石で禅門では五山を抜いてトップクラスだった。京師でも地図でいえば、いまの北大路から北、西賀茂の手前までのほとんどは大徳寺領だった。また他宗では、ちなみに清水寺はわずかに百三十石、徳川家菩提の浄土宗の知恩院でさえ千七百石。そこまで禅門が優遇されていたのは、本来の禅門宗旨をかなぐり捨て、死ひと死人取り扱い、つまり人の弔いに手を染め、幕府の寺請制度に加担するようになっていたからだ。

それが明治の廃仏毀釈で寺領が接収され、大徳寺も三分の一近くの塔頭が喰っていけなくなり廃絶に追い込まれている。いまの紫野高校や周辺の町家はそのあとに建っている。和尚の寺も同じだった。それを半世紀を過ぎて和尚が入って再興した。廃絶した多くの塔頭は敷地まできれいさっぱりなくしたが、和尚の寺は、一時は方丈庭も掘り返されて芋畑になったり、方丈は結核患者の避病舎になるなど荒すまんでいたが、そこは腐つても鯛、大徳寺別院として寺域も堂宇もそのままになっていた。檀家がなかったから、喰えない寺、とだれも寄りつかなかったのだらう。でなければ、大徳寺一世住持の徹翁てつこう義亨の塔所だった由緒寺が無住のままに捨て置かれたわけではない。

「よくもまあ、あないなぼろでら榎樓寺に……、奴さんも物好きな男やなあ」

三十もようやく半ばを過ぎたばかりの向意気だけの雲水上がりを周囲は笑ったが、和尚の英

断だつた。というより、さすがは堺商人の後取り息子、すべては計算^{けいさん}尽くのことだつた。いまもそうだが、どんな寺でもいいというならいくらでもあてはあつた。けれど、俗世にも家柄があるように宗門も同じで、それなりの寺格のあるところへの晋山は難しかった。

そうして和尚も格は^{ぶか}掴んだものの、檀家がないから、自力で喰つていかねばならない。するとむかしなら純禪のむかしに帰つて、大燈の教え通り^{ふきん}瘋癲漢に京師市中を^{たくはつ}托鉢して生きるしかない。檀家のない寺は、本来、禅僧として生きるにはびつたりの身の置き処だつた。といつて、それができる時代でもない。うおー、うおー、と大路小路を巡るのも、すでに形骸化した僧堂の雲水にしか許されないけしきで、それを外れて一人、鉄鉢を手に町家の門口に立つても、乞食坊主と白い目で追われるだけ。だから和尚は頭で稼いだ。

きつかけは野村證券の奥村綱雄だつた。和尚とは従兄弟だつたか縁戚筋にあたる。この奥村を通して政財界に人脈を広げていく。別に奇異なことでもない、この国の禪、鎌倉仏教の祖師たちもそうして生きる道を切り開いている。

だから和尚は忙^{いそが}しかつた。講演会といつては、奥村やその伝^{つと}でいろんな企業の社員教育の研修会や重役連の集まりに出かけていったし、政財要人相手の茶会をいくつも手がけていた。出先は大阪や名古屋や福岡もあつたが、ほとんどが東京で、できたばかりの新幹線で走つたり、ときには空も飛んだ。

醍醐味



遠州好み

東京では虎ノ門のホテル大倉に、もちろん奥村の支援だった。常時、専用の部屋があった。法話会と称しては紀尾井町の福田家で宴席に出たり泊まったり、月の半分近くを出かけていた。そして寺の方にも政財交々、いろんな時の人が、それぞれほとんど決まったスケジュールで毎月違わず顔を見せた。

奥村は広尾の有栖川公園の西向かいに、いまは大きなマンションに変わっているが豪邸を構えていた。あたりはいまとちがつて仕舞屋続きで、そんな町家は目障りだともいうかのような高塀に、おまけにその上には尖頭鏃の付いた鉄柵が張り巡らされ、鉄鋌の厳めしい表の門扉は日中も固く鎖されたまま。和尚に連れられ一度入ったが、前に車が停まると、だれがそうするのか、ぎ、ぎ、ぎつ、と開いて、そのまま深い植え込みのアーチを抜けると、車寄せの飛び出た石造りの洋館が聳えていた。

奥村本人は、寺には偶に人の紹介に顔を見せるくらいだったが、奥さんの方はしよつちゅうやつて来た。といつてべつに用があつたわけでもなく、奥村のいくつになつても抜け切らない浮気の愚痴をこぼしたり、二、三時間、あれこれ世間話をして帰るだけ。腰の据わつた捌けた人で、庫裡奥の書院の廊下に、から、から、と高笑いがよく響いたが、そんな内輪話ができるのも和尚だからこそのこと、点茶を運んで下がるうとする、着物の袂を探りながら、

「ちよつと、小僧さん」

と、ぼくを呼び止め、半紙にくるんだお捻りを、そつと後ろ手に握らせた。だから、いい人だった。和尚と同じ大阪の堺の生まれで、けつこうな家筋だった。それがどうしたわけか、奥村と結婚したての頃は路地奥の長屋住まいだった。

「表の七輪で、毎日、目刺しや秋刀魚を焼く暮らしでねえ。それでも奥村は、毎晩、きちんきちんと帰ってきて、それは、ええ時代でしたわな」

吐き捨て気味にいつては、けら、けら、笑う。気取りの欠片もない、庶民臭ぶんぶんの大阪人だった。

一方、亭主の奥村は南近江の信楽の生まれ。古くから畿内一円に名の知れた窯元だったが、何があつたか、物心つく頃には一家挙げて堺に移つて和菓子屋をはじめている。がたいのいい、割れるような濁声の、どちらかといえど土建屋の親爺といつた方がわかりやすいか、小太り男で、大阪の金貸しにはじまった地方銀行の先の見えない証券部に過ぎなかつた野村を業界トップの「調査の野村」に伸ば上げた、見るからに体臭むんむんのエネルギーシユ男で、あの頃はもう会長から相談役に退いていたが、変わらず政財界に隠然たる力をもつていた。

それが数年後に斃れると、奥さんは広尾の豪邸を追われることになった。ワンマン経営からか、税対策からか、私財と社財の区分けが曖昧のまま、家屋敷は社有になつていた。後継の瀬川美能留も和尚人脈の一人で、同じようによく寺にも顔を見せたが、これが奥村とは反りが合

わず、すったもんだの挙げ句、泣く泣く奥さんは近くの小さなマンションに移った。それでも高輪の高台の、窓のカーテンもすべてお揃いのワンフロア占有の豪邸だった。

ほかにも財界では、高千穂交易の鍵谷武雄や銭高組の銭高輝之に、ナショナルの松下幸之助や三洋電機の井植歳男も常連だったし、大御所ではあの電力王で知られた松永安左エ門も、ときどきぶらりとやって来た。

一風変わっていたのが鍵谷だった。若手で役者にしたいほどの目鼻立ちの整った上背のある、がっしり男で、一日、ひよっこりやって来て、ぺこりと下げた頭は五分刈りだった。

「今度、映画に出ることになりました」
てっぺんのつんと尖った釈迦仏頭をばつ悪そうに何度も撫で回した。映画『トラ・トラ・トラ！』に山本五十六役で出演するというのだった。黒澤明を監督に準備が進んでいた日米合作の戦争もので、そのまま行くのかと思っていたら、急転直下、黒澤に代わって舛田利雄が監督になり、深作欣二がアクション監督に抜擢され、山本五十六役も山村聡に入れ替わって、鍵谷の銀幕デビューも幻に消えている。

克蘭クイン最中のどたばた劇で、何があったのか、財界のずぶの素人を主役格にキャスティングした黒沢の常識外れなやり方にアメリカ側からクレームがついたようにいわれたが、あとで鍵谷がやって来て話したのは、裏に日米間の経済トラブルがあったらしく、

「あれは、鍵谷の方が似合うとった」

と和尚も残念がった。

いまはどうなつたか、高千穂交易もあの頃は大卒の就職にも人気が高くて、アメリカのパロース社と提携してOCRシステムやラベリングマシンといった先端機器の販売を手がける一方、独自にミニコンや、いまでは在庫管理やマーケティングに常識となつたPOSシステムを開発するなど電子機器業界での成長株だつた。たぶんそんな勢いが先行のIBMとも絡んで鍵谷降板に繋がつたのだろう。

井植は淡路島の廻船問屋の生まれで、姉が松下幸之助に嫁いでいた。その伝手で大阪に出て松下といつしよに電気器具をつくりはじめのだが、どちらかといえば奥村と同じ、土建屋親爺の風貌だつたが、名を上げて叩き上げの氣質を失わない豪快肌の人だつた。

「松下は井植が大きくした」

和尚はいつたが、幸之助の線の細さとは対照に、これもエネルギーの塊のような人だつた。それが、体の具合が悪いらしいと聞こえたら、あつという間に逝つてしまった。なんと、肺結核だつた。そしてあとには後取り息子の敏が代わつてやつて来たが、影が薄くてさつぱりぼくにも記憶がない。夫人は博多の大手百貨店、玉屋の田中丸の次女だつたか三女だつたか、和尚が世話をして、自民党の池田勇人が仲人になつてゐる。

そして、なにより一番強烈に印象を残して逝つたのは松永安左エ門だろう。九十を過ぎていたというのに大男で、まず顔が異様に長いのにびっくりした。獄門面と渾名されたのを知つたのはずつとあとのことで、戦後、電力再編、民営化を断行、資金源に電気料金の値上げを強行したから、鬼の松永と異名をとつたことなど、あの頃のぼくはもちろん知るわけもない。いまの電力業界のありさまを知つたら、爺さんは何というか、見かけたのはたつた一度、小僧に入つた春だつた。

「お邪魔しますぞ」

庫裡玄関の三和土に立つた爺さんは、羽織姿で腰丈ほどの杖を手にしていた。それがなんともいえない、どこか山裾の杣道でも拾つてきたとしか思えない、曲がりくねつた木の枝だつた。たぶん小田原の屋敷森の立ち木でも伐つて使つていたのだろう、今時の人でない渺々たる風体に似合つて妙だつた。

客間に茶を運ぶと、和尚がぼくを顎でさした。

「新入りですわ」

すると、一言、

「しつかり、おやんなさい」

とそれだけで、じろつと睨んだ瞳は山鳩の羽のような鼠色に光つていた。

「蒙古襲来のときに、向こうの兵隊が悪さして、島の娘を孕ませよつた。それがわしの先祖やな」

と、から、から、笑つたというのが和尚の後日譚だったが、そういえば、和尚もじつはよく見ると、黄色がかつた灰色のシベリアンハスキーのような目をしていた。堺に江戸の頃から続いた紙問屋の後取り息子で、五つのときに父親を失い、何を思つたか、二十歳で身代を棄てて南宗寺に得度している。もともとの家業は鉄砲鍛冶だつたというから、あるいはどこかでバテレンの血でも受けていたのかも知れない。南宗寺はいまは末寺になつてしまつてしまつているが、むかしは一派をなした禅門十刹で三好の菩提寺だつた。

松永は壹岐の船持ちの旧家の生まれ。東京に出て慶応大を出たあと、論吉の娘婿だつた桃介に見留められて名を挙げた。

「爺さんの家は、大徳寺の大昔からの檀越やつた」

和尚はいつたが、そんな松永とは池田を介して知り合つている。池田は和尚と同じ年で、松永が電力再編を断行したときの吉田内閣で蔵相をしていた。それが縁で、齡は二回りも下だつたが、政界では松永にもつとも近かつた。その池田と和尚は、池田が、貧乏人は麦飯を喰え、といつて総好かんを喰つたとき、ちよつと相手をしてやつてくれんか、と奥村から頼まれて茶飲み付き合いがはじまつている。肝胆相照らす、奥村と和尚はそんな仲だつた。

ほかにも女性では有吉佐和子がよく来ていたか。異色なところでは、この人もいまは鬼籍に入っているが、大本教の出口聖子も常連だった。三代教主出口直日の三女で、のちに四代目となるのだが、あの頃はまだ三十を出たばかり。面長の、当時にしてはすらつと上背のある、けつして美人とはいえなかったが、それでいて仕草が小僧のぼくらの目にも艶つぽく、教祖というより、どこか料亭の女将といった方がぴったりだった。

もちろん和尚のお気に入りの一人で、ずつと独身でいた。点茶はもちろん能狂言にも心得があつて、人懐こさも手伝つたのだろう、大本教を一般に広めた功労の人といつていい。そんな繋がり度月に一度、法話会といつては、亀岡や綾部の本部から黒塗りの車が迎えに来て、和尚は出かけていた。

逆に、有吉はがらがらの開けつびろげな人だった。黒縁の丸眼鏡に、ぺら、ぺら、よくしゃべつた。まだ三十代半ばだったか、女性としては大柄で男勝りだったが、瞳がきれいで、和尚と話している横顔は、けつこう愛らしかった。

和尚とは、有吉が舞踊家の吾妻徳穂の秘書をしていたときからの顔見知りで、何度も足を運んでいたのは和尚を小説のモデルにするためだった。ただ、それがどんな作品にまとまつたかは詳しく聞かなかつたし、あの人の小説は読まないから、いまも知らない。

そんな客人たちは、ほとんどだれもが、やつて来ては帰りがけに和尚を外に連れ出した。昼

過ぎの二時か三時を回ると顔を見せ、一、二時間しゃべっては、待たせておいた黒塗りで出かけていく。もちろん置き土産も忘れない。禅寺の枯淡な食卓を見越してか、それぞれに気の利いた品々を選んでいた。鮎鮎もそんな一つだったのだ。

鳩にほの海

「竹生島ちくぶじまを見てみたい」

日曜の朝だった。食事のあとのまどろみに、ぽつりとあった。その一言に誘われて、さつそく翌週、二人で出かけた。まだ春も見えない雪混じりの一日だった。米原で北に乗り換えた鈍行どんぎょうを長浜で降り、まずは大通寺だいつうじにお詣りをすませた。ちようど昼下がりで、出てきた門前通りに小料理屋があった。見た目にも粋な白木の門口に檜皮ひわだの庇ひさしを低く差して、伊吹嵐に利休鼠の暖簾かまぼこが揺れている。

「鮎鮎か、食べてみたいな」

すると目を丸くした。

「どうしたの？」

いうはずだった。外では呑み仲間に秘密にしているが、いわゆる酒盗さかの類、珍味佳肴めいというのがさつぱりだめなのだった。だから、ちよつと背伸びしてみた。

「琵琶湖に来て、これを逃のがす手はないだろ」

いいながら暖簾をくぐった。

時間も時間だったから当然のことで、客影がない。瞬間、ちよつと引き気味になったが、奥のカウンターに一人、背を向けた姿を見つけたのを救いに、窓際のテーブル席に向かい合わせに座った。

から、ころ、から、ころ、すぐに下駄の歯音がして、前掛け姿の女将だった。

「お詣りですか」

「ええ、久しぶりに早起きして」

向かいから笑顔が溢れた。たしかにそうだ。仕事のときもぎりぎり、休みの日には十時を回つても蒲団のなかの人だった。

「けど、お天気がもう一つでねえ……」

女将は眉根を寄せたが、すぐに、愛嬌たつぷり、

「どうぞ、ごゆつくり」

と品書きをテーブルの肩に残して、から、ころ、消えた。

んっ？

「これ、ほんとかな？」

香しい杉経木の品書きだったが、数字が想定外だった。それを、えいつと清水の舞台に立つたつもりで注文した。

出てきた美濃の丸皿には、親指大の半身が二切れ、頼りなそうに、甘酒の残り滓のような糍のとり蒲団から、かすかに顔を覗かせ眠っていた。その身の方は向かいから箸が伸び、ぼくはとろとろを箸先で掬いながら地酒をやった。

「いけるね」

銚子を半分ぐらいにした頃だった。

ほんとうに、旨い、と思った。そして、ひよっこり、記憶の底から湧いてきた。

「このことか」

和尚の醍醐味を思い出したのだった。

「どうかした？」

向かいの箸がぴたりと止まり、首を傾げて下からぼくを覗き込んだがそれだけで、すぐにまた美濃皿の切り身に戻っていった。

港に下りる坂道だった。

「遠州って、ここの人だったのね？」

背中に入った。

「えんしゅう？」

「そう」

どこに行つても、改札を出るとすぐにどこかに消えてしまい、きよろ、きよろ、見回すぼくを余所よそに、悠々、漁りまくつた観光ちらしを両手一杯に戻つてくる。その日も同じで、駅で見つけた案内パンフを広げて、とろ、とろ、歩く。だから遠出しても二人肩を並べることが滅多になくて、いつもぼくばかりが先に行く。

「孤篷庵か、見てみたいけど、逆方向ね」
諦めきれないようだった。

こほうあん？

懐かしい響きだった。

通つていた学校のすぐ裏手だった。それが長浜にもあつたとは迂闊うかつだった。もう少し性根を入れておけばよかつたのに、やつぱり、ぼくは落第小僧だった。

「なにに、遠州の菩提を弔うために、京都の大徳寺から、こ、う、ん、和尚を招き……」

後ろでパンフを読み出した。だから、行つてみたい気分になつたが、竹生島への船の時間が迫つていた。

「また、今度にしよう」

いつもそういつて、ぼくは機会を逃している。

湖に出た。

北西の雲混じりの浜風が、休みなく冷たかった。

「比良の暮雪ぼせつって、こういう感じかな」

沖を眺めて、ふといった。小難しいことを、突然、ふつうにいう。四十年近く悩まされてきたが、いまま解消法が見つからない。

近江八景か……、

と、蜀山人を浮かべたが、乗せたから、先はあわづか、ただの駕籠……、ときて、あとが続かなかつた。

湖北の空は忙せわしかった。遠く若狭からの高い空が銀白に輝いて見せても、すぐあとに比良越えの鼠色の棚雲が追い重なって塞ふさいでしまう。のだが、また、いくらもしないで吹き散らされ、うつすらと茜の空に戻っていく。

不思議なのは、稜線を連ねて走る比良の山々と、薄鼠に煙る雪雲と、そして比良嵐に騒ぐ白波の、すべてが水平世界にあつて、湖の水平線を境に、比良の山並みと波立つ湖面が絶え間なく、交互に明暗を入れ替えることだった。つまり、遠く若狭の空が陽に明けると、比良山系は

鳩の海



竹生島

それを背にして陰の闇に落ち、逆に湖面は陽光を受けて銀白に光る。それが一転、棚雲が若狭の空を塞ぐと、比良は雪に白んで湖面は鼠に沈む。その明と暗の対照に記憶があった。

「ちよつと、ついて来い」

いわれてあとを追った。和尚はいつもの茶衣姿で、大きな袂をパラシュートのように向かい風に膨らませ、すたこら、先を行く。後れまいとぼくは走った。参道を三門前から一折れ、二折れ、あとは僧堂前の孟宗竹の長いアーチを抜けると緩やかな坂道に入つて、上り切ると孤篷庵だった。

大徳寺といえ、一休さんの真珠庵に次いで遠州の孤篷庵、とだれもがいう。百五十六世住持江月宗玩（こうげつそうげん）の隠棲に遠州が造つた草庵だった。もともとは山内もずつと手前の龍光院（りゅうこういん）にあったのが、江戸初期の寛永期に移っている。そのあとを江月は弟子の江雲宗龍（かうんそうりゅう）に譲つた。江雲は遠州の甥にあたる、江月の法嗣（ほし）で、のちに大徳寺百八十四世となり孤篷庵にも長く住んだが、孤篷庵そのものは移築から百五十年後の寛政五年に焼け落ちて数年経つて再建された。それが現在に続いていて、遠州当時とは少しようすがちがつているが、よく知られた茶室、忘筌庵（ぼうせんなん）だけは遠州の古指図をもとに最初のままに復元されている。

さて、あのととき孤篷庵に、和尚はどんな用があつたのか、玄関脇の小部屋に控えていたから

わからなかつたが、遮る衝立前にちよこんといたら、にやりと戻ってきた。

「忘筌庵を見せてやろう」

余所よその寺にどかどかと上がり込んでの台詞でもなかつたが、和尚にかぎつてそんなことも不思議でなかつた。大徳寺はわしのもの、繰り返すが、和尚の口癖だつた。

ふつうに茶室といえ、本堂なり庫裏なりから軒を分けた造りになつてゐる。ほかでもない、利休好みによるもので、だから名前も庵とか軒とか庭ていとか、簡素な一字で結んでゐる。だが、もともと茶の湯、喫茶は武家にはじまつたものだから、実際、茶室とあるように、建物の一室としてあつたわけで、多くは寝殿造りの北側、つまり裏側の一面に隠れるように設けられた、一種、秘められた場としてあつた。そのように、忘筌庵も孤篷庵の本堂である客殿の檀那間の裏側、衣鉢間いはつづまにあたる場所に造られている。表の檀那間が陽の間なら、裏の衣鉢間は陰の間で、ときに檀越や客人との密談もあつただろう。

少し説明を入れておくと、禅寺の本堂というのは、本来は仏殿にあたるものだつた。だから畳も板床もない基壇じかに直に瓦敷きの三和土だつた。それが室町期に寝殿造りを取り入れ、高床を張り、さらに江戸期にはその上に畳を敷くようになってゐる。そうして使用目的も仏像安置の場から、スポンサーである檀越、檀那をもてなす場に変わり、だから客殿と呼ばれるようになつた。

なかは大きく六つに仕切られる。まず、南面する真ん中の区画が室中しつちゆうといって、仏事はここで行なわれる。そして左右の二つのうち、玄関に近い方が礼間れいのみまで、奥が檀那間だんなま。礼間が客人接待の部屋なら、檀那間はスポンサー専用の座敷と思えばいいだろう。つまり、本堂は寺の財政支援者である檀越のための建物だった。同様に北側の三つは、真ん中が仏間で、手前が書院、奥が衣鉢間という造りになっている。書院は住持の居間を兼ねた寢室で、衣鉢間は住持が弟子に法を説く、つまり教室ということになる。

「おいつ、こつちや」

勝手知ったる我が家のように本堂脇を飛び石伝いに、和尚は露地を行った。するとどん突き手前の木陰の洲浜すはまに苔生した蹲踞つくばいがあつて、すぐ脇が、落縁おちえんといつて、低い濡れ縁ぬえんになつてゐた。軒下の三和土とはいくらの段差もない。そこから客人は部屋、つまり茶室に上がるのだが、変わつてゐたのは濡れ縁の上がり端はなの敷居と鴨居の間にもう一つ敷居が走つていて、上側に明かり障子を仕立ててゐることだった。ふつう、茶室の入り口といえは躡口しりぐちだが、開放的で、それが無い。

「わかるか、これが遠州好みや」

中敷居を、さしていった。

下側は建具もないまま筒抜けて、洲浜に撥ねた斜光を部屋の天井に映す仕掛けになつてい

る。と同時に部屋からは縁先の蹲踞や植え込みの低燈籠も見てとれる。上側の明かり障子は西陽にしびを遮る目隠しの役目も兼ねているというわけだ。

「この上と下でころりと世界が変わる、遠州の真骨頂やな」

重ねて、中の敷居をさしていった。そのように日中の陽の高いときは、上の障子部分は薄暗がりなのに、下は反射光で淡く白み、逆に陽が西に傾くと、上が明るんで、下が植え込みの陰を落として暗くなる。時間を追つての明と暗の水平世界、湖北に生まれ育つた遠州にはごく日常の世界だった。それを和尚はいつたのだろうが、落第小僧は、理解に半世紀もかかっている。

そして週末の日の暮れだった。

玄関の、ぴん、ぽーん、にドアを開けると友人だった。ぼくより一廻り近くも若いが、家も近い呑み仲間で、

「仕事帰りに、古本屋で見つけました」
と一冊くれた。

和尚の随筆本だった。利休鼠の簡素な装幀で、題字は和尚だろうと一目でわかる、筆尻の撥ねが躍りすぎる。すっきり背も灼け、小口も点々と染みだらけだった。

開くと、ふんと黴かびの臭いがする。奥付をたしかめると、逃亡半年後の初版だった。お札をいっ

て、逸^{はや}る心を夜まで抑え、風呂上がりには、一人、食卓の丸テーブルに向かつて読みはじめた。

ああ、そうでしたね、そうでした……、

頁を繰るごとにむかしが蘇^{よみがえ}って何度もうなづく。気づくとすっかり日付も変わっていた。

あとは、明日にしよう、

思^{おも}って閉じたが断ち切れない。それでまた、ぱらりとめくりはじめたら、こんな条^{くんだり}を見つけて胸が熱くなった。

——今夜、小僧のつくつてくれたライスカレーは美味^{うま}かった。どこの料亭の御馳走^{ごちそう}より美味^{うま}かった……。

嵯峨^{さやま}に、祇園^{ぎん}に、上七軒^{かみしちけん}、と招待^{さそい}が多くて舌の肥えた和尚^{わしやう}だったが、ぼくらに強請^{ねだ}るのは、いつもきま^{きま}って肉じゃががカレーライスだった。

かすみ比叡

「親鸞さんはな、あれは頭を剃つてはおらんんだ」

午後の茶事の初っ端だった。和尚がいった。

「禿僧いうてな……」

そこでぼくらは背筋を伸ばし、これは長くなるぞ、と覚悟した。

和尚は続けた。

「あの禿いうんは、禿頭のことやのうて、まあ、いうたらバリカンの五分刈りいうところやろか、自分でも愚禿というておつた」

ぐ、と、く？ 何のことだか、喉奥で、一人、鸚鵡返しにいつてみた。

「五分刈りいうても、べつにずぼらをかましとつたわけやない。抗いうたら下世話になるが、あの人なりの考えがあつたのやろう」

いいながら茶碗に湯を注ぐと、しゃか、しゃか、茶筌を躍らせた。

——茶はかたちから、

作法に喧しい和尚だったが、口とは逆に、苛ちの和尚の点茶は忙しなかった。

「禿は、かぶろとも読むんやな」

これには一番上の兄弟子がうなずいた。それで和尚も勢いづいた。

「寒山拾得みたいに、というたらわかるやろ？ 髪の毛を結い上げんと、こう、短こう肩先まで垂らしたままの、あれやな」

手真似しようとするのだが、あいにく二つとも茶碗と茶筴で塞がっている。代わりに肩をもぞもぞさせた。

「いうても、散切りまではいかんかったやろ」

そうして小一時間、いつものように和尚の話は続いたが、中学上がりのぼくには、話の深意はもちろん親鸞の何かもわからず、頭のなかは、はじめて胸を熱くしたクラスの子のことばかりだった。

大徳寺の惣門を東に抜けた門前町、そのかかりの町家からだつた。夕方、薬石の支度に商店街の豆腐屋に走つて出ると、子犬を連れて境内散歩にやつて来るのを見つけていたし、学校の通学路になつていた朝の参道でも毎日のように見留めていた。いつも時間を計つたように惣門をやつて来る。それを参道の松の木陰で待つて、偶然出会つたふりして会釈を送つた。

さて、禿の話だが、親鸞が自ら愚禿といったのは越後に下る前後のことだつたらしい。源空、つまり法然から授かつた緯空を改め、親鸞と名乗るのも同じ頃で、三十も半ばを過ぎていた。

愚禿は愚僧と同じに使われることもあるが、もともとは親鸞がいったのにはじまつている。愚とはいつても、謙へりくだりではなく、親鸞の場合は苦悩の末の開き直りといつていい。愚にはもともと、おろかな物真似猿という意味があつた。だから愚禿には「袈裟けさがけ姿でやつてはいますが、ふりだけで、ほんとの出家ではありません」と素直な声も聞こえてくる。そんなことが大つぴらにいえたのも、親鸞当時、仏僧でありながら髪を伸ばしていても、けつして異形ではなかつたからだ。道元は歎なげいてゐる。

——長髪ながみは仏祖のいましむるところ、長爪ながづめは外道げいどうの所行なり。仏祖の児孫じそん、これらの非法ひぼうをこのむべからず。身心をきよからしむべし、剪爪せんそうていばう剃髪はつすべきなり。

かつて遊学した宋での仏僧の、たぶん物臭ものくさから来る風紀の乱れをいつたのだろう、『正法眼蔵』の戒めだが、弟子に向かつてこう説かねばならなかつたほど、この国の宗門も同じけしきにあつたと見える。親鸞の少しあとのことだつた。

道元は鎌倉初期の一二〇〇年に生まれている。一一七三年の親鸞よりは二回り年下で、『正法眼蔵』は道元の三十過ぎから五十三の遷化せんげまでの記録だから、道元が歎いたときには親鸞はもう六十は過ぎていただろう、源平の争乱のあと、京師の仏僧の暮らしはかなり荒すさんでいた。といつても親鸞の場合はただの怠けからではない。剃髪はつと鬚まげの中間、つまり聖まじ（僧）でもなければ俗でもない、二つの狭間を生きようという意思表示があつた。なぜだつたか、もう一人、日

蓮を並べてみるとよくわかる。三人はほぼ時代を前後同じにして不思議な関係で生きていたからだ。

親鸞と道元には二回りの齡としの差があるといつたが、一二二二年生まれの日蓮は、さらに道元よりも二回り後の人で、つまり親鸞からすれば、道元は子、日蓮は孫の世代にあたる。親鸞は九歳で慈円じえんのもとに得度して比叡山ひえいざんに上のぼった。慈円は摂政から閑白、太政大臣にまで昇り詰めた藤原氏嫡流九条兼実かねざねの弟で、兼実は後白河法皇と対立して源空に師事している。その源空は比叡山を嫌ってすでに東山の吉水よしみに下おりていた。一方、道元は十四歳で同様に比叡山に上り、これは三条家から出た公円こうえんについて出家している。そして日蓮は十二のときに安房清澄山きよすみやまの道善房の門を叩いて、十六で出家、二十一のときに比叡山に移っている。

そろって比叡山をめざしたのは、そこが最高学府だったから。最澄以来、中国を通じて蒐集した仏典の、つまり学問史資料のこの国最大の図書館だった。そしてもう一つ、僧の資格の戒を授ける国家機関でもあった。平たくいえば僧という欽明期以来の国務官僚の国家試験の場でもあったからだが、日蓮の頃にはほとんど機能をなくしていたと見ていい。

修学期間は、親鸞が二十年、道元が三年あるいは四年、日蓮は十年だった。この期間や入山年齢の開きにはけっこう意味があつて、三人のその後を決めたといつてもいい。いまでいえば、親鸞は付属小学校からの生粋の叡山生だったのに対し、道元は大学部門からの入学で、それも

何を思ったか、最後は中途退学している。そして日蓮の場合は大学院からの転入生だった。にもかかわらず修士から博士課程までを完修するという超英才コースを歩んでいる。同じ叡山修学といつても、三人の中味はまるでちがっていた。

「親鸞さんはな、堂僧どうそういうて、声明しょうみょうを専門にやる人やった」

和尚はいつたが、そのように比叡山の修行僧といつてもいろいろで、まず出自のちがいから、貴族子弟のように、いまでいえば茶道宗家が子弟を京都や鎌倉の禅門に行儀見習いに出すように、成人までの一時を過ごすものと、僧の道そのものをめざすものがあり、また、貴族の出自にも京師みやこと地方のちがいもあつて修学コースも入山はじめから大きく二つに分かれていた。学僧と楽僧である。

学僧は、道元や日蓮がそうだったように、学問僧といえればわかりやすいか、経典の学究をめぐした修行僧、つまり学生がくせいで、比叡山の場合、その在学期間は十二年だった。それに対し楽僧は、経典を唱える声明を専門にした修行僧で、堂僧ともいつたが、親鸞の場合はこれにあたる。

「声明いうんはな、わしらはやかましくいわんからおまえらもわからんやろうが、相国寺あたりはやたら厳きびしゆうてな、独特の節回ふししで唸うなりよる」

そのようにぼくらは経を教えられたことがなかった。すべて和尚の見様見真似で、だから弟子の間でも調子がちがって、優等生だった中の兄弟子は、うおーん、うおーん、と唸るように

読んだのに、上の兄弟子は平板でさらりと癖がなかった。そしてぼくは蚊の鳴くように、ふおん、ふおん、と口籠もるばかり。経が嫌いで、般若心経以外、空でいえたためしかなかった。

和尚は続けた。

「知らん者が聞いたら吹き出しよるやろ。女のように、か細い声で、それを、童行、喝食いうて、小さいときから叩き込むんやな」

聞いてぼくはさらにお経が嫌いになった。

「けど、親鸞さんら堂僧がやりよつたんは、どないいうたらええやろか、浄瑠璃いうたらいい過ぎやろが、わしらみたいな舟を漕がす経やのうて、こう、人を酔わす、そんなんやつたと思うがな」

そうもいつて、あとはどうだったか、ともかく本来の経というのは、たらたらと眠気を誘うようなものではなくて、唱えるにもきちんと決まった、音律、旋律というものがあつたというのだった。だから一堂に会しての声明には、西洋のミサ曲やオラトリオさながらの荘重さ、華麗ささえ見えたのかも知れない。それを楽僧は、不断念仏、常行三昧といつて、方丈、つまり一丈四方の堂宇に籠もり、阿弥陀の周りを唱えて廻る、一種、断食に近い難行で、わずかな食事と大小便以外は昼夜休みなく九十日にわたつて続けた。

「声のきれいな人やつたらしい」

和尚はいつたが、そうして念仏三昧、親鸞は二十年を送っている。

といつて、籠もつてばかりいたわけでもない。上の兄弟子がいうには、僧堂暮らしもそうだったらしく、剋期摂心こつぎせつしんといつて夜昼ない坐禅三昧の堂籠もりは一年のうちでもほんの一時のこと、あとは托鉢と作務の林間学校のような毎日だった。その托鉢にも、じつはいろいろ抜け道があつて、身を切るような寒風さむかぜの朝、シャーベット状の雪道を素足に藁草鞋わらで、うおーつ、うおーつ、と白く息を残して駆けていく、そんな墨染め姿は、見ているだけでも寒気がしたが、じつは、人もさまざま、ところもいろいろ、ふと町家の門口に立てば、「寒おつしやる」と暖簾のれんの内から声もかかり、一服どころか昼時の接待もあれば、ときには「一杯、どうぞつしや」と熱爛ねつらんに昼寝付きというのもあつたらしい。

比叡山も同じだった。回峰行といつて、平安中期にはできあがつていたらしいが、白麻じまの息災浄衣そくさいじやうえと白袴こしの小五条袈裟せうじやうけさに身を包み、手甲脚絆てこうきゃはんに蓮華草鞋れんげ、そして頭には檜傘ひがさ、手には杖じやう、つまり不動明王そのままの姿で、険しい比叡山の杣道を丑三うしつ時から駆け抜ける、そんな苦行があつた。峰筋だけでない、東の坂本に下つたり、反対の西には雲母坂きもらざかを修学院から高野たかのに下りたり、さらに、これは大廻りおおもりといつて市中の神社仏閣を、途中、大路小路の門口かじに加持かじを授けながら駆け廻るめぐ。そうして夜はまた堂籠もり。これを百日にわたつて続けるのが百日回峰行で、さらに七年に続けるのが千日回峰行といつて、総程九百七十八里、約三万七千九百キロと

いうから、地球一周にあと一步という超人行だつた。

ただそこにも托鉢と同じにいろんなげしきがあつて、ときに親鸞も、逸る想いで雲母坂を駆け下つたことだろう。ほかでもない、行き先は条坊貴族の館だつた。当時の京都は、洛中、つまり鴨川以西だけでなく、東に越えた、いわゆる川東にも平氏の栄華で街は広がつていた。もちろん、洛中も保元以来の内乱で荒んではいたが復旧も進んで、そんな貴族のもとに、親鸞にかぎらず楽僧たちは足繁く通つていたのだつた。

何をしに？ 不断念仏のためだつた。追善供養、安産祈願、滅罪、往生祈願など願事成就が盛んで、念仏会が貴族の間で定期的に開かれていた。そこに招かれていくのだが、のちの親鸞の念仏道場というのも、それを京師に倣つて地方に広げたものだつた。午後には山を下ると夕べから念仏に入り、宵の口まで続いて月明かりの雲母坂を戻つていく、そんな一日だつたかも知れない。

その念仏とは、どんなだつたか？ 気儘に想つてみるのだが、常行三昧で鍛えた喉奥から、流れるようにうたい出る声明は、貴族や子女の耳には陶醉の旋律で響いたにちがいない。

「念仏いうてもな、あの頃のお経いうんは抹香臭いもんやない。いうたら、いまの若い者が走りよるニューミージックみたいなもんやなかつたかな」

ニューミージック？ 目を丸くするほくら小僧にも涼し顔で、和尚にはそんな新語もめずら

しくなかつた。

和尚のもとには、これもちよつとした理由わけがあつて、毎日のように政財界の大物連がやつて来ては、あれこれ書院や茶室で話をしたあと連れ立つて嵯峨や北野の料亭に流れていった。そんな客連がグリーン車やハイヤーのなかで読んでいたのだらう、気を利かして、手土産といつしよにあれこれ週刊誌や雑誌を置いていった。それを和尚は捨てずにいたから、ぼくら小僧以上に流行はやりにも詳しくかつた。読むとあとは心得ていて、奥の隠察から、とこ、とこ、東司とうすや用事ついでに廊下を来ては、ぽいつと玄關脇の小僧部屋に投げていく。ちやうど週刊誌も諸誌乱立の最中、過激化する記事や巻頭グラビアにぼくら小僧は性の癒やしを見つけたのだった。

「おまえらにはわからんやろうが、寺が葬式にかかわるようになったんは、そんな古いことやない。迦さかのほつてもせいぜい江戸の頃やろう、はじめに手を染めたんは、わしら臨濟禪やつた」
檀越だんおつの室町守護や戦国大名、武将が没落。喰えなくなつた臨濟禪が、幕府保護の代償に葬式仏教の先頭に立つた、それをいつているのだった。

「禪宗うんはな、もともと中国では貧乏人相手の宗教やつた。不立文字ふりゆうもんじ、教外別伝きょうがいべつでんいうんも、いうてる本人も字が読めんかつたからそういうたまでのことで、それがどういふ理屈か、この国では氣位たてが高うなつてもうた。武士を相手にしたからやろう」

禪宗にかぎつたことでもなかつたが、僧が人の生き死、つまり、弔とむらいにかかわるようになつ

たのは江戸期の宗教政策、檀家制度、寺請制度によるもので、臨濟禪が先陣を切つて牽引役になつている。

「まあつ、そういうこつちや。ようはわからんが、念仏の、あの謳ううたような節回しに貴族の女は酔いよつたんやろな」

けろりといつたが、楽僧だけでない、より上のエリート集団だつた学僧も、同じように雲母坂を下つては貴族の館を訪ねている。ただかれらの場合はちよつとちがつて、経典の講釈をして聴かせる、いわば文化講演会のようなものだつた。

それを親鸞たち楽僧は、頭でなく耳を通して間脳を刺激した。一日に限らない、別時べつじ念仏といつて、一週間、十日と、昼夜にわたつて続くこともあつたらしい。と、そこは生身の人間世界で、男と女、聖と俗、いろんな交わりもあつたにちがいない。そんな親鸞の訪ね先の一つに、のちに妻となる恵信えしん尼もいて、やがて聖俗結界の雲母坂が、戒と邪の煩悶もん坂に変わつていく。

その雲母坂を和尚も上つていた。

「わしらの頃でも、比叡山はこの道の原点やつた」

大阪の堺に古くから続く紙問屋の、和尚は後取り息子だつた。それを十八で家業を投げて大林宗套そうたうの南宗寺なんしゅうじで得度、二十歳のときに比叡山をめざしている。

「とにかく、まっすぐ上つてやろうと思つてな」

和尚らしかった。

「鴨川も、じゃぶ、じゃぶ、法衣ころもの裾からを絡からげて渡つたわな。白川の一乗寺あたりやつた、春の泥田どろたもそのまま突き切つてな。目が見えんいうんはああいうのやろう、勇むいさばかりで怖いもんがなかつたわな」

ところが門前に追われたか、逆に、和尚の方が見切つたのか、わずか三日で山を下りている。たぶん和尚の飽き性の結果だろう。それを親鸞は二十年続け、山をあとにしたのは二十九のときだった。妻帯という破戒との煩悶の末だったか、学僧との諍いさいだつたか、それとも寺門もん園城寺じょうじや南都なんど興福寺との政争に明け暮れる山門醜姿しゅうしに倦あいたのか、市中、六角堂に籠もっている。いまの烏丸御池の交差点にほど近い。むかしはかなりの寺域を誇つていただろうことを『名所図会』は教えてくれるが、すっかりビルの谷間に縮籠ちぢこもっている。開基は聖徳太子、と縁起うきは嘯さくがおそらく平安半ばの創建だろう、西国三十三箇所さんじゅうさんの札所にもなっている観音霊場で、そこに親鸞は百日参籠さんろうをめぐし、九十五日目の朝、枕辺に太子が立つて偈げを授けたとして、煩悶の鎖を解いた。

本来、仏殿、仏堂というのは、中国伝来そのままに床は三和土たたきか、瓦敷きの素朴なものだった。それが平安半ばに観音信仰の広がりひろがりで靈験参籠さんろうがブームになり、長く直じかに座るのは足腰に悪いからと板張りになり、さらに座蒲団代わりに畳が敷かれることになる。六角堂もそんなか

たちでなかつたか、山を下りた親鸞は吉水に源空の門を叩いている。吉水は東山の山懐やまふところ、知恩院の南の將軍塚への上り口で、もちろんいまより山深かつた。そこに源空は草の庵を結んでいた。

源空は親鸞には一世代上の大先輩だつた。美作みまさかの人で十三のときに比叡山に上つて学僧をつとめている。鋭才だつた。そして親鸞が生まれた頃には、見切りをつけて吉水に下りていた。四十三歳。あとを慕つて弟子の多くが山を下りている。いまでいえば、政争と保身の狂騒に飽き飽きした看板教授が大学を去り、私塾か研究所を開いたところに、将来を約束された俊英たちが中退して参集したかのようで、親鸞も、楽僧という専門学校コースの学生ではあつたが、少し後おくれて門を叩いたのだつた。

源空が注目されているのは、女性に対しても教えを説いたことだつた。それまでのこの国の仏の教え、つまり仏典というのは漢字で書かれていて、男だけを対象にしていた。それを声明、いかえれば音の経典として源空は万人に広めようとした。漢字が読めない、さらに文字を知らない階層への社会参加のきつかけづくりだつた。すると、当然のように、それは聖と俗との隔いだたりの解消、つまり、僧の世俗化につながっていく。だから親鸞が六角堂に籠もつたのも、聖徳太子から偈げを授さずかつたというのも、いうまでもない、のちの教団の辻褃つじま合わせの説話に過ぎない。ほんとうはまっすぐ源空のもとに走つただろうし、行き着く先はそこしかなかつた。そ

して名前も範宴はんねんから善信ぜんしんと改めている。何のためか？ 善信というのは俗名で、つまりは法号を棄てるという意思表示だった。いうまでもない、得度して師から戒を受けた者はそのときもらった法号で仏さんのアドレス帳にリストアップされている。それを棄てるというのだから仏さんと縁を切るということになる。その理由は？ 妻帯のためだった、と考えていい。いつて信仰、つまり自分の立ち位置は棄てられない。現実には矛盾だらけになってしまいが、聖と俗の狭間を生きようとしたのだった。

そこであの言葉だが、「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや、しかるを世の人つねにいわく、悪人なお往生す、いかにいわんや善人をや」というのは、そんな親鸞の独創と思っていたが、じつは源空が最初だった。二人がちがったのは、源空は、それでも善人たらんと努めたのに、親鸞は、さらりと棄てて、自ら悪人であると開き直っている。といって斜に構えたわけではなく、まっすぐ素直に生きようとしただけのこと。これは知っておいていいと思うが、当時、僧の妻帯はめずらしいことではなかった。僧に女犯の戒がきちんとしていたのは、せいぜいが平安遷都頃までだろう。あとは律りつも法も崩れつぱなしで、平安末期には妻帯もごくふつうのけしきになっていた。

もともと釈迦の集団、グループには、その教えを守って家、つまり私財や地位を棄てる出家に対し、教えは守るが家は棄てずに、逆に家を守ることで出家を支える者、つまり檀越、ある

いは沙弥しゃみともいったが、周縁の取り巻きの二つがあつた。出家に妻帯は許されない。けれど檀越、沙弥はその限りでなかつたから、たとえ出家の身で妻帯することになつたとしても、出家をやめ、檀越として支援者に回ること、変わらず教団に身を置くことができた。それがこの国ではようすがちがつて、妻帯しても出家をやめないのがふつうになつていた。親鸞はそれに抗あらがつたのだらう。だから比叡山を下り、自らを禿僧と呼び、出家の象徴でもあつた剃髪をやめたのだらうとぼくは想像している。よく目にする、あの人相の悪い親鸞像は剃髪姿で写つているが、じつはずつと晩年の作で、禿とするにも老い過ぎて髪がなかつたのではないか。善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや……、同じようにいつた二人だが、戒を守り出家を通した源空には、人に善悪の仕切りをつける必要はなかつた。ともに救われればそれでよかつた。けれど、妻帯、破戒の親鸞には、悪人の往生は欠かせない。あの悪人は、土地を持たない、川筋に生きた下層の人々、というばかりではなかつた。

そして妻帯の問題は、じつは法の問題でもあつた。よくいわれる、正法しょうぼう、像法ざうぼう、末法まつぼうの三時さんじの説も、ほんとうは僧の妻帯問題から生まれている。釈迦が死んでから五百年なのか千年なのか、いろいろ議論はあつても、ともかく数百年の間は釈迦の教えもきちんと守られ、すべてが覚者かくしゃ、つまり釈迦の生き方をめざしていた。それが正法の時代であつて、あとの数百年は、教えはなんとか守られるが覚者をめざす者がいなくなる像法の時代、そしてあとは、覚者をめざす

者はもちろん、釈迦の教え、つまり法さえ守られなくなる末法の時代に入っていく。これは、そうなることを預言したわけではなく、そうなつてからの理屈付けだった。だからこの国に仏法がやつて来たときには、すでにどこにも覚者をめざす者などいかなかった。端はなから、破戒、無法の仏教だった。

これを経典からいえば、釈迦の説法、つまり経が意味を持っていたのは正法の時代だけとなる。続く像法の時代には、それを忘れないよう解釈して努めた。それが末法の時代になると、もう中身を説ける者もなく、ただ、南無阿弥陀仏、妙法蓮華経と題目を唱えるしかなかった。釈迦の教えは、時代が下るにつれて大衆化されたのではなく、説く者がなくなつただけのこと、源空、親鸞の時代には法も覚者もすでになく、念仏でさえすでに怪しかつた。

源空は嘯いている。「聖であつて念仏がならないなら、妻帯して念仏せよ」。妻帯のために僧をやめるといふのなら、妻帯するのもかまわないから信仰を棄てるな、素直すなおにはそう読める。けれど、もう少し奥が深かつた。

古くインドではサンガ（僧伽）といつて、教団のことだが、僧というのとはもともと、そのなかでしか生きられなかつた。家も財も棄てていたからで、だからサンガを離れると、身を寄せた家と財を求めなければならぬ。つまり、妻帯するしかなかつた。いまとちがつて女性にも相続権があつたからで、それが否定されたのはこの国では江戸に入つてからのこと、室町まで

は女も男から自立して家を持つていた。その意味で、僧の妻帯というのは教団の拡大には自然なこと、むしろ、あるべき姿だった。ただ、親鸞がちがったのは、多くは妻帯しても聖の地位に執着したのに、それを棄て、ひたすら俗のなか、禿僧に生きようとしたことだった。

親鸞が吉水の門をくぐった頃、源空人気は最高潮にあつた。宗門に限らず貴族や、遠くは熊谷直実、宇都宮頼綱といった幕府の有力御家人や関東武士団も門を叩いていた。余談だが、宇都宮頼綱の宇都宮というのは領国の地縁によるもので、姓としては藤原姓、藤氏を名乗っている。時代的に藤原定家とも親しく、娘は定家の長男為家の正妻に入っている。その子の為氏と、阿仏尼で知られる為家の後妻の子為相との間で家督相続の所領争いがあつて、為相が別家を立てる。それが歌道の冷泉家としていまに続いている。

そんな勢いの源空だったから南都北嶺はおもしろくないのも当然で、その提訴で源空は讃岐に流され、親鸞も連座して京師を追われる。頼つた先が越後の国、妻の父三善為教の所領があつた。当時、刑罰というのは貴族を対象としたもので、だから流刑といつても裸一貫で追われるのではなく扶持も支給されていた。ただそれもせいぜいが半年で、あとは自力で生きていかねばならなかつた。ために身寄、コネクションが欠かせない。親鸞にそれは恵信尼以外になかつたし、だから恵心尼とは京師で知り合つていたと想像するしかない。聖と俗の狭間で苦しみ、悶えたのも恵心尼がいたからこそのことだった。



正伝寺からの比叡山



稲田の見返り橋

そして四年、赦免は下りたが親鸞は戻らなかつた。源空は吉水に帰つたが二カ月後に逝つて
いる。七十八歳。それも親鸞には一つの節目になつたのだらう、かつて源空から授かつた綽空
の法号を改め、自ら愚禿と呼びはじめた。見た目、形としての僧を棄てたということだろう。
三年後には妻子とともに越後を出て、途中、転々としながら信濃から碓氷を越えて常陸の稲田
に落ち着いている。なぜ稲田だつたか？　そこに恵信尼の父の所領があつたからとも、あたり
に勢力のあつた宇都宮頼綱の縁族に招かれてのことともいうがどうだつたか、吹雪谷と呼ばれ
た山合に庵を結んだ。南に筑波山から加波山かばさんに連なる碧い峰筋を望む、いままも穏やかな里であ
る。

「ああ、あれやつたら、まっすぐこの先の……、ほれ、あそこに見えますやろ」

稲穂がやさしく小首を垂れ、蕎麦の花が白く爽さわやかな一日だつた。二人、常磐線を友部で乗り
換え、ごと、ごと、行つた。前から訪ねたいと思つていた。それを一通り境内を廻り廻り、裏
門から里に抜けたところできがしていたら、田圃の畦から老爺が教えた。ごつごつと節ふし搏と立たつ
た指先の、野道の終はてに白く小さく光つていた。見返り橋。京師に戻る親鸞を、越後に向かう
恵信尼が見送つた。還暦を過ぎての親鸞の、妻との最後の別れだつた。

親鸞は生きるに器用な人だつた。禿僧といつたのもその一つだらう、戒を棄てた俗僧に、自力
による開悟の道はあり得ない。すると他力によるしかなかつた。そう考えての他力本願であつ

て、妻子を持った親鸞は、俗僧であることを自認していたから、門下を子弟でなく、同朋どうぼう、同行どうぎょうと呼んで親しんだ。ともに念仏する者、という意思だろう。だから暮らしの場も、いまでいう寺ではなく、ふつうの造りの建物で、それを道場と呼んでいた。

そして三十年、最初は越後の恵信尼からの助けもあつたというが、それも絶えたか、晩年は同朋からの布施によつて過ごしている。どこか、いまの年金暮らしに似て、微笑ましい。九十歳で、仏陀さながら北を枕に西面し、念仏を唱えながらの最期だつたらしいが、家族思いだつたのだろう、俗に過ぎるといえばそれまでだが、直前に、死後の家族への援助を常陸の同朋、同行に願のぞひ遣のこしている。「ひたちの人々の御中へ」と結んだ書状で、受け取つた弟子たちによつて東山の太谷に廟が建てられ、娘の覚信尼がその留守居として暮らすようになる。つまり墓守で、それが世襲となつて、いまの門主に続いている。

「どこかで見えた気がする」

傍でいった。ぼくも思つていた。御坊の裏山の、杉木立のなかを二人並んで南に向かい、加波山を望んだその山並みが、比叡山から音羽山にかけての東山にそっくりだつた。親鸞の稲田を選んだ想いが、少しだつたが、わかる気がした。

そんな比叡山もじつはいろいろで、御所の北、今出川を越えて上がると頭もつんと尖とがらせて凜りんとして見せるが、逆に、丸太町を南に下がるとずんぐりむっくり、愚鈍といえはいい過ぎだ

が、穏やかに丸ぼつたくなる。もちろん稲田のそれはあとの方で、たぶんむかしは、六角堂からの眺めもそんなふうではなかつたか、親鸞の原点ともいえるけしきだつた。

そしてぼくにもぼくの比叡山があつた。小僧に入つたその日、あてがわれたのは庫裡奥の屋根裏部屋だつた。天井はきちんとあつた。けれど低い鴨居に、古畳も黴臭いばかりか、あちこち縁も擦り切れ、藁床もぶかぶかと頼りなかつた。それでも広い八畳間はぼくには贅沢過ぎた。

惚けだらけの毎日なのに、鮮やかにむかしが蘇るから不思議だが、片側に二間の押し入れがあつて、反対側には一間幅に腰窓が開いていた。ちようど東に向かう切り妻の真下にあたる。明かり障子の外に木格子の入つた揚げ窓で、内から竹棒で突つ張り上げる鎧板の吊り戸がかかつていた。と、それだけで、真ん中に天井から、乳白の硝子傘を被つた灯りが一つぶら下がっているだけ。しん、しん、と夜も更けて、はじめての朝だつた。枕元の時計に夢から醒めた。五時前だつた。腰窓に鎧板の割れ目から、ぼんやりと、白く光が射している。

そうだ、家じゃないんだ……、

いい聞かせると蒲団を出て、柱に吊つた竹棒で鎧戸を上げた。

ぎいーつ、と鈍い音がした。

街はまだ、どこも薄鼠に眠りのなか、比叡山がまつすぐ見えた。きれいだった。うつすら白みはじめた茜空に峰筋をゆるりと伸ばし、少しだが左肩を落としている。その傾きがなんとも

妙で、煤けた窓の額縁に墨絵のようにおさまった。

はじめての比叡山だった。だから、比叡山といえは、京都からのが表の顔と思っていたが、最近、近江を歩くようになって、ほんとうの顔は近江にあつて、あの頃、見ていたのは、じつは裏比叡でなかつたかと気づきはじめている。

そんなぼくにも迷いがあつて、二年目の秋だった。二人、雲母坂から、錦に燃える木立のなか、てつぺんめぎして登っていた。途中、ふと出た見晴らしで膝丈ほどの野面石に並んで休んだ。街が晴れてうつくしかった。と、隣で小さくいつた。

「禅宗のお坊さんつて、結婚できないんでしょ」

それに黙ったまま、明るる春、ぼくは寺を逃がっている。

小僧の朝あした

「その箒ほうき、ずいぶん変わってますね」

雨上がりの門口を掃はいていたら、ジャージ姿の婦人だった。朝の散歩らしい、一回りかそこいら年上だろう、ときどき見かけはしたが、話すのははじめてで、いつもは元気に大きく両手を振って、つつつと行ってしまうのに、どういうわけか、その日はちがった。

「これですか？ 棕櫚箒しゅろほうきですよ」
すると婦人は首を傾げた。

「棕櫚しゅろって、あの棕櫚おにげですか？ 茶色の、束子たわしの長いような」

「ええ、けど、あれは鬼毛箒おにげといって、同じ棕櫚おにげでも皮の方でつくるんですが、これはただ葉たばっぱを束たばねただけで」

いいながら改めて箒ほうきを見たが、婦人が不思議に思うのも無理はない。半年近くも使い古しているから腰もよれよれに、葉先も毛羽立ち、茶枯れたお化けのようになっていた。それでも婦人はにこやかだった。

「へえー、めずらしいですね。ご自分でおつくりになったの？」

いい人だった。だからぼくもその気になって、「ええ、まあ」と照れてみた。婦人は興味津々だった。

「でも、棕櫚なんて、今時いまじき、なかなか手に入らないでしょ」

それでぼくもその気になった。

「いえ、ほら、あそこ、森が見えるでしょ」

通りの先を指さした。ここ四、五年、近くにも空き家が目立って寂しくなったが、むかしからの家並みの終はてに、少したが、赤松のそびえる緑があった。

「何本か、棕櫚も植わつてましてね。勝手にもらつてるんですよ」

「えー、えー、あそこね」

と知つたふうだった。

「どなたがなさるのか、いつもきれいにしてらして、わたしも悦よろこびませてもらつてますの。この間なんか、宝鐸草ほうたつくそうが咲いてましたもの」

につこりいって、胸前に、掌を小さく広げてつくつて見せた。

ほうちやくそう？ ぼくは首を傾げた。けれど婦人はそこまでで、くるりと向きを変え、すた、すた、行つた。

森といったが、ちよつといい過ぎ。もともと広い屋敷森だったのが相続で切り売りして、建て売りがいくつかできたその隅に猫の額ほどに残された一画だった。後ろに高い光悦垣の旧家があつて、税金逃れだろう、自治体に明け渡して、憩いの森、と長閑な案内板も立ち、残つた五、六本の赤松も空高く清やかだつたが、子どもの遊ぶ姿はもちろん、犬猫の出入りする気配もなかつた。

ところが、どういふつもりか縁なのか、ときどき背中を丸めた老婦の姿があつて、道沿いの植え込みに細々と季節の花がきれいだった。その奥の木陰に隠れてあつた棕櫚の木から、盆暮れに五、六枚、黙つて枝葉をもらつていた。小僧暮らしの褒美といえぱうつくしいが、門前の小僧は経を覚えるというのに、落第小僧はそれさえできず、いまま棕櫚箒をつくることだけ忘れずにいる。

「棕櫚の葉を取つてこい」

和尚がいった。

粥座のあとの、いつもの茶事は早めに切り上げ、その日は朝から忙しかつた。いわれて走つたのは裏庭だった。比叡山を借景に東から南にくの字に広がる方丈庭の南の築地の向こう側、隣の塔頭との間には、奥行きも五間あつたかどうか、細長い空き地があつて、東の半分を縁戚

墓地に、残りを畑にいろんな野菜をつくつていた。和尚は堺の商家の生まれだから百姓仕事には疎く、世話をしていたのは一番上の兄弟子だった。鳥取の東郷の人で、在は百姓家ではなかつたと思うが、鋤を担ぐ姿がしっくり似合つていた。その墓地と畑の境に天を突いて二本、夫婦のように寄り添つて古い棕櫚の木があつた。これも兄弟子がやつていたのだろう、いつもきれいに枝打ちされて、高い空にさらさらと青葉が初夏の風に涼しかった。それに梯子を差しかけて、いわれた通りに五、六枚、手鋏で伐ると庫裡の中庭に持つて走つた。

和尚は作務衣姿で待つていた。柄にする青竹は、前の日に僧堂の竹藪からもらつてきている。その枝を払つて腰丈ほどに切り、先つぽにとつてきた棕櫚の葉を括り付ける。

「こうやつてな、向こうとこつち、右と左、交互に重ねるんやな」

手取り足取り、和尚は教えた。そうしていわれたように葉を裏返しに二枚ずつ向かい合わせに重ねてこれも棕櫚縄で縛る。すると縄の墨と葉の緑の対比も爽やかにきれいな箒になった。それを茶会の玄関や飛び石や、躡り口の三和土の浄めに使つたのだった。青竹の緑の匂いも気持ちよくて、妙にぴりつとしたものだったが、いまはどうか、そんな箒を使う茶会もないかも知れない。

それを五十を過ぎてからだつた。ふと思ひ出してつくつてみた。といつても都会暮らしだから竹を伐る藪もない。少し前なら、竹材の卸商も大通りに見かけたが、それも代が替わつて店を

閉め、貸しマンションに建て替わっている。しかたなく、ようやく見つけたネットで送つてもらったが、棕櫚葉の方はそうもいかない。自転車でさがし回つて、もうだめか、と諦めかけていたのを、なんのことはない、目と鼻の先に見つけたのだつた。そうしてやつてみれば昔取つた杵柄で、けつこううまく仕上がつた。だから一人、悦に入つて、以来、盆暮れには新しいのをつくつて気分替えの足しにしている。

箒ができあがると、和尚はいつた。

「ちよつと、ついて来い」

いつものことだつたが、この、ちよつと、に不安と期待が渦巻いた。それがいまは懐かしいのだから不思議だ。

和尚は庫裡裏から塀際の本陰道をすたすた行つた。そして方丈庭の苔の緑を横切ると隅の椿の老木の陰に隠れた木戸をくぐつた。さつき話した方丈の裏庭には、棕櫚のほかにも畑と墓地の境に大きな木槿むぎげの株立ちがあつた。肌も汗ばむ日も多くなりはじめた梅雨明けに、涼しげな立ち居姿で、それはよかつたが、咲き終わるとだらしなく花が萎しぼみ、ぼたり、ぼたり、とあたりを散らかつて行儀悪かつた。それを和尚は背伸びして、まだ花先の捻りを残したままの白い一輪を、手折ると塀際をまた戻つた。ついて来いとはいつたが、何をさせるわけでもない。そ

れが、

——かたちは見て取れ、

ということだったか。台所の什器棚に並んだ器のなかから丹波の一輪挿しを選ぶと、本堂脇の中庭の井戸端に走り、汲み上げた釣瓶の水に一輪をさつとくぐらせ丹波に活けた。それを骨清庵こっせいあんの床柱に掛けたのだった。

骨清庵は方丈と庫裡の間に二つあつた小さい方の茶室で、和尚好みに造つてあつた。繰り返すが、一畳台目中板向板丸炉壁床といつて、素朴な造りだった。いわゆる方丈で、畳が二枚きりの、一枚はふつうの大きさだが、もう一枚は台目畳といつて、四分の三に一方が削られている。その二枚の真ん中に細長い板を挟んでいるから中板で、板幅は五寸二分というから十五センチぐらいだったか、向板むこういたは台目の残りの四分の一を板敷きにした点前てまへの水屋で、台目構がまえというらしいが、上に吊り棚しつらを設えていた。

炉は入炉いりろ、つまり台目畳の内側にあつて、細かくは向炉むしろというらしいが、中板寄りに切つてあつたと思う。まん丸い炉で、その内側を塗つていたのが伏見の稲荷山の土だった。明るい黄色がかった壁土で、いまも伏見稲荷に行けば土産に売られているあの伏見人形も同じ土でできている。そういえば稲荷山一帯の伏見丘陵の歴史は古く、すでに縄文期から開けていて、古代には秦氏も最初に落ち着いて、土師部はじべも置かれていた。なんでも伏見人形は壊れて捨てられる

とまた稻荷山に飛んで帰るらしい。だから稻荷山の土はいくら掘つても少しも減らない。そんなことを教えてくれたのも和尚だった。

ともかく骨清庵はこの上なく利休好みの瀟洒な造りで、茶室に付きものの床の間もなく、廊下側の茶道口を入った脇の土壁を、壁床といつて、床の間に見立てて和尚の掛字がかかっていた。莫妄想、と書いてあつて、それはよく覚えているのに、意味はいまもわからないまま。あとは茶道口の斜め向かいに躡口があつて、脇に座蒲団ほどの連子窓が明かり採りに開いていた。だから、明るさも手元で文字が読めるかどうかの頃合いで、ちょうどよかつた。

もともと茶室というのは北向きにあつたものらしい。村田珠光も庵相と呼んで、茶碗が地のまま素朴に見えるのを悦んだ。それを南向きに、連子窓と下地窓を組み合わせて、明かり採りに変化をつけたのが利休だった。光が低く一方に偏るから、茶碗に陰が差して表と裏に表情が変わる。それを利休は悦しんだ。

さて和尚だが、丹波の一輪挿しを床の柱に掛けると、につこりいった。

「きょうは風炉やからな」

だからぼくも手伝つて、連子窓の跳戸を上げた。露地風が爽やかで、植え込みの緑の匂いがやわらかだつた。



勅使門前から南門へ、左が和尚の寺

茶釜にはいろいろあつて、入^{いりろ}炉を使うのは秋から冬にかけての寒い時節にかぎつていた。反対に暑い夏は、風炉といつて、畳の上に火鉢のように釜を据えた。入炉に比べれば少しの炭ですむ。不要な熱さを避けるためだろう、炉には部屋を暖める役目もあつたのだ。だから炉板は上げないで、そのままにしておけ、という意味だつた。

そして、また、とこ、とこ、と忙しそうに丸い撫で肩を左右に揺すりながら奥の隠寮にまっすぐ消えた。ぼくは一人、中庭に回り、広縁からの飛び石と、躑口の三和土周りを、つくつたばかりの緑の匂いいっぱい棕櫚箒で掃いて回る。といつても、大方は毎日やっているから改めて掃くほどの塵もなく、さらさらと浄めのような真似事だけで、棕櫚の葉先がかすかに土に触れるかどうか、そのふんわり感に遊んでいた。終わると中庭の井戸端に走り、手桶に水を汲んで飛び石周りに水打ちする。これはもう一度、陽の照り具合にもよるのだが、客が顔を見せる十分ばかり前にも同じように繰り返す。粋な計らいだつたが、この井戸水というのが和尚自慢の名水だつた。

いまは京都もけしきが変わつて思い浮かべるのも難しい。けれど、むかし、京都は水の街だつた。もともとが賀茂川の扇状地に広がつたようなどころだから当然だが、あちこちで伏流水が湧き出ていた。その名残がいまも堀川の東沿いに見えるが、大徳寺もその筋にあつて、境内を廻^{めぐ}る外溝には北の尺八池からの用水が大宮や紫竹^{しちく}の田圃をあちこち廻り廻つて流れ込み、終て

は一条手前で堀川に注いでいた。その外溝のすぐ南、船岡山の北麓には、いまは木陰の公園に変わっているが、滾々と水の湧き出るけっこうな淵もあった。それが、がたん、ごん、とのんびり走つた電車も消えて、空ものつぺりと筒抜けにアスファルトの乾いた街になっている。

「どや、美味いやろ」

和尚がいった。小僧に入った春、和尚の背中を追つて作務が終わつたあとだった。その井戸端で鶴瓶に水を汲んでくれた。

「いとくすい、いうてな、ここの真下を流れとる」

あのときは、ただ音だけで、無理矢理、納得していたが、偉徳水と書いたといまは知つている。たしかに水は旨かつた。とろりと舌の上を滑るように、そしてほんのりだが鉄臭い味がしたのはどうしてだったか。井筒は四角く野面石を組み上げて、覗くと縁はびつしりと苔生して、それほど深くはなかつたと思ひ出しているが、羊歯が生い茂つて底がなかつた。その井筒の上に高く鳥居のように木組みした櫓にぶら下がった滑車に木造りの鶴瓶がかかつていた。といつても傍には新しくモーターポンプもあるにはあつて、ただ苔庭の風情をそぐわないよう、竹囲いに隠していたのも禅寺のけしきだった。

ほかにもあたりの名水といえば、毎日、夕方には走つて出る商店街の豆腐屋の裏にも、牛若丸が産湯を使つたとか古潭のある古井戸もあつて、そんな縁だろう、境内の北の外れには紫竹

牛若町と歴女には震えも来るような町名もあつた。頼山陽が山紫水明といったのはずっと南の方だったが、平安の昔から内裏を北に外れた大徳寺のあたりは、西は風葬の蓮台野に続く風光明媚な牧だった。ちょうど北の鷹峯から流れ下る扇状地の頂きにあたり、夏のはじめにはあたり一面、白く紫草が咲き乱れた。だから紫野。

さらに、そこを流れていたのが小川で、いまま堀川のすぐ東に名前だけがかすかに残っているが、けっこうな水量だったのだろう、室町期には水運の土倉も軒を連ねていたそうで、義尚だったか足利將軍の館もあつて、たしかに水もよかつたのだろう、利休のあとの表、裏、武者小路の三千家もその流れに庵を結んでいる。

そのように、いまの京都は中心が烏丸や河原町に移っているが、室町以前はずっと西に主軸があつた。平安京の正中線、つまり南北の中心軸は朱雀大路といって、大凡いまの千本通りにあつた。それが少しずつ街は東に動いて、室町半ばには堀川を中心に、その流れを水運に賑わつた。小川はそのすぐ東を同じように北から南に流れ、山名、細川の応仁文明の十年戦争も、東西両軍がこの川を境に睨み合つた。

「おがわとちがうえ、こがわやし」

糺してくれたのは下宿の小母さんだった。寺を逃げたあと東に西に街をあちこち彷徨いた終

てにたどり着いたのが西陣、小川通りの下宿屋だった。大正のはじめから続く大きな織元で、亭主が死んで廃業したのを、子どものいない後妻が、広い町家の二階を間貸しして学生下宿をやっていた。あの頃でもめずらしくなっていた賄い付きで、おまけに洗濯までしてくれて、男ばかり十三人の学生のなかに子どもはぼく一人だった。

すぐ上の横町が寺之内で、表裏の千家のほかには本阿弥光悦の本法寺や同じ法華の妙顕寺も目と鼻の先、そしてこれはいつも門を固く閉ざしていたが人形の寺の宝鏡寺もすぐだった。それが、西陣でも一番東寄りで織元が多かったからか、昼間は荷運びの車が絶えず出入りしても、夜にはびたりと人通りも絶え、機音もなく沼底のように静まり返った。

部屋は表を入った見世庭の真上、細長い四畳間で、おかしな間取りだな？　と思つたら、糸置きの納戸を改装したと教えてくれた。すぐ下の見世庭とは床板一枚だから、から、ころ、出入りの下駄の歯音もそっくり聞こえた。

明かり採りには、通り庭の内玄関からの吹き抜けに硝子障子の腰窓があつて、もう一つは反対の表通りに虫籠窓が開いていた。腰窓からは下の勝手から小母さんの水仕事の音が、こと、こと、がちや、がちや、と賑やかだったが、虫籠窓はただ寂しいばかり。向かいの町家の屋根に上る月も漆喰格子にスライスされて、入ったこともない獄窓を思つてみたりした。

本来が学生相手の下宿で、そのなかに一人小さかったからか、小母さんはよくしてくれた。休

みの日には寺町や三条商店街の買い物にも連れて行ってくれたし、夜には、「ほら、連ドラ、はじまるわよ」と、ほかのみんなには禁断の、カラーテレビのある奥の座敷にも誘ってくれた。有馬稲子似の、くりくり眼に、鼻筋のきりつと通った、癖のない京言葉のやわらかい人だった。といつても京都人ではなかつた。どんな事情があつたのか、生まれ在所はいわなかつたが、二十歳過ぎでいつしよになつた夫に死に別れ、あとは形見の一人娘の手を引いて転々としたことは昔語りに話してくれた。

「飯場はんばにも行つたんよ」

秋田の尾去沢でのことだつた。鉾山事務所を訪ねると親方は快く雇つてはくれたが、こういつた。

「飯炊き女もええが、どうや、おれといつしよにならんか」

四十過ぎの屈強な大男だつたらしい。それがいくらしもないで坑内事故で死んでいる。そして流れ着いたのが西陣だつた。織り子か、住み込みの賄い婦に、と思つたのが戦後の糸屋不景気の最中さなかだつた。

「見ての通りで、いまはさつぱりでな。織り子も要らんし、女中も要らん」
檀那はいつた。

「それより、どやらか？ 嫁さんに死なれて不自由しとる。あとに入る気はないか」

ほかでもない、有馬稲子似が生きるのを手伝ったといえる。檀那とは一回り以上も齢がちがった。これも大男で、難しい年頃の娘が二人いた。ところが、また、十年そこそこで逝つてしまふ。

「あたし、男殺しの相があるんよ」

ふふつと笑つて、明るかつた。といつても織屋は女手一つではやつていけない。しかたなく暖簾を下ろし表の見世は人に貸し、その店賃で娘三人を育て上げ、嫁にも出した。すると、大きな町家に一人になつた。

「人間、万事、塞翁が馬」

からりといつて小母さんは、

「学校で習つたでしょ？ あなたも同じ、どこでどうなるかわからんわよ。だから、いまはしっかり勉強しときなさい」

奥の座敷でぼくを諭した。そんな下宿に逃亡のあとの癒やしを見つけたが、それが過ぎたか、心地よさに溺れるばかりで、年上の学生に倣つてはいろいろ青い遊びも覚えた。

「ちよつと、ちゃんと勉強してる？ そんなんで、試験、受からへんよ」

母のような諫めの言葉も右から左で、案の定、明くる春、大学入試に落ちている。

「ほんまは、茶人になりたかつたんやな」

和尚はいった。茶会の終わつた夜だった。

と、ここで少し、ぼくらの夜の話をしておく、夕方六時からの薬石、つまり晩飯のあと、仕舞事が終わつて一息つくくと八時を過ぎていて、小僧部屋に戻つてごろりとしていると和尚が風呂呂に入る。和尚は薬石のあとに隠寮で本を読んだり、ときには趣味の謡を唸ることもあつたが、聞こえてくるのは、

「これは、諸国一見の、僧にて候……」

いつも同じ条ばかり。そしていくらしもない、九時になると、ちりん、ちりん、兄弟子の鈴を合図に、庫裡の台所脇におさまる韋駄天さんに短い経を上げて一日の勤めが終わる。韋駄天さんは足が早く、仏さんの、いわばパシリで、台所の守り神だった。その働きに仏さんは、ご馳走さま、といったかどうか。

すかさず、

「おーいっ」

と奥の隠寮から声がかかった。これがもう一つの苦行のはじまり。就寝前の和尚への按摩のお勤めで、下つ端小僧の役割だった。按摩といつてもちよつとちがう。野口整体といつて、創始者の野口晴哉本人も年に三、四回は寺に顔を見せていた。見るからに神がかつた風貌の人で、和

尚より一回りは年下だったと思う。射貫くような眼光の、いつも羽織袴姿でやって来て、逆に和尚の方が全体のほかにも教えを受けていたのかも知れない。夫人は近衛文麿の長女だった。だから、あの日本新党の首相は甥にあたる。もとは島津家に嫁いでいて、そこに出入りしていたのが野口で、その鋭い眼光に射貫かれたか射貫いたか、あの白蓮さんも顔負けに二人駆け落ちしていつしよになった。それで「昭和のノラ」と騒がれたのだが、情熱の人というか、きつと感覚の鋭い人ではなかったか。どうしてつて？　そういう人にしか野口の整体は効かないからだ。それはともかく、和尚は飽き性だったが凝り性で、風呂上がりの体の弛んだのが頃合いなのか、蒲団に横になったのを、首元から背筋をぐにゅぐにゅと圧おさえたり、足の筋をこりこりとやってみたり、その細かな指示通りにぼくは勤めるのだった。

毎日、一時間近く、カイロのようにぐいぐいと力任せにやるのではなく、そろり、そろり、背骨の椎つひを一つずつ押し広げるように軽く指をあてては弾はじくようなことからはじめ、最後は足の付け根から踵や足裏までを、「そこ、そこ、いや、もうちよつと右」といわれるままにつぼさがして指の頭で圧おさえていく。たいして力是要らないのだが、なんせ日課が終わったあとのごつたりどきだから、ゆるり、そろり、という緩慢さがつらくて、つい舟を漕ぐことになる。それがわかつているから、眠気覚ましに和尚はいろんな話をした。

そんな梅雨に入る少し前だった。慌て者の夏虫も稽古を終えたか、しんと二人きりの隠寮に、

ほんの童行^{ずんなん}上がりの子どものぼくに何を教えようとしたのか、その夜の話はちよつと深刻だつた。

「おまえはどうか知らんがな」

たぶん、ぼくの出家^{いえて}の理由^{わけ}を見抜いていたのだろう。

「わしらのこの世界も、いうてみたら、駆け込みのようところがあつてな。じつは、わしもそうやつた」

もちろん、ぼくはうつらうつらに聞いている。それも知つてのことだろう、和尚はいつた。

「わしも、逃げたかつたんやな」

意外だつた。えっ？ と眠気が吹つ飛んだ。思わず母の姿が浮かんだ。春先だつた。家を出るぼくの背中に母はいつた。「氣いつけて行くんよ」、氣丈ないつもとその日はちがつて、鼻にかかつた声だつた。いまま耳奥に残っている。それを振り切り、ぼくは走つた。

和尚は続けた。

「家業^{いえ}を継ぐのが嫌^{いや}でな」

息遣いが聞こえる、しんと静かな夜だつた。

「十八のときやつた、飛び出したのを拾うてもろうた。大林和尚にな」

「だ、い、り、ん……?」

「そうや、南宗寺なんしゅうじの、ほれ、おまえの実家まことともそんなに離れとらんやろ。いまは末寺になつてるが、もともとは一派をなした大寺でな」

そしてわずかに調子トーンを落とした。

「先のことも考えんと、家を飛び出したまではよかったが、結局は行き場がのうて門を叩いたんやった」

紙問屋の、和尚は後取り息子だった。なんでも江戸の頃から続いたけつこうな家筋らしかった。それが早くに父親を失い、するとたちまち屋台が傾き、ようやく番頭の切り盛りで潰れずにいた。

「若旦那、若旦那、て絆ほだされてな。後取りやいうのに、店たなの方は番頭に任せつきりで、したい放題やった」

もちろん、ぼくは黙つて、こりこり、ぐにやぐにや……。

「柄がらでもないのに骨董に走つて、茶碗やらなんやら買い漁りあさ、南宗寺で茶会があるいうと家はそつちのけで」

南宗寺は檀那寺だった。

「だいたい、商あきないが肌あはだに合あわんかった。それで番頭を姉の婿にくつつけて、後をとらせて飛

び出したんやった」

そして、ぽつりといった。

「母親も棄ててな」

どんな目でいったか、うつむいていたからわからない。あとにも先にも一度きり、和尚を身近に感じた瞬間ときだった。だからまともな言葉もなくて、

「それで、どうされたんですか？」

訊いてみた。ぼくも母を想っていた。

和尚はいった。

「三年後やった、死んでしもうた」

声明で灼けたしわが嘔れ声こゑがさらにかすれて低く響いた。

「生まれがよかったからやろう、体の弱い女ひとでな、数えの五十四やった」

「……………」

「わしが殺したようなもんやった」

ぼくも同じとっていい、よく似たかたちで母を送っている。けれどようすはちよつとちがつて、もつときびしく母を殺している。

かなしいけれど、立ち居姿の母をぼくは知らない。実家さとは百姓家を兼ねた織屋だった。といっ

ても機はたはもちろん糸も借り物の、いわゆる賃織りの零細はたや機屋。夫婦二人に九州から中学上がり
の織り子を呼んで、昼も夜もない夜業やんぎょう続き。そんな夜鍋よなべ仕事いじが体を苛めたのだろう、梅雨の田
植え時にぼくを産んでそのまま寝ついた。

「これは、リユーマチやね。古い病氣やけど、どうにもならない、あとはまあ、せいぜい養生
するしかねえ……」

村の婆さん医者も匙を投げた。

あの頃、村に手足の関節を鞣まじるように膨らませた女はざらにいた。葉はあつたが副作用の方
が大きかった。だから、ただ、じつと我慢するだけ。男女平等、女性の社会進出をいう前に、
男以上に生業に身を粉にした女はとづくにいて、そんな働きの女ばかりをねらう、リユーマ
チは風土病と違ってよかった。だから、母の世話と三度の家事がぼくの仕事になった。小学校
に上がつてすぐだった。父は工場こうばに忙しかった。兄はいたが上の学校の勉強で家事どころでは
ない。そんな家から、中学卒業の明くる日、ぼくは逃げた。

拾つてくれたのは和尚だった。もし出会うことがなかったら、ぼくはどうしていたことか、
有り難い人だった。ただ、それにもこたえずまた逃げた。ぼくの習性といつていい。それから
三年、母は死んだ。

仏書はさらりといっている。

——殺母、殺父、殺阿羅漢、出仏身血、破和合僧、これを五逆という、

そのように、母を殺す、父を殺す、阿羅漢を殺す、仏身を傷つける、僧団を乱す、の五つは人として、やつてはいけない一番悪いことだった。無間業むげんごうといつて、犯すと無間地獄行き。

和尚と同じにぼくも母を棄てた。寝たきりで、ぼくがいなければ小用はおろか三度の飯も口にできない人だった。だから、棄てたことは殺したに等しい。

望んだわけではけつしてなかつた。ほかに術がなかつたからだが、してみても、しくじつて、振り返つてぼくは思っている。出家とは、ほかでもない、家を出ること、つまり、父と縁を切り、母を棄てること。そんなふうには書は教えるが、それは詭弁うそだ。

どうしてか、つて？

母を棄てても、殺しても、どこにも逃げ場はなくて、いまもこうしてぼくは母を追い、そして父を想っている。出家、それは言葉でいえても、少年の、生身にできることではなかつた。きつと和尚もそうだったと思う。

「あれは、わしが殺したようなもんやつた……」

和尚がいった、そんな年回りに、いまはぼくもなつてゐる。

塀の話

「むかし、大徳寺に塀いはなかつた」
和尚がいった。

その日は、どんな風の吹き回しだったか、朝の茶事にも、きょうは濃茶こいちやにする、といつてもよ
りテンションも高かつた。

濃茶というのは、一つの茶碗に濃いめのお茶を嵩かさも多く、だから、混ぜるのも、薄茶のよう
に、しゃか、しゃか、ではなく壁土でも捏こねるように、どろ、どろ、やるのだが、そのように、
薄茶は点たてるといつたが、濃茶は練ねるといつた。

そのどろどろに練つたのをみんな飲み回す。はつきりいつて、いかに師弟、兄弟弟子といつ
ても他人の口をつけたのを呑み継ぐのだから、潔癖症の下の兄弟子は、汚い、と顔を顰しかめて嫌
がつた。ぼくはそれほどでもなかつたが、やつぱり最初は勇気がいつた。紹鷗じょうおうや利休の頃は密
談前の腹合わせ、意思統一あかしの証あかしの作法だつたと和尚は教えたが、もともとお茶はそうして回し
飲むものだつたらしい。

そして塀の話だが、和尚はむかしといつたが、創建のむかしではもちろんなくて、和尚がやつ

て来た頃のこと、つまり昭和も十年代はじめのことだった。同じ臨済宗でも兄弟寺の花園の妙心寺などは、伽藍はもちろん外溝もきちんと整備され、外塀も五線も鮮やかに立派だった。いまでも全国に末寺三千五百を超える臨済禅最大の宗門だから当然のことだが、大徳寺は末寺もわずか二百カ寺に満たない。

当然、台所事情も知れたもので、塀がなかったというのものも、毀れたままにやり替えられなかっただけのこと、諸人に開けた宗門ということでは更々ない。

「高山彦九郎でも、泣きよつたやろ。仏殿やら法堂やら、伽藍も外からすけすけで、まあ、酷いもんやつた」

濃茶の茶碗を、鼻汁でも啜るかのよう、ずずつ、とやると、唇を緑に染めたまま、まず上の兄弟子に回した。

高山彦九郎？

ああ、あれか、とぼくは思った。京都も近頃は、ほかと同じに街の変わり様も激しくて、どうなっているか、しばらく知らないが、京阪三条の改札を出ると、右に琵琶湖に走る石山線の線路を見ながら広場があつて、その鴨川寄りの一隅に、尻を向けて正座する丁髷姿の坐像があつた。見るからに素寒貧とわかる浪人で、視線の先は仙洞御所。顔を歪めて少し哀しそうにぼくには見えた。



南門通り

「あれはな、御所の塀が崩れたままで、なかの灯りが見えたからなんや」と教えてくれたのは小さい頃の父だった。翼賛壮年団の生き残りだった。御所はいまは整然ときれいになって観光名所の一つに変わっているが、幕末までは公家邸がごちゃごちゃと建て込んで、迷路のようになっていたらしい。その一画に肩を窄めるように御所はあつた。それが明治になって車駕東幸、天皇の東下りを追っかける公家の邸が空き家になったのを取り壊し、更地になって御苑になった。そんな御所の憐れさに彦九郎は涙した。といつても周りには町家も建て込んでいただろうから、三条大橋から御所は拝しようもなかったと思うのだが、とにかく父は、講談でもやるかのように、小学校に入ったばかりのぼくを前に、晩酌語りの憂国話はしよつちゅうだった。それでも茶碗は回ってくる。ずるつ、ずるつ、上の兄弟子がまず勇気を奮った。どんなに神経を誤魔化しても、子どもが青洩を啜るようで、まともに聴ける音ではなかった。けれど、けろりと次ぎに回した。そして中の兄弟子、下の兄弟子と巡っていよいよぼくの番だった。

えっ！

茶碗のなかを覗いて驚いた。兄弟子たちはどこをどんなにずずつとやつたのか、どろどろがたつぷり残っている。小僧修行には知恵が要る。年季の功というやつだろう、兄弟子たちは、ずずつと音だけでそのまま次ぎに送っていたのだった。

けれど、ぼくには後がない。腹を決めた。

——茶を呑んどれば癌にはならん、

和尚の口癖だったが、量にも限度があるだろう。その日は胸灼けむねやしてたいへんだった。それだけでなく抹茶は刺激がきついから胃弱のぼくには命懸けだった。そんな兄弟子たちのやり口を、もちろん和尚は気づいていた。けれど、それも小僧暮らしのけしきの一つで、空惚そらとぼけてかわらなかつた。

「ほれ、その豆腐屋の隣のな」

顎あごで肩口の向こうをさして、いった。

苛いらちの和尚は休むことを知らない。濃茶がぼくらを回る間も、法衣ころもの袖を摘まんでは口に運んで唾をつけ、茶杓をとると、しこ、しこ、軸を磨いたりして落ち着かない。いつものことだが、一時としてじつとしていられない人だった。

そこといったが、これも和尚の口癖で、南の電車通りもそこだったし、北の今宮神社あた辺りもそこだった。だからぼくらは想像を逞たくましくする。その日のそこは、東の惣門前の大徳寺道みちのこどだった。

大徳寺道は小型車がすれ違うのもやつとの狭い通りだったが歴史のある古い通りで、平安京の大宮大路の延長にあたり、北に上賀茂神社をかすめて鞍馬に抜けていた。だから鞍馬道という人も偶たまにいた。味噌屋や畳屋やそれらしい古い店もいくつあつて、佃煮屋と豆腐屋も紅殻べんがら

町家に軒を連ねていた。といつても、どれもこれも決まったように二間半間口の低棟ひくむねの二階家で、和尚がいったのは北に少し上がった一軒だった。

「おまえらは知らんやろうが、お雪ゆきさんいうてな」

つる、つる、と、ぴか、ぴか、に磨き終えた茶杓なづめを棗なづめの上に大事そうにそつと置いた。それで、ぼくらは、いよいよか、と腹を括くくつた。いつもの長講話くちあの口開けだった。

「わしより二回り近うはいつとつたと思うが、足腰のしゃんとした婆さんやつた」
それに上の兄弟子がこたえた。

「モルガンお雪さん？」

和尚は目を丸くした。よう知つとるな、という驚嘆ではなくて、魚が水を得たといつた方がいいだろう、話はずに弾みはずがついた。

「なんや、知つとつたか」

兄弟子はしたり顔にうなずいた。

「たしか、四、五年前に……」

「ああ、元気やつたが死によつた」

といつて、これは話も早い、と思つたか、和尚は満足そうだった。

お雪さんは祇園の芸妓だった。それが二十歳過ぎでアメリカのジョージ・モルガンと出会つ

たことで人生ドラマがはじまっている。あまり乗り気でなかったのを、請こわれるままに嫁よめで行った。当時、この国でもモルガンといって知らない者はいなかった。ロックフェラー、メロン、デュポンと並ぶアメリカの大富豪で、ジョージはその創始者の甥せうだった。たちまちお雪さんは時の人ときとなり、モルガンお雪と緋あだな名なされ、玉の輿こしの権化のように騒さわがれた。けれど長くは続ついていない。十年後には夫に先立たれ、さらに当初からモルガン家の反対もあつて入籍かが叶かなわなかつたから、日本人排斥の世情も手伝てつてアメリカでは暮くらせず、子どももないままフランスに移うつつた。といつてもそれなりの財産分与もあつたのだろう、けつこう優雅えいあにやつていたらしい。けれど結局、それも食くい潰つぶし、晩年はほとんど身一つで日本に戻かへり伝つ手を頼たのつて大徳寺の門前に暮くらしていた。

「毎日、犬を連れて散歩しとつたな」

「ええ」

「面倒臭めんどうくさかつたんやろう、惣門には回まわらんと、崩くずれた塀ひを乗り越こえて出入しゅつにんりしよつた」

これには兄弟子あにがはこたえていない。

「鐘楼かねろうのあたりは跡形あとがたものうなつて、行いけ行いけの、通とほり抜ぬけのようになつとつたからな」

お雪さんのいた町家のすぐ真向まへむかひかいが鐘楼かねろうだった。毀こぼれた築地塀ついでひは、それでもこんもりと土塀つちひのようになつて残のこつていた。それをよくも老婆おばあが越こえられたものだが、あちこち灌木かんぼくも被かぶつ

ていたのが隠れん坊によかつたか、近隣の子どもの遊び場にもなつていて、そこを通り道に町家の年寄り連も出入りしていた。南に惣門を回つてもわずかな距離だが、当の山内小僧もそうして遣つかいに走つていたらしい。

「アメリカさんに嫁にいつたんやが、五尺もなかつたやろう、背の低い人やつた。まあ、いつでも、あの時分の女はみんなそうやつたんやが」

「けど、背筋はしゃんとしてましたね」

「そやつたな、しゅつとして、どないいうたらええのか、一本、芯しんが通つとるといふか、性格もきりつとして、そこらの年寄とはちよつとちごうてた」

「言葉がそうでした」

「ああ、作務まむをしとつたら、わしにでも『ちよつと、あなた』つてな、庭番でも呼ぶようにいよつた」

氣位が高いとまではいわないが、むかしの暮らしぶりが抜け切れなかつたのかも知れない。

さて、この国のどこの宗門とも同じに、大徳寺が荒すさみはじめたのは明治に入つてからのこと、廃はい仏ぶつ毀ぎ釈しやくの嵐のなかだった。いま、ぼくらが神道といつてゐるのはせいぜいが江戸末期からの、いつてみれば新興宗教で、もともとの神道は、この国に素直に生きる、ものの考え方とどうか、慣習をまとめた土俗信仰だった。だから、お伊勢参りといつても、お詣まいりが目的では



新撰増補「京大絵図」(元禄四年九月) から

なくて、行き着く道中の遊びを悦しむのがねらいだっただろうし、伊勢講も、たとえば初穂はつほを供そなえるというの、収穫を上げるための、いわば品種改良で、里から稲穂を持つて行き、それを全国から集まってくる優良な稲穂と交換するのが目的だったと見ていい。そのために伊勢講と違って、代表として村から遣いを出すための旅費積み立ての仕組みが生まれた意味もわかつてくる。

たぶんこの国の神と人との距離はそんなに遠くはなくて、だから廃仏毀釈の仏閣うら打ちこわしというの、神道擁護の仏教攻撃ではさらになくて、結局は、仏閣のなかにのさばる人間の傲慢さに対する民衆の憂うれさ晴はらしではなかったか。仏を毀こわすその人も、じつは昨日まではお百度踏みに通ったその人だった。

そんなふうを考えてみれば、明治に入つての仏閣すまの荒さまみようは、じつは徳川幕府の保護、つまり補助金支給の裁たち切たれにあつたわけで、荒れようも、それを受けて安泰を誇つていた諸大寺に多かつた。大徳寺もその一つ。

和尚はいつた。

「うちも、むかしはなかなかのもんやつた」

うち？ 大徳寺のことを、和尚はいつもそういつた。

「寺領二千三百石いうてな、五山はもちろん、清水きよみずや本願寺よりも上うえやつた」

はじめて聞いた話で、これだけははつきりと、いまも忘れないでいて、手元に一枚の古地図を広げている。「京大絵図」と表書きされたそれで、発刊は貞享三年というから江戸中期。洛中の大路小路が細かく描かれたなかに、各所大寺の堂宇もあつて脇に寺領高が記されている。延暦寺五千石、上賀茂本社二千七百石、そして大徳寺二千四石、神護寺二百二十石、等持院四百二十石、龍安寺三百九十九石……、とある。

廻り盃蘭盆

「お寺にいたんだから、お葬式は詳しいでしょ？」

よく訊かれる。そして、

「お数珠つて、右手、左手、どっちに持つの？ お焼香は何回？」

かと思つたら、

「湯灌つて、やったことある？ あのお湯つて、水なの、ほんとお湯なの？」

こんな具合ならしよつちゆうだ。けれど偶には、

「小僧さんやつてたんだから知つてるでしょ。お賽銭箱の掃除つてどうやるの？ お金も貯まるけど、塵も溜まるもんね」

けつこう急所を突いていて、えつ？ と頭を捻ることもある。だから、訊きたいのはこつちの方で、

「さあ、どうやらね、どつか裏の方に、穴でも開いてるんやないやろか」

と惚けてみせるしかない。

そう、京都、紫野大徳寺、つまり、ぼくのいたあの寺にも、方丈、法堂、三門と並ぶ伽藍の仏

殿に賽銭箱はあるにはあつた。けれど、考えてみれば禅寺に賽銭箱は似合わない。気になつて調べてみると、賽銭というのは、幣しでとか幣ぬぎとかいつて、神にねがいごとをするときに供そなえる、いわゆる供物くもつのことで、あの道真みちざねが、

このたびは幣ぬぎもとりあへず手向山たむけやま……、

と歌つたあの幣ぬぎのことらしい。それが神仏混淆しんぶつこうでややこしくなり、貨幣が物をいう暮らしになつて銭ぜにに姿を変えた。

お経もそうだつたが、小僧はやつても、いわゆる仏事のことなど教えられたことは一つもない。もともと禅宗でも臨済禅ならどこでもそうだろう。臨済禅の寺というのは檀越だんちやく武家の塔所たつしよ、いいかえれば墓守小屋からはじまつているからで、それ以上に、寺のようで寺らしくなかつたのが和尚の寺だつた。

重ねていうが、この国の寺が抹香臭まつかうくさくなつたのはようやく江戸期に入つてからのこと。そんなに古いことでもなくて、もともとこの国の寺は人の生き死しにに手を染めていない。道元さんの寺は純禅苦行の場であつたし、親鸞さんの寺はそのありがたい講話を楽しみにやつて来る村の集会所だつた。もちろんそんなことを教えてくれたのも和尚だつたが、だからあとにも先にも、わずかなぼくの小僧暮らしの毎日で、いわゆる坊主、この言葉には人が人を蔑さげすむにおいがしていまも嫌いなのだが、らしきことをしたのは、日課の朝課晚課は別として、和尚の大黒おおくさ

んの葬式と、あとは一夏ひとなつの那智なち行きだけだった。

暑い、暑い、と愚痴ぐちつても、京都の夏は送り火で峠を越える。そんな盆入り前の、やつぱり暑い朝だった。

「これを持って行け」

和尚はいつて、隠寮の書院の外、廊下に控えるぼくの膝先に畳の上を滑すべらせた。ぱりつと糊りの利いた畳紙たたみがみの四角な包みで、小僧部屋に戻って紙縫こよりを解くと紫衣しえだった。えっ？と思わず目を擦こすった。紫衣は最高位の法衣ころもだった。少しの理由わけあつて小僧にはなつたものの、法衣はまだ着たことがなかった。

どうしてつて？

きちんといえばまだ得度とくどしていなかったから。平たくいえば仏さんのアドレス帳ちゆうに載せてもらえてなかったから。小僧は得度してはじめて仏さんの弟子になれる。ぼくはその一步手前で穴けつを割きっている。

ぼくは勝手に思っていた。寺へ行けば白い下衣に墨染めの法衣、裾すそをからりと絡かろげて高下駄たかくだ履はいて闊歩かつぽする……、それがぼくにはちよつとちがつて、朝課にも、はじめて門かどをくぐつたときのまま、小倉こくらのスポンに白の開襟かいきんシャツ、いわゆる学生服というやつで、あの頃のぼくには



仏殿

余所よそ行きの一いっ張羅ちやらだった。

それが、二月目ふたつきの晩方ばんぱうだった。

「おーい」

と薬石やくせきのあと、呼ばれて隠寮いんりやうに走ると、黒い包みを、ぼんとくれた。

「あしたから、朝課には、これを着れ」

法衣かな？ よろこび勇いさんだ。好きでなつた小僧ではなかつたから、法衣なんか、ほんとは着たくもなかつた。けれど少年心理はどこかちぐはぐで、一人前に法衣が着られる、そう思うと、小僧暮らしも一つ上に進級したような気がして、正直、うれしかった。

さつそく部屋に戻つて広げてみた。

何だ、これ？

黒絹みらくぬきの道行みちゆきだった。みちゆき？ そんな言葉を知っていたのも、病気で寝たきりの母に指図さしずされ、家の掃除や洗濯や、ときには着物を虫干したり畳たたんだりしていたからで、襟先を見ればすぐにわかつた。婦人がちよつとのお出かけに軽く上に羽織はる薄はくい外套がいとうで、死んだ大黒さんの、たぶん着古しだったのだろう、明くる日から、白ワイシャツの上にひっかけて朝課に走つた。

「なんや、それ？」

見るなり、下の兄弟子が吹き出した。

そんなこと、いわれなくてもわかっている。朝課を戻った洗面所の、鏡の前でぼくは悄げた。なるほど、見れば見るほど奇妙なけしきで、生まれつきの撫で肩が、さらに落ちて幽霊のようにだらしなかつた。朝課は朝の五時にはじまる。まだ薄暗がりの本堂では、白いシャツ地がぼんやり透けて、なんとか法衣姿に見えなくもない。けれど、やつぱりおかしい、というより漫画だつた。

得度の理屈を知らなかつたぼくは、まともに考えた。和尚はどういうつもりなんだろう、法衣を買うのをけちつたのかな、それとも、ぼくに法衣はまだ早いというのかな？ 経を読むのも口パクだけで誤魔化して、朝課の間も和尚を疑つた。それが昂じて、やがて経にも身が入らなくなつてしまつた。

いいわけではない。寺を逃げた理由はほかにもあつたが、あの道行も鉦の掛け違いの一つになつている。毎朝、見るのも嫌になつて、

こいつさえ、消えてしまえばいい！

ぼくは道行を呪つた。それから半年。朝の本堂だつた。朝課を終えて、ひよいと立つた拍子に後ろの裾を踏んだ。しゅつ、と短い音がした。あれっ？ 不思議な気分で振り返ると、腰のあたりで横に大きく裂けていた。透けるように薄いうえ、年季ものだから当然だつた。

やったあ！ これで、尿道行ともさよならだ！

うれしかった。と思つたのも束の間、和尚に報告すると、手文庫ほどのビスケットの空き缶を、これもやつぱり畳の上を、廊下のぼくを目がけて滑らせた。

「これで縫え」

和尚流儀の裁縫箱だつた。

縫いものなんて簡単だつた。小学校に上がった頃から、母の口先指図で習つていた。だから裂け口を寄り合わせて、かがり縫いでやつてみた。それはうまくいったのだが、少し寄せすぎたか、今度は裂け口の上下の糸目が伸びて周りが蜘蛛の巣のように裏が透けた。だからぶよぶよに弛んでいる。それでも和尚は素知らぬ顔で、それから破れや解れが何度も続いて、その都度、和尚に空き缶の裁縫箱を借りている。

何なんだ、この格好は！

毎朝、思つてかなしかつたが事態は何も変わらず、やがて寺を逃げる朝まで檻樓道行がぼくの法衣になつていた。

だから畳紙を開けたときには、正直、目を疑つた。そして胸を熱くした。妙な少年心理だつた。もちろんくれたわけではない。檀家、檀徒に侮られてはいけけない、と持たせたのだらう。それでも、小僧として少しは認めてくれた気がしてうれしかった。ただそれも、思い過ぎしだつ

た、とやがて知るのだが……。

行け、といわれたのは盂蘭盆うらぼんの棚経たなきょう回りだった。

「健けんさんから頼たのまれた」

と和尚はいつた。

健さんは熊野の人だった。和尚の弟子、といっても知り合いからの預かりだったが、ともかく最初の弟子だった。和尚も晋山しんざんしたばかりの三十代、雲水上がりだったからか、弟子というより同夏どうげといつてもいい、僧堂仲間のような気がしていたのかも知れない。ぼくも入れて六人の弟子をとつた和尚だが、健さんに限ってさん付けで呼んでいた。ただ、そんなに長くはいなかつたようで、郷里の新宮に戻つて末寺に入っていた。

大徳寺は臨濟禪でも妙心寺などに比べれば極めて少数派で、末寺もそんなになかつた。それがどういうわけか、半島には十津川から熊野にかけてけつこうあつて、健さんの寺もそうだったが、新宮を奥に入つた那智裏の山合やまあひいにもいくつかあつた。もともとは天台寺てんたいじか真言寺しんごんじだったのが、江戸期に入つて宗旨替えしたらしい。それが戦後の過疎化で無住になつて、健さんもいくつか掛け持ちしていた。

ふだんなら健さん一人で十分だった。それが盂蘭盆となると手が足りず、棚経回りの助っ人

に、毎夏、和尚は頼まれ、弟子を差し向けていたのだった。それが順繰りで、ぼくにも番が回ってきたというわけで、一種、新参小僧の最初の関門、中間試験のようなものだった。

そして盆前の一日、健さんが車で迎えにやつて来た。あの頃流行りのツードアの玩具のようなミニカーで、

「スバルやな」

下世話に強い下の兄弟子が教えてくれた。どこからネタを仕入れるのか、芸能ニュースにもけっこう詳しい人だった。

薬石が終わると和尚は健さんと二人いつしよに風呂に入り、積もる話もあったのだろう、夜は、奥の書院に蒲団を並べ、遅くまでひそひそ話が止まなかった。そして明るる朝、茶事を終えたその足で、ぼくらは出かけた。

堀川通りをまっすぐ下るとそのまま二十四号線を奈良に入る。あとは檀原から御所を抜け、五條から十津川を下った。谷瀬の吊り橋も、あの頃はできたばかり、切り立った深い谷を向こうに跨いで、青葉のなかに赤いアーチがきれいだった。それをさらに南に、流れを右に左に見ながら新宮に出たのもう日の暮れで、せつかく海に出たというのに、隣の大川沿いをまた一時間ばかり山に入っている。頭から墨を被ったような薄闇の山合に蛍のように灯りが点々と揺れていた。

ぎ、ぎつ！ と健さんはサイドブレーキを入れた。ずいぶん高みのようだった。きら、きら、瞬まばたく満天の星を背に小さな堂宇どううが浮かんで見えて、脇に、庫裡くりだろう、小棟が影のように現われた。

「遠いところ、ご苦労はんだしたな」

ドアを出ると闇のなかに声がした。小柄な老爺だった。

「お疲れですやろ」

笑顔で会釈したのにお辞儀でこたえると、

「和尚おっさんは？」

と車のなかを覗のぞくようにした。

「この方です」

健さんが、ぼくをさして脇からいった。

んっ？

呆あきれとも吃驚びっくりともとれない妙な目線でぼくを見上げて、あとがなかった。

うつら、うつら……、と寝苦しい夜だった。喉のどが渴かわいて枕元に何度か水を飲んだ。そうして障子の向こうが白むのを、まだか、まだか、と待ちに待った。ところが明け方に眠り込んでし

まったか、気がつくくと陽が射していて、蒲団を跳ねて縁に出ると庭先にいた。

「おはようさん」

たけぼうき

竹箒片手に、昨夜と同じ、満面の笑顔だった。

「眠れなさったかね」

はい、とこたえたものの、

「まあ、午後は昼寝でもしてください」

と、とつくに見抜かれていた。そして、箒の柄先で遠くをさした。

「どうです？ けっこういけまつしやる」

それではじめて気づいたが、庭先が宙に迫り出すように、遙か先、朝靄の峰々に向かっていく。その碧く重なり合って広がるなかに、白く一本、糸のように筋が見える。

「大滝ですわ」

いいながら、ひよこ、ひよこ、やって来て濡れ縁に腰を下ろした。

「雨の多いとこでつしやる。ほかにもようさんあるんですわ。けど、その分、田圃や畑はさっぱりでな」

けろりといった。

「毎年、梅雨が明けたと思うたら、今度は台風で。それも風だけならよろしけど、ここらの雨

は、それこそバケツをひっくり返したみたいでな、田圃も畑も水を被^{かぶ}つてしもうて、わやですわ」

そのように、一月前には八号台風が潮岬からまつすぐ北に走り抜けていた。

「田圃いうてもなんぼものうて、あとは山で食いつないどるいうのに、それもやられて、若い者はさつぱり居^いつきませんわな」

と、裏の方から女の囁^{しわが}れ声^{こゑ}がした。

「総代さん、御膳、でけましたでー」

一村にはいくつか、地区といたが、部落があつて、もちろん無住だったが一つ一つにきちんと檀家寺があつた。ただ土地が土地だから、寺は山のとつぺんか谷底の無用の地にしか開かない。だから棚経回りも深い谷を上へ下への難行^{なんぎょう}になり、うまくいっても午前二つ、午後は日の暮れの法要は禁忌だから一つだけに終わってしまう。昔は住持の方から部落を一軒一軒、巡り歩いたらしいが、いまは反対に、家人^{かじん}が出向^{でしやう}いての孟蘭盆だった。

朝飯を終えると総代は軽トラを表に出した。はじめの一つはすぐ向かいのこれも山の頂きで、朝も八時を回ったばかりというのに狭い堂宇は老若男女でびっしりだった。前の方は年寄り連で、後ろに若輩、そして広縁には悪たれ小僧が走り回っている。年寄り連は、ぱたぱたと

団扇片手に、それでもきちんと黒装束で、これは里帰りだろう、若い男たちも慣れないネクタイ姿で、正座の娘たちは眩しいばかりのミニスカートからぶちぶちの膝頭を覗かせている。それをさして、そろ、そろ、ぼくは入つていった。はじめての紫衣がボール紙のようで馴染まなかつた。

ほお一つ、遠慮のないざわめきが背中に沸いた。と、たちまち足元から震えのようなものが走つてきて、すぐにも走つて帰りたくなつた。それを、ここは我慢、と作法通り、経机に鈴を正して、鉦を叩いた。

しん、と後ろが静まつた。ところが、それが逆効果で、さらに胸の動悸が激しくなつた。経本を持つ手が震え、声もそれに続いた。そこまでならまだよかつた。じつは経を読むスタイルにもいろいろあつて、喉の奥でころころと声を震わせる、そんな声明もあるにはあつた。ただ事態はちよつとちがつて、気づいたら背中の後ろで、婆さん連だろう、経の唱和がはじまつている。か細く頭のとつぺんから裏返る声もあれば、渋い燻し銀のような濁声に、まるで謡でも唸るような節回しもあつて、あわてて声を詰まらせるぼくを一人置いて先を行く。

結果は明らかだつた。あとともう、しどろもどろに、鈴を打つタイミングも狂いまくつて滅茶苦茶。続く大悲圓滿無礙神呪でも消災咒でも、とうとう婆さんたちには追いつけず、終わると廊下を庫裡の支度部屋に逃げ込んだ。

総代は、すぐにあとを追つてやつて来た。

「ご苦労さんでしたな。お疲れでつしやる、しばらく横になられては」
にこりといつて、いい人だった。

そうして小一時間、今度は一転、谷底の無住寺だった。山裾をぐるりと巻いて林道が走る。その突き当たりで軽トラを捨て、総代のあとについて杣道を下りると、やがて盆底のように開けた窪地に、杉の木立に隠れるように頼りない堂宇が現われた。それが、やつぱり、老若男女でなががつぱい。ほおーつ、とか、へえーつ、とか、嫌な囁きに迎えられ、同じようにしどろもどろに終わっている。

そうして、夜は新盆の読経にも回ったか、そんなことを盆明けまで繰り返し、帰りは総代が、また軽トラで駅まで送つてくれた。

「ご苦労さんでしたな」

につこりいつて、四角い大きな唐草の風呂敷包みをぼくに持たせた。

「懲りんと、また来てくださいませ、待つとります」

改札横の木柵に手をかけ、ぺこりと一つお辞儀した。それが胸に熱くて、しばらく行つて振り返ると、まだそのまま、小さく胸前に手を振っていた。

何が入っているのか、唐草の包みを抱いてぼくは乗った。いまはどこにもないだろう、乗車

口は車両の前と後ろだけ、扉もないステップを駆け上がる鈍行列車だった。

帰るとその足で奥の書院にぼくは走った。

「只今、戻りました」

廊下に額ぬかずくと、紫衣の畳紙と布施ふせの束といつしよに唐草の包みを差し出した。夜も遅かったからかも知れない、和尚は邪魔臭まじけそうに包みを解いた。四角い大きな紙箱だった。蓋ふたを開けた。ぼくも廊下から首を伸ばした。

えっ！

声が洩れそうだったのを我慢した。なかには細々こまこまと盂蘭盆うらんぼんの供物くもつだろう、落雁らくがんやら煎餅せんぺいやら羊羹やうきやうやら、細々と我楽多わがらくたのように詰まっていた。それを、思った通り、投げるようにそのまま和尚は畳の上を滑らせた。和尚の悪い癖くせだった。死人に口なし、いまは鬼籍きせきの和尚だが、これだけはいつても許ゆるしてくれるだろう。

そして明るる年、なぜか二年続きでぼくの番になり、また出かけた。けれど総代はいなかった。

聞いて、その夜、ぼくは訪ねた。街灯もない暗がり道を新しい総代が案内してくれた。さわさわと足元から、流れの音がかすかに響く竹藪たけくさ沿いに、欄干らんかんもない土橋つちばしがあつて、渡ると山陰やまかげに灯あかりが見えた。

「こんな遠いとこまで、ようお参りくださいました」

上がり端に背中を丸めた。似たもの夫婦、小柄な夫人だった。

奥座敷の仏壇は棚飾りの明かりも賑やかに、漆黒の位牌に箔押しはくの金文字が光っていた。時間を考え短く端折りはしたが、経は一年前とちがって、なんとかそれらしく読めた、気がした。すると不思議に紫衣もちよつと自慢に思えた。

「あのあと、秋口でしたわ、また大けな台風が来よりましてな」

お茶をすすめて夫人がいった。

「やめといたら、て、いうたんですけど、きかん人だね。出ていったんですよ、土砂降りのなか、山の畑に。胡瓜や茄子の手が倒れたらいかん、いうてから。風に飛ばされたらしいてね、腰を打って寝込んでしまうたんですわ」

そして最期のようにすも話してくれた。腰は治つたものの、それがもとで急に足腰が弱くなり、寝ついたところに風邪を引いたのが悪化して、肺炎らしかった。

「あつという間でしたわ、年明けに。若いときから病気もせんと、達者な人やつたのになえ……。あなたのことは、よういうとりましたよ。来年も来てくれるやろかな、いうて、楽しみにしましたかなあ……」

と、目を潤ませた。

「孫が名古屋の方にいてましてね、あなたに重ねたんかも知れません。なんで小僧はんになったんやろか、いうて、気にしとりましたわ」

一人娘夫婦の長男が中学に入ったばかりらしかった。いくらも齢がちがわない。けれど夫人は先を詮索せず、またぼくは夜道を戻った。

と、ぼくの盃蘭盆はこんなけしきでいまま胸に残っている。だから寺のそれはどんなだったか、明くる年には逃げていいるから、何も知らない。和尚の寺の場合、檀家が一つもなかったのだから何事もなく、いつも通りではなかったかと思ひ出している。

けれど、塀を越えた町家では、精霊送りに忙しかつたことだろう。はじめて見たのは寺を逃げたその夏だった。

夕餉の仕舞事を終えた小母さんが、とこ、とこ、階段を駆けて来て、とん、とん、と襖を叩いた。

「ちよつと来よし」

裏庭に張り出した二階の物干しだった。逃亡のあと、京都の街を西に東に彷徨いて、やがて西陣の千家近くの小川通りの下宿に落ち着いた。妙なもので、どこまで寺に取り憑かれていますのか、四、五軒上がった先が、むかし、秀吉が御土居をつくるのにじやまになった東の諸寺を集中移転させたという寺之内筋だった。

「ほら、ちようど火が回るとこやわ」

隣の町家の屋根越しに東の空の一点がぼうつと橙だいだいに点ともつたかと思つたら、薄闇に点々と大の字が浮かんで上に下に広がっていく。ぼんやりと霏もやのように煙が尾を引いて揺れるようすまでまつすぐ見えた。

「どお？ よう見えるでしょ。ちようどここらへんが真つ正面なんよ」

出町や今出川まで出なくても、物干しから見えるのがちよつと自慢らしく、鼻の穴を膨かぶらませた。そんな性格をそのままに、すつと鼻筋の通つたきれいな小顔ひとの女ひとだった。大文字は將軍義政が夭折した長子の弔いのためにはじめたらしい。靈魂をその館から見送つたのだろう、いまの新町今出川あたりが正面になっている。だから本来はそのあたりから眺めるものだったのだろう、下宿はそんな室町御所の斜交はすか이었다。

京都人は出歩かない。祭やなんのと、あれこれ着飾つて表を行き来しているのはたいていは余所者よそもんで、送り火も同じ、ふつうに京都人は家に居て台所仕事のその足で、濡れ手を前垂れで拭きながら、箱階段を上がつては二階の物干しからふつうに眺める、それが物干し大文字。

「ちよつと裾すそが隠れてるけどね」

遠慮気味に肩を窄すくめる隣家の長棟に、大の字の足の撥はねが欠けて見えるのも愛嬌あいきょうだった。だから、孟蘭盆といつても京都人は送り火に意外と素つ気ない。代わつて京都人がそれらしさを

見せるのが地蔵盆だった。

東よりも西の方、ずばり西陣がいいだろう。それも横町より南北の堅町たてまちがいい。好きだからそうするのだが、たとえば烏丸通りを少し西の油小路あぶらごうじを一条あたりから北に歩いてみるといい。きつと不思議なけしきに出会うだろう。

びつ、びいつ……、振り向くと軽トラなんかがやって来て、傍を過ぎると急にスピードを落として、すうつと停とまる。何か用かと思つたら、そうではなくて、窓から男が道端に向かつてそつと手を合わせる。嘘うそではない。見かけなければあなたのおうつかりにちがいない。

男の祈りの先は、脇の町家の軒下の、小さな祠ほこら。隣家との境を分ける妻壁つまかべにへばりつくように隠れているか、もつと儉つましければその壁にめり込むように鎮座している。なかにいるのは石のお地藏さま。

そして車は、また、ばたばたとエンジン音も喧やかましく走り過ぎていく。ふうつと心の和なむ、京都の素顔の一つだった。もちろん、てくてくと道行く人にもそれはあつて、古老ならぬ、中年男や、ときにはバイクの若者連にもそうなのが京都らしい。

たぶんいまも変わらないのであるだろう。嫌だった寺の暮らしにやりきれず、ふいつと飛び出し、あてもなく彷徨いたのが西陣の路地裏だった。機はたの音をさがしたのかも知れない。生まれ在所と同じに西陣は機屋はたやの街だった。

小川の下宿の表にも隣との卯建の裾に祠があつた。見世の遣り戸を出たすぐ脇に何気にあつて、毎日、前を学校に通つた。朝は向かいの婆さんが、濡れ雑巾を手に祠を拭いていて、帰りは隣の、これは歯科医だつたが、看護婦を兼ねた夫人が前を掃いていた。

「おかえりいー」

団扇顔のロイド眼鏡のその人は不器量だつたがいつも笑顔がよかつた。

だから、誰彼と隣組で決めたわけでもないのに祠周りはいつともきれいなあつて、お地藏さまは赤い水子の前垂れを首に、穏やかで、気持ちよさそうだつた。

地藏盆はそんなお地藏さまへの感謝の日。合わせて水子を供養する。送り火から一週ばかり、茹だるような京都の夏も、日の暮れには、気持ちばかり秋先も見えて、路地や辻子奥にも子どもたちの黄色い声が響いて走る。そんななか、その日ばかりはお地藏さんも、いつもの祠から町家の見世棚に招待され、有難い唱名をもらつてこそぼゆそうにしていた。後ろでは、数珠回しといったか、子どもたちが車座に、ぐるりと二、三メートルはあつただろう、大きな数珠を膝送りに手繰つている。

といつても、そんなけしきは西陣も東の織屋筋に限られたことで、零細機屋の蘆山の裏路地では祠の前に座や筵を敷いてのことだつた。主役は子どもの生き仏。鮎や菓子やと好みの供物を前に満足そうで、やがて余興もはじまり、あれは畚降ろしといったと覚えているが、籤引き

があつて、引き当てた景品が二階の窓から竹籠に入れて釣り下ろされる。その一瞬が堪らないのだろう、見上げて子どもたちは固唾を呑んだ。だから地藏盆は子どもたちには年にくくらないエンターテインメントだった。それが、いまはどういうわけか、西陣も終ての方ならいざ知らず、毎日が、ぎあーぎあーと雨降りのような機音も絶え絶えに、子どもたちの影もない。

ほかでもない、在所の村にもそれはあつた。もちろん同じ八月の二十三、四日だったと思う。祠の前の、地べたに筵を四、五枚並べて、婆さんたちの御詠歌ではじまつた。ぺたりとへたつて背中を丸め、額の前で鈴を振り、膝元の丸い摺鉦を丁字の撞木で、きん、こん、叩く。謡は七五七五に流れるようで、鉦は耳に触つたが、鈴音はきよらにすずしく、子ども心にお大師さんの丸い顔も見え隠れした。

たかのーのー

やーまーのー

じーぞーお、おーそーんー

響きはいまも耳奥にきれいで、婆さんの、か細く震える声に、悪たれ小僧も素直な気持ちで頭を垂れた。

あのけしきは何だったのか？

いろいろ説明はできるけれど、先は冥土にしろ高野にしろ、子どもを送らねばならなかった母の嘆きではなかったか。終わると一転、場も賑やかに、

「ほれ、その子、割り込んだらあかん、ちゃんと並びんか」

どこにいたのか、母親たちも現われて、長い餅箱や丸盆片手に供物を居並ぶぼくらに分けて回った。

供物といつても長閑なもので、握り飯が一人に二つ、一つは胡麻塩を塗したもの、もう一つは小豆の赤飯だった。赤飯は寺でも月に一度、二十日と決めて炊いていたが、村ではこの上ない御馳走だった。それに沢庵が二切れ、冬を越した古漬けで、ぶーんと臭う鰻くちやのが申し訳にしていただけ。それでもぼくらは先を争って両手に受けた。といつても皿はもちろん箱折りや竹皮なんてあるわけがない。古新聞の四つ折りを、さらに四角に折って広げ、逆さまの尖り帽子のようにした。

「おばちゃん、おおきに」

順番にお辞儀して、帰りの道々、かぶりつく。落とすまいとしつかり握り過ぎたか、飯粒に新聞のインクの臭いが浸みついていた。それをぼくらは昼飯代わりに、また日が暮れるまで、めだか掬いや蟬採りに走るのだった。

そんな地藏祠は村外れ。先は深い竹藪に抱かれた埋め墓で、昼間でも傍を通ると風がしつとり

と湿っぽく、悪さをするると婆さんが怖い顔をつくって話して聞かせた冥界への入り口だった。だから人家もない、はずなのに、陽が落ちると、藪の奥の山合に、螢火のように小さな灯りが点つて揺れた。

「ほれ、鬼火や」

婆さんはいつて、

「悪さしなや、追いかけてくるでえ」

ぼくらを嚇したが、そこまでぼくらも無邪気じゃなくて、ちゃんと事の次第を知っていた。

月に二、三度だった。村中を漁るように彷徨いて、ぼくの家の勝手口にもやつて来た。たしか、ゆきさんと大人たちはいつていたと思う、金屑集めの女が一人で住んでいた。それを、いけない好奇心からだった。悪たれ仲間に誘われて、

「ぜつたい、いうんやないぞ！」

凄まれたのを、

「うん」

と一つ返事に、学校帰りの探検だった。埋め墓山の脇、隈笹に埋もれた柚道をそろりと入ったその奥に、少しの風にも飛ばされそうな小屋を見つけて、思わずごくんと唾を飲み込んだ。そして、窓に垂れたアンペラの隙間から、そつと覗いてみたのを、薄闇から、ぎろりと睨み返

され、ぼくらは逃げて
いる。

一休の松

「薪能たぎのういうんはな、あれは、一休さんの村から出たんやな」

九月も半ばというのに、じつとりと汗ばむ朝だった。

「篝火かがりびに薪を焚たくから薪能やと思うとつたが、どうもそうやないらしい」
そんなふうにも和尚はいつた。

いつもの茶礼。けれどぼくにはそれこそ犬に論語、馬の耳に念仏で、右から左へと素通りしている。あの頃ぼくは十五歳。半世紀も過ぎてすっかり忘れているはずなのに、気の抜けたサイダーの泡ぶくのように、ぶくつと記憶の底から浮かんでくるから人間の脳味噌の仕組みつておもしろい。

思い出すのは決まって朝の風呂掃除のとき、小僧暮らしの後遺症か、掃除も炊事といつしよにいまも日課のようになっていて、正直、面倒臭いと投げ出したくなることもときにあるけれど、嫌いやだと思つたことがない。皮脂あかやら黴かびやら、あちこち、ごしごしやっていると無心になれるからけつこう心地よくて、思わぬ蘇りも癒いやしになつて、ああそうでしたね、そんなこともありましたね、とむかしに帰つている。

和尚は能が好きだった。といつても謡うたいの方で、だから聴かせたいという気にもなるのだろう、薬石のあと奥の書院に引つ込んだと思つたら、突然、唸り声が廊下を走つてきたりした。試しなら方丈でやつた方が、声も通るし邪魔も入らないから気持ちいいと思うのだが、隠寮の書院は玄関脇の小僧部屋からはまっすぐ廊下のどん突きだから筒抜けだった。

「これはあー、しよ、こく、いっけん見のー、そうにてそろうー」

善知鳥うとと教えてくれたが、聞こえてくるのはいつも同じ条くだりだけ。素直に唸れば、長年の声明しょうみょうで鍛えた錆び声が渋いのに、妙に力んで喉を絞るから耳障りで、はじまると台所に走つて逃げた。

その途中、上の兄弟子は？ と見たら、台所脇の八畳の自室に、坪庭に経机を向けて本を広げている。本といつてもぼくにはまったく興味もない『古文真宝』や『文章軌範』『詩経』といった漢籍が多かった。雲水の詩文修行の教科書のようにもなつていたからだが、それが和尚の唸りがはじまっても馬耳東風と背を向けている。だからつきり鍛練のできた人だと思つていたら、一日、出かけた留守に、消しゴムを借りようと経机の文箱ふぼこを開けたら、スポンジの耳栓が入つていた。

さて、一休さんの村と和尚がいったのは、宇治の南、いまは京田辺と名前もきれいに変わっているが、田辺の薪村たぎむらのことだった。平安のむかしは薪庄たぎのしょうといつて、少し北の男山おとこやまの石清水八

幡の莊園で、神楽の燎かがりびの薪を納めるのを生業なりわいにしていたらしい。すぐ南の甘南備山かんなびやまから続く見晴らしのいい小高い丘の上にあつて、周りには弥生期の高地性集落跡がいくつも見つかつている。古代人は見晴らしのいい高台が好きだった。そんな村に一休さんは晩年を過ごしていた。

「酬恩庵しゅうおんなんへは、どう行くんでしよう？」

とたずねて首を傾げるようなら、一休寺いっぎゅうじ、といつてみるがいい。近鉄京都線の新田辺駅からなら歩いて十五分ばかり、緩やかな上りの外れに見つかるだろう。あの頃は鈍行電車がのんびり走つて、窓の陽避けの鍍戸よういど越しに、一面、緑の里山だった。それがいま、後ろを高速道路が横切つて、斑まだらに禿はげた山肌を赤やら青やらカラフル屋根の住宅が後ろの男山までびつしり続いている。京都も郊外はどこもそうなのだが、伏見から南に奈良街道周辺の変わり様も凄まじい。

開基は南浦紹明なんぽしやうめい。この国の臨濟禪の祖師といつてもいい人で、十五で鎌倉の建長寺に宋人、蘭溪道隆の門を叩いている。当時、道隆の建長寺は最新の舶来文化のサロンだった。そうして十年、宋に留学、のちに大徳寺の茶道師範としてやって来る虚堂智愚きやうちごから法を嗣つぎぎ、建長寺に戻つて子弟を育てた。その一人に宗峰妙超がいた。大徳寺開山、大燈国師である。

一休さんは、この妙超の孫弟子のさらに孫弟子にあたる人で、妙超遷化せんげから百三十年、大徳寺四十七世住持に就ついている。ただ、経緯いきほひは複雑だった。頃は応仁文明の十年戦争の真つ最中、京師の大半は焼け野原になつていた。大徳寺は、紫野といつて、朱雀大路の北の終はてに条坊か

ら大きく外れていたが、すぐ南の船岡山に東軍の細川に對峙する山名の西陣があつたから、洛中の諸寺同様、戦火に巻き込まれ、七堂伽藍はすっかり焼け落ちていた。その復興に一休さんは白羽の矢を立てられたのだった。

といつても、一休さんはふつうの人ではない。きわめて自由、闊歩の人で、同門なのに大徳寺の指導者層を批判して止まなかつた。だから大徳寺がそんな厄介者をわざわざ招くというのもおかしい話だったが、組織はいつも現実的で、期待したのは一休さんに連なる堺商人の財力だった。

一休さんの生まれは謎に満ちている。いろいろ謂われはたくさんあるが、その略歴を弟子の没倫紹等、つまり真珠庵の開基が記した『東海一休和尚年譜』を辿れば、後小松天皇の落胤ということになっている。お母さんは一休さんを妊ると、多くの女御、更衣がそうだったように、すぐに実家に返されている。宮中で生まれた子は皇子になるからで、後年の政争の種を未然に始末するためだった。

そして二十二のとき、近江、堅田の祥瑞寺に華叟宗曇の門を叩いている。華叟は妙超のあとを嗣いで大徳寺の基礎をつくつた徹翁義亨、つまり和尚の寺の開基の孫弟子にあたる人で、のちに大徳寺二十二世となるのだが、宗門維持のために権力に媚びる大徳寺を嫌つて一步も足を踏み入れていない。一休さんの大徳寺嫌いもそんな華叟譲りなのかも知れないし、だから一休

さんに華叟もどこか自分のむかしを重ねたのかも知れない。三年後に「一休」の道号を与えている。法嗣ほっしと認めたのだった。

ただ、もう一人、華叟にはできる弟子がいた。一休さんには兄弟子にあたる養叟ようそう宗頤そういという人で、五山の東福寺で得度したあと、建仁寺を経て華叟に師事。つまり大徳寺からすれば傍系上がりだったが、後継として四代あとの二十六世大徳寺住持に就いている。のちに享徳二年の失火で丸焼けになった大徳寺の伽藍再建に努めたのはこの人だった。

それがどういうわけか、一休さんはこの兄弟子を毛嫌いして、養叟ようそうならぬ、権力に靡なびく妖僧ようそうとして、『狂雲集』や『自戒集』のなかでも、これが大人のやり方かと耳目を塞ふさぎたくなるほど、口汚く言葉のかぎりに罵ののしっている。

ぼくらのむかしもそうだったが、兄弟弟子の仲の悪さはめずらしくない。宗門の師弟関係といえどピラミッド状に上下順序が厳然としているように見えるが、じつは弟子というのはそれぞれ師からの一本釣り、個々が直接に繋がっている。だから表向きには、兄弟あにでしさん、と敬いを見せても心の内では年季を越えて横並び状態で、そこに下克上が起きるのも不思議でなく、互いに相手をよく知るだけに根も深かった。実際、ぼくらがそうだったし、養叟と一休いっさかの諍いざかいも史書に伝わるほど異様なことではなかった。

大徳寺は創建当時に後醍醐天皇方の保護を受けたため、足利幕府下では一転して苦難の時代

を生きることになる。けれど、宗門維持のためには政治の時流に棹させない。その矢面に養叟は立たされることになった。

禅の教えは一器の水をそのまま次の器に移すように師から子弟に嗣がれていく。師資相承、一流相承といつて、大徳寺は頑なにそれを守っていた。一種、正統血統主義である。それに対し幕府は宗門統制の必要から、相国寺がそうだったように、十方住持制といつて、五山をはじめとした官寺には宗門を越えて他寺からも住持を相互に迎え入れるのを慣例としていた。これは表向きには、宗門の偏向、孤立を防ぐ開かれたやり方のように見えるが、実際に住持を指名するのは幕府だったから、官寺はすべて幕府の統制下に組み込まれることになる。やむなく大徳寺もそれを受け容れるのだが、二人の師の華叟は、そんな大徳寺を嫌つて近江堅田の庵を一步も出なかつた。

養叟はそんな師に背いたわけではなかつた。かれは住持に就くとすぐさま、大徳寺の官寺辞退を幕府に申し出ている。幕府の統制を避け、祖師からの一流相承の大徳寺を続けようとしたのだった。だが、官寺でなくなれば幕府の経済保護は断たれてしまう。結果として、官寺となつた五山が、その後、幕府の盛衰に歩みを合わせてしまうことになるのに対し、大徳寺は窮乏を堪えて生きのびる。養叟のおかげといつてよかつた。

それに対し一休さんは、純禅に生きようとした。といえばきれいに聞こえるが、唐宋の禅者

がそうだったように、かれも自由人だった。ただ、それでも宗門を見捨てるまではできずにいて、養叟のあと、応仁文明の十年戦争で再び焼けた伽藍復興に重い腰を上げた。養叟との対立はどうあれ、この二人がいて、いまの大徳寺もあるわけで、ともに中興の祖といつていいだろう。

そんな一休さんの薪村暮らしは晩年のこと。自由人も六十を三つも過ぎていた。いまでいえば九十近い齡としだろう。妙勝寺といつて、廃寺同然になっていた紹明のかつての禅道場を建て直して住み込んだ。酬恩庵である。

といつても、じつと腰を据えたわけではなかった。根つからの風流ふうりゅうの人は、かまわずあちこちを転々としていたし、十一年後にはじまった応仁文明の争乱は、翌年には、戦場も京師を越えて南都方面にも広がる勢いで、途中の薪村も例外ではなく、それを避け、明くる文明二年には檀越だんごちに招かれ堺に庵住まいしている。

檀越とは、檀家ともいつて帰依者のことだが、平たくいえばパトロンで、たぶん尾和宗臨おわそうりんがそれだろう。堺の対明貿易の豪商で、この人を通じて一休さんは堺商人の間に人脈を広げていた。反対に宗臨は一休さんの幕府、貴族へのパイプを期待した。そこに天皇の落胤らくいんという歴が働いている。

戦乱の難を避けたのは一休さんだけではなかった。洛中のほとんどが焼け野原になっていた

から、条坊の寺社はもちろんのこと、西陣織などの生産機能も、堺のほかには北は丹波にも一時凌ぎに移っていた。のちに堺に各宗旨の大寺が開かれたり、泉州や丹波に機業が起こつて江戸期を通じて発展していくのも根は応仁文明の戦火を避けたこの移転にある。なべて、この国の処々方々に小京都が生まれ、平安のむかしや文化を伝えるのも、また、列島一律、平安文化が日本文化と名を変えて育まれていくのも、いつてみれば十年戦争のおかげなのかも知れない。

こうして堺商人の財力を背景に、一休さんは大徳寺再建に立ち上がる。八十一になつていたところが、再建のプロデューサーでありながら、大徳寺にいたのはわずかに一週間に過ぎない。養叟傘下の住持たちと反りが合わなかつたのか、自由人は、逃げるようにして新村に戻つていく。いい齡をしても、どこか子どもさながら意のままに行動する、そんなところが一休さんにはあつて、あとは酬恩庵から輿を仕立てて通うことになる。

自然、毎日とはいかなかつただろう。直線距離にしても三十キロはある。早朝に新村を出ても着くのは日の暮れで、おそらく数日置きの泊まりがけの通勤となつたことだろう。そして五年、ようやく仏殿、方丈、庫裏の修復がなり、翌々年には三門の東の土手つ腹に新たな出入口として惣門も完成して再建は終つた。

そのときの輿が、和尚の寺、つまりぼくらがいた寺の方丈の、広縁の高い梁からぶら下がつていた。

「一休さんはな、これに乗って通いよつた」

和尚の自慢の一つだつた。

いわれてみればそれらしい。ところどころ漆の塗りも剥げ、隅金具や縁金具や引手には緑青が吹いて、屋形もあちこち穴が開いて毀れたまま、木乃伊のように煤けたのが吊るしてあつて、暮れの大掃除にも、壊れてはいけなからと叩をかけることもなかつたから、轆の先まで遠慮なく埃が白く山のように積もつていた。

そんな和尚の自慢はほかにもいつばいあつて、

「大徳寺には塔頭はなんぼでもあるが、ここは別格や」

というのにもきちんと理由があつた。

大徳寺開山の宗峰妙超は、弟子をとるのを嫌つたが、それでも慕う二人がいた。一人はぼくらの寺の開山だつた徹翁義亨。妙超が紫野に禅堂を開く前から暮らしをともにしてきた愛弟子だつた。そんな妙超に、晩年、関山慧玄が門を叩く。徹翁より十八も年上どころか、妙超より五つも年輩だつた。つまり、徹翁からは、年上の弟子という捻れ関係になるわけで、おまけに関山は、妙超以前に、妙超の師にあたる南浦紹明に師事していたから、徹翁からすれば、弟子でありながら、師の兄弟子ということになる。

また、風貌からも二人にはちがいがあり過ぎた。頂相と和尚は教えてくれたが、方丈裏の

内蔵うちくらには徹翁の肖像画が遺のこっていた。和尚はそれを年に一度、虫干しに、方丈の衣鉢いはつの間に広げた。だからぼくもしつかり覚えていて。十五の少年の目にも、頑固さと鈍重さばかりが目立つ醜男ぶおとしこだつた。一方、関山の方は、頂相は知らないが、その後の動きからして切れのいい姿が浮かんでくる。

そこに一本釣りの師弟関係だから、ふつうなら関山への嗣法となるのだろうが、あえて妙超は徹翁を選び、関山の方は、花園上皇の依願にこたえ、嵯峨の離宮に開かれた新寺の開創に差し向けた。花園の妙心寺である。

徹翁は、そんな師の思いにどうこたえたか。妙超遷化せんげのあとを託されはしたが、そこに居を構えることを潔しとせず、伽藍南の外れに自分の塔所たつしよをつくつて隠棲、弟子を育てることに明け暮れた。いまは北大路南の雲林院うりんいんとなつてゐるあたり、平安初期には淳和天皇の離宮があつた。

塔所たつしよは、塔頭たつちゆうともいつて、もともとは弟子が師の墓所に建てた塔のことだが、それを見守るために傍に小屋掛けのような四阿あずまやをつくつたのが立派になつて、やがて法嗣、つまり後継ぎの居処すまいのようになつていく。

そんな塔所は、ふつうは伽藍を囲む寺域内につくられ、院となる。それをあえて徹翁は外に避け、さらに別の一寺とした。妙超の後継、法嗣となることへの謙退、憚りはばかがあつたからだろ

う。それが十年戦争で焼けたままになつていたので、伽藍のすぐ南脇に再興したのが一休さんだつた。和尚の寺である。

「いまの南門みなみもんも、あれは、もともとはうちの表門やつた」

そんなふうにもいつていた。

大徳寺には大きく門が三つあつて、東の惣門、これは一休さんがつくつたのだが、そして同じ東側の南の角に、いまは開かずの門になつてゐる梶井門かじいもんと、もう一つ、伽藍真南の電車通りにも棟門むねもんが開いていて、それをぼくらは南門と呼んで親しんだ。東の惣門が正門であるのに対し裏の勝手口のようなものだが、電車の駅に近かつたから、惣門よりもこつちの方が表門のようになつていて、簡素な造りだつたが、通りからは石段を駆け上がった先に大きく仰ぐ目線にあつたからか、小振りながらも威厳を見せて、くぐつたあとにまつすぐ伸びる松並木の参道がうつくしかつた。

「わしの寺も……」

和尚はときどきそういつた。

「いまは境内に入つてしもうとるが、むかしの境内いうんはもつと狭うてな、一休さんの再興で近うはなつたいうても、やつぱり大徳寺の外そとやつた。そうやないと、一休さんは徹翁てつおうさんを冒流ぼうりゅうしたことになる」



南門

徹翁が門外に蹲踞そんきよしてつくつたのを山内に入れてしまったのでは、自分の塔所を寺域ほすから外ほすしてまで己を殺そうとした徹翁の遺志を踏み躪むることになるというのだった。

さて、一休さんの寺といえば真珠庵が有名で、だから長く住んでいたようにいわれるが、真珠庵は一休さんが死んだあと、堺の尾和宗臨が一休さんの墓所としてつくつていいる。そんなことから、大徳寺といえは一休さんとなるのだが、一休さんは大徳寺とは深く縁があつても、大徳寺に住んだことがない。伽藍再建のときもそうだったが、ほかに一休さんが大徳寺にいたというのは四十七歳のときだけで、それもわずかに九日間に過ぎない。師の華叟の十三回忌法要のために重い腰を上げてやって来たのだった。その席でも兄弟子の養叟をあたりかまわず罵倒して、犬が後足うしあしで砂を蹴るようにして大徳寺をあとにしている。そのとき寄宿していたのが如意庵にょいあん。大徳寺七世言外宗忠ごんがそうちゆうの塔所で、大徳寺最初の塔頭だったが、いくらも経たずに焼失、それを養叟が再建していた。ところが、やがてまた消失、そのままになっていたのを五百年を経た和尚が再々建した。一休さんを慕つて止まなかつた和尚なのに不思議な奇縁だが、和尚も、やることなすこと、根は養叟宗頤に通じているのかも知れない。

それはともかく、一休さんは、伽藍復興のときには、まず徹翁の塔所、つまりぼくらの寺を再建して宿にした。それも和尚自慢の一つになっている。

「薪村から来た一休さんは、ここに住んどつた。わしの寺は一休さんの寺やつた」

和尚の口癖で、方丈庭もそのとき一休さんが指南してつくつたらしかつた。

「ほれ、あれは一休さん御手植えの松やな」

方丈の広縁に立つと顎でさし、ぼくらに教えたが、東から南にくの字に広がる方丈庭の正面には、鶴亀の築山つぎやまがこんもりあつて五葉松の古木が植わつていた。それが、よく見ると、葉の緑はかすかにくすんで、幹は燻いぶし銀のように鈍く光る不思議な松で、客が来ると欠かさず和尚は披露して、鼻の穴を広げた。

「たしかにそれだけのことはあつたと思う。とりたてて大きくもないのに、どこか訳ありそうな風情があつて、株元から人の胸丈ほどのところで、左と右、そして斜め前と三叉に幹が分かれて、いずれもほぼ水平に築山に傘を差しかけるように大枝を広げていた。松のうちでも五葉松は一段と成長が遅い。だから一休さんの頃から四百年、五百年を生きているといわれても嘘でない気がした。

そんな一日あるひのことだつた。

「これ、だれかわかるか？」

下の兄弟子が、古いアルバム片手に玄関脇の小僧部屋にやつて来て、なかの一枚をさしていった。和尚はいつもの東京行きで留守だつた。

写真は、下手へたに触ると縁こぼが毀れそうで、すつかりくすんでセピアに色抜けしている。けれど

一目でわかった。方丈庭の真ん中、松の木らしい大きな木があつて、分かれた幹の三又の凹みに墨染め姿で座っている。脳天の尖つたつるつる頭に、反つくり返るように背筋を伸ばし、結跏趺坐に印を結ぶ。ほかでもない、和尚だった。

勉強家の和尚は、奥の書院横の六畳間を書齋にしていた。東の白壁塀に面した坪庭に臨んだ小部屋で、奥に一間幅の押し入れがあつた。それが奇妙な造りで、襖を開けるとなかにもう一つ、半間の襖障子が仕組んであつて、それを開けると二段ばかり下つた先に、狭い板敷きのこれも六畳くらいの一間があつた。庫裡裏の軒下に付け足したのだろう、立つてようやくの梁の低い寒部屋で、窓も明かり採りもないまま、裸電球が一つ、無造作にぶら下がつて、薄暗いなか書架が三つ川の字に並び、周りの壁には造り付けの棚と箆笥が二棹立つて、上に柳行李が三つばかり乗っていた。外から見ても書院の続きにしか見えなかつたし、入り口がそんな仕込みになつていたから、秘密の隠し部屋のよな気がして、興味津々、東京行きや講演会で和尚が出かけるのを見計らつて忍んで入つた。

書架には哲学本や漢籍のほか、これは意外だったが、文学書に混ざつて少しの科学書も並んでいて、趣味の謡曲の和綴じ本は木箱に入つて平積みになつていた。

箆笥は桐のが一棹と、櫻だつたか栗だつたか、頑丈に角を飾り金具で縁取つた重そうなのが一棹あつて、桐の方には帖紙に包んだ女物の着物がびっしり詰まつていた。奥さんのだろう、

ぶーんつと樟脳と黴の臭いが混ざつて鼻を衝いた。けれど櫛の方はいつも鉤がかかっていた。柳行李は、これも何が入っているのか気にはなつたが、太い麻紐で襷掛けに縛つてあつたから戻すのが面倒で、だから開けたことはなかつた。

そして、これが探検の一番の成果だつたが、書架の上には茶箱だろう、横腹に○に茶の字の貼り紙のある大きな木箱が並んでいた。ちよつと秘密が隠れていそうふたで、蓋の上も埃まるだらけだつたのを、脚立を頼りにそうつと下ろした。開けると、これも、ぶーんと黴臭かつた。だから、何かあると期待したが、手紙や葉書の束ばかり。それを除けると底に少し厚めの茶封筒の束があつた。

「ほおーつ、株券やないか」

封を解いた下の兄弟子が口元を細めていった。有効なのかどうか、右から左に旧字で書かれている。

もう一つの木箱は、これは墨や筆や文具の類が、使い古しのもいっしょにごちゃ混ぜに入つていて、あとは和紙の束が入つた一箱のほかに、がらくた同然の小物がいっぱい詰まつた一箱もあつて、底を掻き回すと、大きな水晶玉や、不思議に花札も出てきた。そして半ば隠れるかのように書架の最下段にそつとあつたのがアルバムだつた。背表紙も黒や鼠色にくすんだものばかり十数冊あつて、それを玄関部屋に運んで盗み見するのが、留守を守るべくらの日課になつ

てしまった。

「あとは頼んだぞ。薬石やくせきはいらん。帰りは遅うなるから耳門じもんの掛金かけがねだけは外しといてくれ」

そして、こつ、こつ、こつ……、靴音が表門の向こうに消えるのをたしかめ、ぼくらは隠し部屋にすつ飛んだ。

そんな一日だった。

「べつびんや、へちやや、いうても、面の皮一枚の仕業しわざやな」

アルバムの一葉をさして、下の兄弟子がやりとした。レースの帽子に白いワンピース姿の女性が、方丈の広縁だろう、背もたれの大きな籐椅子に片肘ついて涼し顔に写っている。そして半開きの白い扇子片手に、軽く足組みしていた。

「奥さんだよ」

口を斜めに、にいつとといった。信じられんだろうといわんばかり。

ぼつと見に三十くらいに見えた。薄く微笑んでいる。それをいうと、
「阿呆あほういえ、どうみても四十過ぎとるやろ」

吐き捨てた。

きれいだった。けれど微笑の目元に、人を見放すような乾いたけしきも見えて、すぐにぼく

の心から離れている。

「これが、あの酒買ひ観音になるんやからな」

下の兄弟子は口達者だった。

小僧に入ったとき、奥さんはもう寝たきりだった。四、五年前に脳梗塞で倒れたらしく、和尚が介抱していた。といつてもやりきれず、ぼくらも手伝っていた。庫裡玄関のすぐ脇に、むかしは台所の土間だったのを改装して十畳ほどの和室をつくり、ベッドを入れて介護部屋に変えていた。だから、夏はそうでもなかったが冬はストーブを焚いて閉め切るから、前を通るだけでも籠もった臭いが障子戸を洩れてくる。それを嫌ったわけではない。母も同じだったから鼻は馴れてはいた。けれど心はちがつて、さらに他人となるとようすも違ってくる。

それが本人にもわかるのだろう、ぼくらが世話をするのを嫌がつて、

「和尚さまは？ ねえ、どこ？」

と和尚をさがした。子どもがいなかったせいもあつただろう、和尚しか信じない人だった。といつても和尚がいなときはあきらめて、そつぽを向きながらもぼくらの介護を受け容れて、とうす東司にも立つ。その姿が、法隆寺の、あの百済観音そっくりで、下の兄弟子が綽名したのをぼくらは隠れて呼んでいた。

「結婚前やろか、嗚呼レミセラブル無常いうんはこのことやな」

下の兄弟子は例えもうまかった。

そんな奥さんのだつたと思う、書架の文学書には紅葉や漱石に並んで荷風もあつて、大部の『断腸亭日乗』には、なぜか、あちこち付箋もついて、開くと少しの書き込みもあつた。けれどそんなものには目もくれず、すぐにもとに戻している。気になつたのは平積みされた薄茶の和綴じの謄本で、それを暇つぶしに引つ張り出しては、書院脇の、骨清庵といったが、一畳台目の茶室にごろ寝して眺めていた。表紙はいろいろで、絵巻物の俯瞰図のようなものもあつたが、なかはどこを開いても頁六行に大きくなくね文字が延々と続くだけ。とうとうたたりたらしら、たたりあがりらららとう、ちりやたたりたらしら、たたりあがりらららとう……、と端はなからさつぱりわからない。たちまち、午後の微睡まどろみに、たたり、たたりら……、とうとうとして、気づくと頭の上に和尚が立つていた。

「何をしとる」

いつ戻つたのか、跳び起きようとしたら、胸から本が滑り落ちた。

んっ？ 今度は、和尚が目を丸くした。

「翁おきなやないか」

拾い上げ、

「わかるんか」

と傍に腰を下ろした。

「呪文みたいやろうが」

にやりとした。怒られると思つたから気が抜けて、そのままこくりとうなずいた。

「そらそうや、わしにもようわからん」

そして教えてくれた。大凡、こんなふうだったか。

「……翁いうんは、能のうちでも特別なもんでな。いまは神事くらいでしかやりよらん。知つとるか？ 興福寺の薪能でも初つ端しよばなに、春日さんの庭でやりよるやろう」

いつもの茶事の講話みたいだった。

「そもそも、薪能いうんは正月を迎える神事やつたんやな。修二会しゆにえいうて、二月堂のはお水取りというとるが、あれも春迎えはるむかの神事やつた。咒師しゆしいうてな、二月堂の下にある若狹井わかさいから水を汲んで走つて上るんがおるやろ」

和尚の話は脈絡が無茶苦茶で、ひよいといろんなところに飛んでいく。

「あれが、最後の晩に篝火かがりびを焚たいて舞をやりよる。薪猿楽たきざるがくいうて、薪能のはじまりやと興福寺ではいうておるが、まあ、いうたら、修二会の打ち上げのようなもんやな。酒も入つとつたやろう、慰勞おどがてらに、おもしろおかしゅう、戯おどけ芸をやりよつたらしい。猿楽の猿いうんは、猿真似まねの猿、つまり物真似まねのことな、楽は、おもしろおかしくしゃべるといふことやろう。修

二会の行を満願したんで、すつきりしたんやろな、戯け寸劇をやりよつた。芝の庭でやりよつたから芝居でな、いまの狂言のようなもんやつたんやろう」

いわれて少しはわかる気がした。だから、うれしくて、返事をしようと思うのだが、妙に胸のあたりが息苦しい。

「翁も、たぶん咒師がやりよつたんやろう。いうても翁は戯けやのうて神迎えの儀式やな。新たな年を前に、祖霊を迎える儀式やつたんやな。篝火を焚くのも、神さま、ここに降つてくさいよ、と目印にするためやつた。そうやつてお迎えすると、今度は、できるだけ長いことしてくるようもてなした。お神酒を供えるいうのも、酔わして長居させるためやつた。それでうまいもんをいっぱい並べるんやが、喰うだけでは飽きてしまうから、あれこれおもしろおかしゅう戯けを見せた。翁いうんもはじまりはそういうもんやなかつたかな。せやから、修二会より、根はもつとむかしになるやろう」

「そうして、一息つくともたはじめた。」

「春田打ちいうてな、わしらの村でも、正月明けには村の者が神社の前の枯れ田圃でやりよつたわな。二人、鬼のような格好しよつて、どた、どた、地面を踏んで踊りよつた。それに、代掻いうてな、田圃を掘り起こすような戯けもしよつた」

しろかき？ これにはぼくも覚えがあつた。

春だった。蓮華が一面に広がる田圃に牛を入れて田を起こしていた。きれいな蓮華が畝立ての土のなかに埋もれていく。ちよつと残酷な気もしたが、それから一月、からからに干涸らびた田圃に上の池から水を引き、また牛を入れて掻きならし田植えの準備をする。そんな忙しい梅雨の最中にぼくは生まれている。

「あの頃はさつぱり理由もわからんぞな、なにを阿呆なことしよるんかと思うたが、あれは豊穰の祈りやつたんやな。戯けて踊りよつたんも、鬼と思うとつたが、じつは神さんやつた。一人は余所から来た神さんで、もう一人はそれを迎える村の神さんやな。どす、どす、地踏みしたんは田圃の精霊を起こすためぞ、おい、春が来たぞ、早よ、田植えの支度をせんか、そないいうてな」

「……………」

「そうや、おまえは、春日さんの御祭を知つとるか」

おんまつり？ 訊こうとしたが、喉が詰まつて声にならない。

「いまは大名行列やなんのと派手にやつとるが、もともとは簡素なもので、秋の豊穰を祈る神迎えの神事やつた。神さんいうんは、どうも姿形を見せとうないらしいてな、来るのも夜なら、帰るのも夜で、やつて来たんはええが、一刻も早よう去のうとしよる。それを退屈させんと長居させるために、夜も薪を焚いて、おもしろおかしゆう芝居をやる」

「それが薪能に……」

いつてるつもりが、やつぱり声になつていない。けれど思いは通じたようだった。

「まあ、そういうこつちや。せやから人が寄つて村ができたら、どこでも神事は生まれるわけで、新村も、薪能も、田辺にかぎらん、同じようにあちこちにあつたということやろな」

そして、どこへ行くのか、すうつと和尚は背を向ける。その背にぼくは呼びかけた。

「おつ、お、」

呼んでるつもりが、やたら息苦しい。

と、隣で声が出た。

「ちよつと？ どうしたの」

二つ並べた蒲団からだつた。

「さつきから、唸つてばかりで、悪い夢でも見てたの？」

どういう理屈か、いまだに年に二、三度、小僧のむかしに戻つた夢を見る。そしてたいいは魔うなされる。寒い冬は滅多にないが、寝苦しい夏場に多い。いまだに落第小僧を引きずつていくのか。

そうしてぼくらの探検は続いたし、書棚の陰に、これも客から贈られたのだが、禅寺には似合わない、あの頃売り出されたばかりの赤い小さなポータブルテレビがあるのを見つけ、小僧

部屋に運んでは、流行はやりだした妖しい深夜番組に生唾を飲んだりもした。そして、あの一休さんの御手植えの松は、二年目の秋口だった、見事だった三叉の一つが台風にやられ、分かれ目からばっさり折れた。

「寿命かも知れんな」

和尚はいつたが、いまはどうなっているか、逃げた小僧はあとを知らない。